國文學目次

はしがき……一
古今集序……二
土佐日記……六〇
首途の條……六一
船中に若菜を視たる條……六六
舟子の唱歌を聞く條……六九
住吉の濱にて風波にあふ條……七二
枕草子……七七
太進生齒に呼の狹きをせむる條……七九
木の花は……八九
草の花を誰か尋ねんと答へし條……九五
このきみと秀句せし條……一〇八

國文學目次 畢

名おそろしきもの……一一四
竹取物語……一一六
發端の文……一一八
石上中納言子安貝を索むる條……一三一
伊勢物語……一四四
東下りの條……一四七
生駒山を見たる條……一五四
惟喬親王を訪ひ奉る條……一五六
右大將の奉れる石に歌そへたる條……一六二
源氏物語……一六六
桐壺の更衣のなきあとの條……一七〇

國文學

講師　關根正直講義

國文とは、古文の別稱にあらず。太古以來今日迄本邦に行はれ來し文章を、總べて國文とは云ふべきなり。されば茲に講ずるも、あながち古文に限るにあらねど、先づ中古の文より始むるは、抑、故あり。予先年、日本文學史といふ標題の下に、太古以來近世に至る迄、歌文の沿革學事の盛衰等、よろづ文學に關する歴史をいさゝか講述せしとありしが、それには時間の都合ありて、唯一渉り文學の變遷と、特殊の事件のみとを掲げたる迄にて、各時代毎の、諸種の文躰、歌の形式の如きは、總べて釋義を略せりき。今度、又更に講義錄を發行するにあたり、館主の求めにより、前年講ぜし文學史の補遺ともなり、且は一般の學者(前年の文學史を讀まぬ人のため)の、資益ともならしめんとて、古來の文章中より、精を取り粹を拔きて、その義を講ずる事と定めつ。

折こそよけれ、現今本館生には予が先年編述せし歴代文學といふ書に就き

て、諸種諸躰の文章を講ずるを以て、それを移してこゝに載する事とはなしつゝされど奈良朝以前の文は、高古に過ぐれば姑く措き平安朝時代の文より始めんとす。但し文辭の難易よりいはゞ鎌倉時代以後の文こそ、用語格法、概して平易にはあれども、文學史の順序に據り、文躰の連絡、古今の變遷を示さんには、かく次第する方よからんと思へばなり。讀者これを諒せよ。

古今集序

古今集序は、今より九百九十餘年前の人、紀貫之の勅を奉じて撰みたる所なり貫之は、もと、和漢の學に通じ、殊に和歌に於ては、人麿以來の神仙とも云はれたる人なり。當時かゝる文は漢文にかく例なりしに、貫之は、さすが一家の意見ありて、かく　勅撰の集に和文の序を加へ、空前の例を創めつ。是れ實に本邦序文の嚆矢なり。扨、此の古今集には別に紀淑望のかけりと云ふ漢文の序ありて、貫之は、そを和譯せしものなりとの說あれど、おのれは反對の鄙考あり、折を得て論述せむ。

やまと歌は、人の心を種として、萬の言の葉とぞなれりける

此の一句の大意は、和歌といふものは、人の心がもとにて、其の心のうつるまに〳〵、幾千萬の詞にもなりたるものなりといふなり。

さて、其の文字につきて大要を略解せんに、やまと歌は、から歌に對へたる名にてやまとは、もと、大和國の事なるが、歷代の　天皇此の地に都を定め給ひて、久しく、其の國が日本の首府の如くなりしを以て、古より今に至るまで、日本全國をもやまと〳〵といふなり。

人の心といふ文字は、先輩も往々疑ひし所にて、或人は、顯昭の古今抄に、ひとつ心とあるを是とし、ひとつ心とは謂ゆる一心にて、萬の言の葉に對して、文章上の趣味ありといふ。

萬の言の葉とは、澤山の詞といふに等し。必しも万個の言葉にあらず。万葉集といひたりとて、和歌万首あるにあらず。

世の中にある人、こと、わざしげきものなれば、心に思ふ事を、見る物、聞く物につけて、いひ出せるなり。

此の大意は、世の中に生れて居る人は、種々の事に出遇ひ、或は樂み、或は悲み、怒

ることあり。笑ふことあり。これ、皆、心のしわざにて、其の心におこれる千萬の感情を、花鳥風月等に附托して、うたひ出せるもの、即、歌なりといふに在り。

前の「よろづの言の葉」こゝの「しげき」「見る」「聞く」等は、おのづから文をなして面白し。讀む人味ふべし。

花に鳴く鶯、水に棲む蛙の聲を聞けば、生きとし生けるもの、何れか歌をよまざりける。

大意は、試に花間に囀る鶯、水邊に鳴く蛙の聲を聞け、其の聲音に、長短曲折のあるところ、皆、是れ歌にあらずや。然れば、歌は、鳥、獸、虫の類に至るまで、皆うたふものなるに況して、人たるものをや、といふなり。

花に鳴く鶯とは春の意を含みたる言葉なり。

水に棲む蛙とは、田に鳴くかへるをさしたるにあらず。彼の河鹿をさしたるなり。万葉集にかはづとあるも、亦、皆、かじかをさしたり、これは、前の春の意に對して秋のこゝろを含めり。

生きとし生けるものとは、此の世に生活するものゝ意にて、動物一般をさしたるものなり。或は、山川植物の類までも、此の中に入れんとするものあれど、よろしからず。貫之の意は、かくまで廣くさしたるにあらざるべし。又、風聲、水音は、自然の美にて、此の世に生活するものゝ、とりて以て、歌ひいださん料にこそ供すれ。風聲、水音、そのものが、自、其の心をうたひいだしたること、千古、いまだこれあらず。

何れかは俗に何物かといふに同じ。何物か歌をよまざりける、歌よまぬ者はなしとの意。何れかとあるかの字は反語なり。

力をもいれずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の中をも、和らげ、猛き武士の心をも慰むるは、歌なり。

大意　歌となりて、萬物を感ぜしむる効驗をいへば、腕力を用ひず、たゞ、やさしき言葉の上にて、天地の神靈に感動を與へ、又、吾等の眼力の及ばぬ魑魅の類に嘆息の聲を發せしめ、男女間の交際を睦くし、なほ、狐狸も三舎を避けん、武士の心をも慰むるは、これに外ならずといふ意なり。

此の句は、毛詩の序なる、動天地感鬼神莫近於詩といふを本として、却りて、其の

上に出づ。何となれば、力をもいれず、云々の句は腕力を以てするも到底動かし得さる天地をも、一首の歌にて動搖すべしと詞の上は只動かすと丶聞かせて實は感動せしむるとなればなり。以下の句も皆それ〳〵、趣味の唯ならぬを思へ。

天地を動かしといふは、科學的觀念よりいへば、元よりあらぬ事ながら、文學上より云はゞかゝる言葉を用ふる事、常なり。諸者、理屈に拘泥して、此の趣味を忘るゝことなかれ。

鬼神のゐには和名抄に於爾とあり。文字と詞とには、鬼神、於爾などいへど、吾人の目に見ゆることなし。歌はそのものに、感動を與ふといふ。其の功德の大なるをたとへたるに過ぎず。

男女の中の例は、伊勢物語に、風吹けばおきつ白波たつ田山云々とあり。

猛き武士の心の柔和になる例も、昔より少からず。雄略天皇の故事、日本紀に見ゆ。

此の歌、天地の開け始まりける時より、出來にけり。

大意　さて、此の歌といふものは、決して、かりそめのものにあらず。そも〳〵、開闢の始めより、出來たりとなり。

是より、歌の始めをいふ。前には、其の原由と功德とを述べたるまでなり。

さかあれども、世に傳はる事はひさかたの天にしては、下照姫に始まり、

大意　されど、歌として、今の世まで傳はるものは、天に在りては、下照姫の歌を始めとす。

さかあれどもは、前に天地の始まりける代といひたれば、更に此の文字を加へたるなり。

世に傳はるは、後世に殘り傳はるの意なり。

久方は、天といふ詞の枕詞にして別段の意味なし。或人は此の久方といふは借字にて「日則方」の意、日の光の則す方の天とつゞくなりと云へり。

下照姫の事は本註に詳なり。曰く「下照姫とはあめわかみこの妻なり兄人の神のかたち、をか谷に映りて、輝くをよめる夷歌なるべし。これらは、文字の數も定らず。歌のやうにもあらぬ事どもなり」といへり。さて、其の歌は「あめなるや、をと

たなばたの、うながせる、玉のみすまるみすまるの、あなたまはや、みたに、ふたわたらす、味耜高彦根の神そや」とあるもの是れなり。古事記には、此の國土にての事のよしあれど、此の序は、日本書紀を正しきものとして、かくは記しゝものならん。

あらがねの地にしては、須佐之男命より起りける。

大意　此の國土に於ては、實に須佐之男命が歌をよみ給ふを以て始めとなす。

あらがねは、地の枕詞なり。在家根に書きて、御殿をミアラカといふも在家の意ゝ土は殿を建つる根本なる故なりといふ說あり。

須佐之男命の御事は、本註にもかゝとあれど、茲に掲げず。其の御歌は下文にあり。

千早振神代には、歌の文字も定まらず。すなほにして、ことの心わきがたかりけらし。

大意　神代の時分は、心に感ずる事を、人が聞きよし聞きあしとに拘はらず。口より言ひ出でたるものなれば、其の文字も定まらず。しかとは其の心のほど、辨へがたし。今見て、しかるのみならず、當時もしかりしならん、と推察したるなり。

千早振は、神といふ枕詞なり、此の詞は、イチハヤブルの約にて荒ぶと同意、實は、强神をいふ事なりしが、今はすべての、神の枕詞となれり。

歌の文字も定らず、の文字は、必しも、筆して書くをいふにあらず、古は何の詞にも、輕く用ひしものにて、文字の定まらずとは、詞の數の、五文字、七文字ときまりたることなしといふ意。

すなほは、質朴率直のことなり。必竟、ありのまゝといふに等し。

ことの心　は、其の歌の意味をいふ。

けらしは、俗語に、アッタラシーなどいふ言葉なり。

人の世となりて、須佐之男命よりぞ三十文字あまり一もじはよみける。

大意　さて、人皇の代になりてよりぞ、當時の如く、心得やすき、三十一文字によむ事になりたるなり。

人の代りとなりて、の下に須佐之男の命より、　の八字あれど、此の、八字は、前にもあり。蓋、後の世の人誤りて寫しゝより、かくは、なりたるならん故に、これを省きぬ。みそひともじ、　の歌は、須佐之男命のよみ給ひし外にも、尙、一つ、二つあり。

よりて、命の歌と共に左に掲げん。

「八雲たつ、いづも八重垣、つまごめに、八重垣つくるその八重垣を」　須佐之男命作

「あか玉は、おさへ光れど、白玉の、君がよそひしたふとくありけり」　玉凡賣の作

「おきつ鳥、かもどくしまに、わがゐねし、妹は忘れじよのことごとに」　稚々手見命の作

さて、須佐之男命の、此の歌をよみ給ひしは、命天上より此の國土に降り來給ひし折、出雲の國なる肥河上の鳥髪の地に、往き給ひしに、翁と嫗とが、一人の小女を抱きて、打泣きゐたれば、命あやしみ給ひて、其の故を問へば、此の地に、八俣遠呂智といふものありて、此の小女を食はんとするを悲しみて泣くなりといへば、乃命は、此のものを退治して其の小女を娶り給ひ、同國の須賀といふ處に宮造し給ひたるに雲の立騰りけるを、御覽遊ばされて、よみ給ひしなり。御歌の意は己が宮を造るにつけて、無心の雲まで八重垣をつくりてくれる事の、嗚呼、八重垣よ、といひ給ひたるなり。八雲たつは彌組立の意にて、雲の多く重なり立てるをいふ。八個八色の雲の事にはあらず。八重も然り。歌の末字のをは、よといふ詞に等し。即、感歎の意を含む。

かくてぞ花をめで、鳥をうらやみ、霞をあはれび、露をかなしぶ心詞多くさまざまになりにける。

大意　しかる後、或は花を賞翫し、或は鳥の音色を羨み、或は、霞を見て、世事を歎き、或は、白露の玉に似て愛らしきをよろこぶ事などの意と詞とが多く、さまざまになりたるなり、といふこゝろなり。

かくてぞ　は、上を受けて、下を起こす言葉なり。

めで　は、愛の字にあたり、うらやむは、羨慕の意なり。あはれみは、憐の意として、苦しからず。

かなしぶ　は、今日の詞にては、悲歎の義なれど、昔は、可愛、可憐の意にて彼の「あまの小舟のつなでかなしも」とあるは網手をひく樣の面白きをいひしなり、

心詞は、心と詞との二つをいひ、物に感ずる心と、口より發する詞とをさし、而して、文の初めに「人の心」「萬の言の葉」とあるに遙に應じたるなり。

遠き處も、出たつ足もとより始まりて、年月をわたりて、高き山も麓の塵土よりなりて、天雲たなびくまで、おひのぼれる如くに、この歌もかくの如くなるべし。

大意　支那の詞に千里の行も足下に始じむといふより出でゝ遠方に行くも、其のもとは、一足ふみだすよりおこりて、遂には、幾月も、何年も、かゝる程の處に到着し、又、いかに、高山も、麓の塵土が積り重り、漸、天雲と、肩を比ぶる程のものとなれるなり、而して、此の歌も、亦、かくの如きものならん、といふ、

何事も、僅少なるもの、其の源となり、漸を逐ひて、廣大なるものとなる理を述べて、此の歌の、漸々、盛りになりゆくべきに譬へたるなり。

かくの如くなるべしとは、其の前句は、過去を指しながら、一轉して、未來をいひたるものにて、作者の意を用ひし所、見ゆ。前に「ことの心、わきがたかりけらし」は、現在を以て、過去をも、はかりたるなり。文筆の自在なるにあらずんばいかで、かくの如きを得む。

難波津の歌は、帝の御始めなり。

大意　「難波津に咲くやこの花、冬ごもり、今を春べと、さくやこの花」といふ歌は大御代の初めを祝ひ奉りし歌なりとの意か。

此の文は、言辭簡畧に過ぎて、甚、解し難し。本居宣長翁は、曰く、「さて、難波津の歌は

天子の御事をよんだ歌のはじめぢや」といへり。なほ考ふべし。

又、此の句の下に、「おほさゝぎの帝の難波津にてみことときこえける時東宮を互にゆづりて、位につき給はで三年になりにければ、王仁といふ人のいふかり思ひて、よみてたてまつれる歌なり。この花は、梅をいふなるべし」とあるも、亦、例の杜撰なり。第一に王仁の歌とする、いと覺束なし。第二に此の歌は、御即位後の歌なれば、王仁の詠る筈なし。第三に、この花は、諸木の花をさし、唯梅花のみと限らず。さて歌のこゝろは、難波津におはします　天皇は、今は、既に、春に遇ひ給ひたりとて、いやさかえに、さかえ給ふと、いふこゝろにて、木の花とあるは、かしこくも、天皇に譬へ奉りたるなり。冬ごもりは、春の祝詞なり。

淺香山の言の葉は、采女の戯れよりよみて、

大意　彼の、安積山かげさへ見ゆる山の井の、あさき心をわが思はなくに」といふ歌は、采女の戯れより、よみたるものにてとの意にて、これも前句と同じく詞足らざる心地す。

又、此の歌は、妾が心、君に淺からんや、いともなつかしく思ひまゐらするものを、。

といふ意にて、其の由來の大略は、本註に明かなり。曰く「かつらぎのおほきみ、を。みちのおくへ遣したりける時に、國の司、ことおろそかなりとて、まうけなどしたりけれど、ずさまじかりければ、采女なりける女の、かはらけとりてよめるなり。これにぞおほきみの心解けにける」と。

一本に、此の歌の下の句を淺くは人を思ふものかはとしたるはいかゞ。

このふた歌は、歌の父母のやうにてぞ手習ふ人の始めにもしける。

大意　此の二首の歌は初めのは、大御代の木の花と共に榮え終のは、大君の怒の、山の井の影と流れしほどの芽出たきものなれば、小供の手習の初めを祝ひて、難波津は、男歌、安積山は、女歌なるが故に、小供にとりて、父母のやうにといへるなり。

或書に、此の文の心を誤りて、二首の歌を、世にありとある歌の親としたるは、用ふべからず。

中古は、學齡兒童に、教ふるに、必、この二首の歌を以てしたりしとは、源氏物語の若紫の卷に、紫の上の幼き時、祖母尼君が「まだ難波津をだにはかゝしくつつ

け侍らぬ」といはれしに、「あさか山淺くも人を思はぬになど山の井のかげ離るらん」と源氏、君が歌よみ給へるを見ても、知るべし。然るに後世「いろは」の爲に壓倒せられて、今日は、そを手本として手を習ふ人絶へてなし。歌の心よりいふ時は、難波津の歌は、今の「いろは」より、勝れるに相違なきも、便利の上よりいへば、後者の方、遙に上なり。世の中は不便のものの捨てられて便利のもの殘るは此れを見ても、その理を察せらる。

そも〳〵歌のさま六つなり。からの歌にも、かくぞ有るべき。

大意　さて、其の歌といふものには、元來、体、六つある事なるが彼の外國の詩にも、定めて此のやうなるべしといへるなり。

そも〳〵は其も其もにて、前にいへる詞をうけて後文を起こす文字なり。後の人、此法を悟らず、發端の辭と思へるは、誤謬の甚しきものなり。

歌のさま六つなり　とは、歌に六体あり、といふ事にて、これは、貫之が唐詩に六義あるを知りながら、殊更に我れを主とし彼れを客としてかけるにて、當時、朝野の學者才子、大抵、唐詩に耽りて、太古より我が國に固有の歌文ありしを忘れ

んとするを歎き、わざとかく我れを貴くし彼れを卑しめたるものならし。かくぞあるべきといへるも、實は、貫之の如き、漢學にも通ぜし人は、かくありと確乎と定めても苦しからざるに、そを知らぬさまに、此の工合であらうとしたるものにて、紀氏、當時の心中、豈、想像の及ぶべき處ならんや。後世の歌人、先、指を貫之に屈するもの其の因なきにあらず。

其の六種の一つにはそへ歌

大意　今、六種ありといひたる、其の第一をいへばそへうた是れなりといへるなり。

六種とは、風、賦、比、興、雅、頌の六義をさしたり。

そへうたは、即、風にあたる。されど、古より、今に至るまで、實は、此區別なし。但そへはよそへと同言にて諷の義なるべし。

此句の下に『おほさゝきのみかどをそへたてまつれるうた難波津にさくやこの花云々といへるなるべし』とあるは、後人の註にて、紀氏の眞筆にはあらず。殊に、なるべしと疑ふは、こゝの文勢に於て、決してあるまじきことなれば、讀者よく、其の意を味ひて後人の加筆なる事を知るべし。されば『ひとつにはそへうた、ふたつにはかぞへうた』と讀むべきことなり。

ふたつにはかぞへうた

句の意おのづから、明白なり。然れども、かぞへうたは必しも、賦の義にも當らず。又此の句の次に『咲く花に思ひつくみのあぢきなき身にいたつきのいるも知らずて、といへるなるべし。これは、たゞごとにいひて、物にたとへなどもせぬものなり。此の歌、いかにいへるにかあらむ。其の心得難し。いつゝにたゞごとといへるなむこれにはかなふべき』とあるも、文の脉、紀氏の筆と見へず。歌は大友黒主のよみしものなれば、大意をいはんに、つくみは、鳥のつぐみと、咲く花に思ひつくみとを取りまぜていひ、一首の意は、咲きてある花の面白きに、恍惚として、思ひきる事能はず。つひに我が身に所勞の發するも知らずとは、あゝと嘆きたるなり。

尙、註者が此の歌のかぞへうたにあたらず、却りて、第五のたゞごとうたなる『いつはりのなき世なりせばいかばかり、人の言の葉うれしからまし』といふが此

の第二にはあたるべし、といひたれど、前にもいひし如く、我が國には、古より、歌の道に、かゝる區別なきことなれば、註者の辯は、夢中美人を評せるに等し、何の益かあらん。

みつには、なずらへうた

これは、第三の比に當れり。此の下に『君がけさあしたの霜のおきていなば、戀しきごとに消えやわらむといへるなるべし。これは、物になずらへて、それがやうになむあるとやうにいふなり。この歌、よくかなへりとも見えず。たらちねの親のかふこのまゆごもり、いぶせくもあるか妹にあはずて、かやうなるや、これにはかなふべからむ』とあり。始の歌は、男の歸る時に、女のよみしものにと、謂はゆる戀歌なり。其の大意は、君が、今朝起きて行き給はゝ、君をこひしと思ひつゝ、月日を渡ることならむとなり。おきては起と借と兩訓相等しきをいひかけ、消えは、こゝろのきえと、露のきえとをいひかけたり。此の比は、一物に比ぶる事にて、此の歌、よく、其の意をつくしたりとも見えずとて、さて、終りの歌をいだしたり。此の、終りの歌の意は、羅の繭にこもり居て、鬱々たるにも比ぶべく、われは、我が

意中の女にあはずして、物憂し、となり。上の句はすべて序なりと知るべし。たらちねは足乳根の義といふ。母の枕詞なり。思ふに此の歌が、果して、第三のなずらへ歌に適合するか疑はし。

よつにはたとへうた

これは、第四の興にあたり、万葉集の譬喩歌に近きものと思はる。されど萬葉の作者は、これがたとへうたなりとおもひて、よみしものにあらざるべし。此の句の下に『わが戀はよむともつきじわりそ海の、濱の眞砂はよみつくすとも。といへるなるべし。これは、よろづの草木鳥獸につけて、心を見するなり。この歌は、かくれたる所なむなき。されど始めのそへ歌と同じやうなれば、少し、さまをかへたるなるべし。すまの海士の汐やく煙風をいたみ、思はぬ方にたなびきにけり。此の歌などや、かなふべからむ』とあり。又これも、後人の註せしものにて、本文にあらされど、ひとわたり、茲に講ずべし。前の歌のこゝろは、我が戀の物思ひの繁きことは、其の數かぎりなくして、とても數へつくす事はかたからん。彼の濱邊の小石は、數限りなきためじなれど、そを一々計算しなは、終には、其の數の幾何

なるかを知る事もわらんが。といひ上の句へかへりて、我が物思ひの數多きは濱の小石の比にわらずとなげきたるなり。

ありそは荒磯にて、實は海のありそといふべく、ありそ海とは、いひ難きことなるが、そのかみより、誤謬のまゝ使用する事となれり。

此の歌はかくれたる所なむなきとは、此の我が戀はの歌は、眞にたとへうたとすれば、其の本義を明白に表出せず、隱れたるやうあるべきに、さにあらずして、此の歌の如く、あらはに、其の本旨を見はすは、たとへ歌としては、惜むらくは、適當せずといふ意なり。

さまをかへたるなるべしは、此の歌は、たとへ歌としては、適當せざれど、かくては第一のそへ歌と同じやうになれば、少しよみざまをかへたるならん、との心なるべけれど、其の詞の確然せざる所いよ〳〵我が國に六義のなかりしを知り得べし。

さて、後の歌のこゝろは、我が意中の人の、わが方へ通はずして却りて、楽外なる他人へ靡き居るを、嘲ちたる詞にて、須磨の浦の海士か沙をやく煙が、風の强きに、よそへなびきたり、といへる心にて、我が戀の事は、少しも詞にあらはさずして、偏に煙に附托してよめるなり。故に曰く、此の歌などやかなふべからむと。

いつゝにはたゝことと歌。

たゝこととは、下の注によれば、ことのとゝのほりたゝしきをいふ由に聞ゆれど、土佐日記にある『たゞことと』といふ意は、ありのまゝ、といへるものなれば、予は註者の言を採らず。盖紀氏の意にては、ありのまゝの歌といはれしなるべし六義の雅にあたるなり。

註に『いつはりのなき世なりせばいかばかり、人の言の葉うれしからまし。といへるなるべし。これは、ことのとゝのほりたゝしきを云ふなり。此の歌の心、さらにかなはず。山ざくらあくまでいろを見つるかな。花散るべくも風吹かぬよに。此の歌とやいふべからむ』といへり。

前の歌の意は、此の世に、虛言をいふものなき事ならば、いか程人の詞が、うれしく聞ゆるならん。さるを、虛言のある世ゆゑ、うそも、まことも、親切も、不親切も、一樣に聞えて、何をはなされても、うれしく感じたる事なしとなり。

とゝのほりは、漢字の整にあたる。とゝのふとゝふを、とゝのほりと延ばしたるなり。

此の歌のこゝろ、さらにかなはずとは、前の歌のこゝろは、たゞことと歌にあたらず、といひたるなり。多くの書に、此の下に『とめうたとやいふべからむ』の十二字あれど、そは、後の世の誤寫にて、前に記したる如くなりしを、ことゝのとめ、何れも字形の同じきより、かくうつし誤りたるならむ。

後の歌は續古今集の春部にある、平乘盛の詠なり。太平なる大御代にあひ、花の散りさうなる風もなければ散易き山櫻すら、充分に賞翫するを得たり。といふこゝろにて、いと目出度歌なり。此の歌が、當時をありのまゝにいひたりや否や は讀者の判斷に委ねん。

むつには、いはひうた

第六の頌にあたり。頌の意は、詩序に美盛德之形容以其成功告神明者也といへり。此のいはひとは、齋といふ字の訓にて、昔は、神を齋くに用ひしが、後世は、世を祝し、人を賀する時にも、用ふることゝなれり。

註に『この殿はうべもとみけりさき草の、みつはよつはに殿づくりせり。といへるなるべし。これは、世をほめて、神につぐるなり。此の歌とは見えずなむあるかすが野に若菜摘みつゝ萬代をいはふ心は神ぞしるらむ。これらやすこしかなふべからむ。おほよそ、むくさにあかれむことは、えあるまじきことになむ』と見ゆ。

前なる歌は、催馬樂の呂、歌にて殿舍の壯大なるをほめたるなり。意は、おのづから、明けしうべは、俗にげにもといふ詞に同じ。漢字にては宜の義にあたる。さき草は幸草の義にて今の百合なりといふ。此の草三葉にわかれて花咲く故に三葉の枕詞となるとぞ。殿舍の三棟四棟と相並ひ相對したる躰を花に準へて形容せしなり。

みつはよつはのはの字に、つきては二説あり。一説は、は、軒端のはなりといひ、他の一説は、一間二間のまの音便なりといふ。何れにしても此の歌の心を損ずることなし。つまり壯大なることをいひたるに過ぎず。

これは、世をほめて神に告るなりとあるは、甚心得ぬ事なり。頌ならば或は神明

にも告げん。然れども、昔より、我が歌にては、其の功德をうたふが、即神に告げ。だるに等しきなり。三十一文字の中にて、德をほめ、且神に告げんは中々に容易ならず。よし、容易なりとて、あからさまに神に告げんとて歌よまば、必其の語調の拙なるに至らむ。

此の歌、いはひうたとは見えずといへるも、註者の偏見なり。前の歌の心、やゝいはひうたにかなへるやうおもはる。

後なる歌は、此の集の賀部にありて、『内侍のかみの右大將藤原朝臣の四十の賀、したる時に、四季の繪かけるうしろの屏風にかきたりける歌』と見えたり。其のこゝろは、初春、春日野に出でゝ、若菜を摘みながら、我が君の壽、萬代もながく經給へとて、いはふこゝろは春日の神こそ、しろしめし給はめとよみたるなり。但、春日の神は、藤家の遠祖を祭れる社なればなり。

これらやすこしかなふべからむとあるは、此の春日野の歌は、いはひうたとして、先、よろしき方ならんの意なれど、神そしるらむとありたりとて、必しも、神に告ぐるこゝろなりとはいひ難し。

かくて註者は、六義の事を結論して、和歌を六躰にすることは、到底むつかしきことゝしたり。固より、いはずもがなの論にこそ。香川景樹翁が此の文句を痛評して、『畢竟、五十歩の論にて、いづれとるに足らず』といひたるは、さすが一見識ありといふべし。

今の世の中、いろにつき、人の心、花になりにけるより、あだなる歌、はかなきことのみいでくれば、色好みの家に、うもれ木の人知れぬことゝなりて、まめなるところは、花すゝきほに出すべきことにもあらずなりにたり。

大意　近來は、兎角、世道人心が虛飾に流れ、浮華を忍び、古の率直質朴なる氣風を失ひしにより、浮華なる歌、輕々しき詞のみ、人の口にのぼることゝなりたれば、斯道は、好色家の玩弄物の如く思はれて、厳然たる人の前、正しき場所には、出すべからざるやうなりたりとなり。

これは、貫之が斯道の衰頽せるを慨嘆したる詞にて、當時の國史、國文を讀まば、如何に、唐詩が盛んにして、如何ばかり、歌道が衰へしかを知り得べし。尚、貫之が當時、此の勅撰集の爲に、非常に心勞したる有樣見ゆ。而して、其の結果は、吾等が

歌集といへば、必、この集を推し、古の作者といへば、又貫之を數ふることゝなれり。予は此の序文を讀む毎に、貫之其の人の功と、當時の趨勢とを想像せざることなし。曾に昔時を追想するのみならず。今日、果して、貫之ありや、斯道の盛衰は、如何ぞやとの觀念が、我が腦中に浮び來らざるはなし。

いろにつきとは浮華といはんが如し。花になりも同じこゝろにて虛飾になることなり。

あだは輕薄の意なり。復讎の詞と、まがふべからず。はかなきは輕々しき意なり色このみの家とは、爾はゆる好色家のことなり。

埋木は人しれぬといふ詞の冠辭。此の處の意は、好色家の手に埋れ了りぬ、といはんが如し。まめは、實直のことなり。

花ずゝきは、ほに出の冠辭。ほに出は、あらはすといはんが如し。

此の處の文章の結構をいへば、世の中と、人の心と、相對し、いろにつきと、花になりと、又、相對し、あだ、はかなき、色このみの家、まめなる所、埋木、花すゝき、何れも、並ひて、詞のあやをなせり。

そのはじめを思へば、かゝるべくなむあらぬ。いにしへの世々のみかど、春の花のあした、秋の月の夜ごとに、さぶらふ人々を召して、事につけつゝ、歌を奉らしめ給ふ。

大意、さて、溯りて、歌の起原を尋ぬるに、決して、好色家の手に埋れぬべきものにはあらず、上代の諸々の天皇は、必、これを翫び給ひて、春の花の朝、若くは、秋の夜の月などを御覽ぜられし時は、その左右に侍ふ臣下にも、仰言あらせられて、歌をよめ、との御詞もありし程なり。

此の句の前には、近世歌道の衰頹、此の如しといひ、大に嘆息する意を含め、こゝに至りて、更に、上代を攷ふれば、畏くも、天皇陛下すら、其の臣下に仰事ありて、歌を奉らしめ給ひしなり、といひ現在、又は、未來の人に、奮激して、斯道の爲に、力を盡すべき事を述べたり。

春の花のあしたといふ詞は、いかにも、面白き詞に聞えて、後世の人、常に用ふる事なるが、これにつきて、景樹翁の論は、稍、參考に供すべきことゝ、思はるれば、こゝに記さん。景樹翁の曰く、『花のあしたとあるは、聊、足はぬ心地して、打まかせたる詞にあらず。こは、月の夜といふに對へたるなれど、月の夜は、咎なきなり。されば

と、これよりふるく、萬葉中にも、時雨の秋、紅葉の山などの類多ければ、猶、さてありなん。委しくは別に論あり。さて、此の類の詞、漢文の詞より、流れ來たる弊にて、紀氏も、時の勢にかゝりて、たまく、是れば、かりの事は、あるなるべし」といへるは、尚ほ尤の說と聞ゆ。予が前に對句の文字をあげたるも、皆、漢文的趣味より、かくなりしものなりとは古くよりの說なり。固より、漢文にても、よきところは、取りて、少しも差支なき事なれど、是れらの對句を以て、六朝の四六併儷體に倣ひたりとするは、酷評なるに似たり。試に、古き祝說宣命、風土記の逸文などを見よ、何れも對句、疊句を搏へ、詞を並べ、相照應せしめて、文に章をなしたる類少からず。紀氏の此の序文も、莊嚴に、且、うるはしくかゝんとて、斯く對句など搏へしならん。凡そ、對句は六朝文の專有にあらず。我が國の古文に、甚、多かるに、唯、この序文をとちへて、直ちに六朝文躰に則れりとするは、一むきなる說ならずや。按ふに、此の文は、全く古き祝說、宣命文の躰格を一變したるものとも云はまほしきなり。

さぶらふ人々は、宮中に伺候せる人をいふ事につけつゝは、なにかの事につけてなり。下の文句、即、是れなり。

あるは、花をもてあそぶとて、たよりなき所にまどひ、あるは、月を思ふとて、しるべなきやみにたどれる、心々を見給ひて、さかしおろかなり、としろしめしけん。

大意　或は花を賞翫せんとて、山深く、人氣なき所にも惑ひ込み、或は、月を愛翫して、雨夜の空、木隱の道をも厭はず、迷ひ入る風雅の情を、天皇が御覽あそばされて、さて、其の歌の心々によりて、其の人々の賢愚を見分け給ひし事にやありけんとなり。

たよりなきところは、山深く、人氣なきところの事にて、花を尋ぬる心の甚しくして、何處へ行くも、心にかけぬ心なり。

しるべなきやみは、雨夜の空、木隱の道などいはんが如し。これも、心は前句におなじ。

心々を見給ひは、天皇が、其の臣下の作れる歌を御覽ぜられて、其の作者の心底を、見計らひ給ふといふ事なり。さかしは、漢字の賢にあたる。

さて、君は君、臣は臣として行儀正しく座せる時は、其の人々の心の底の曉られ

にくきもの故、賢愚の程さすがに顯れぬものなれども、歌は、人の情を、其のまゝ寫すものなれば、其の歌によりて、人の良否を分ち給ひしは、まことに歌の德の至大なるを知るべし。貫之が此の句を書きし筆勢、今、眼前に見えて躍然たり。

花をもてあそぶ月を思ふ、たよりなき所、しるべなきやみ。これ亦、對なり。

しかのみにあらず、さゝれ石にたとへ、つくば山にかけて君をねがひ、

大意　公に於て、月花の爲に心をくだくのみにあらず、私の恩を述べんとて、或は、さゝれ石にたとへ、或は、筑波山にいひかけて、我が君を思ひ奉るとなり。

しかのみにあらずは、しか大やけの上のみにあらずといはんが如し。

さゝれ石の文字は、彼の名高き『わが君は千世に八千世にさゝれ石の巖となりて苔のむすまで』とある歌より取りたるなり。

つくば山は、『つくばねのこのもかのもにかげあれど、君が御蔭にまさるかげはなし。』とある歌より取れるなり。二首共、本集中の名歌を出し、まず〳〵、歌の功をいひはやしたるものと知るべし。

よろこび身にすぎ、たのしみ心にあまり。

句の意、おのづから明らけし。身によろこびのすぎ、心にたのしみのあまれる歌を本集中よりとれば、先『うれしさを何につゝまむから衣、たもとゆたかにたてといはましを』とある歌なるべし。

富士の煙によそへて、人をこひ、松蟲の音に友をしのび、

これも、意は講ずるに及ばず。讀者の心にて曉り得べし。

されど、其の本歌を記さんに、これは、本集の戀の部に『人知れぬ思ひを常にするがなる、ふじの山こそ我が身なりけれ』とあると、秋の部の『君しのぶ草にやつるゝ故郷は、まつ虫の音ぞかなしかりける』との二つなるべし。

富士と、松虫と、煙と、音と、人を戀ひと、友をしのびと、皆對なり。

高砂住の江の松も、あひおひのやうに覺え、

大意　高砂の松や、住の江の松も、自分と相生のやうに思ひて、我が身の空しく老いたる嘆くことあるを云ふなり。

高砂は、後世は播磨の國の名所となりたれど、もと高きいさごの義にて山の事なり。高砂の松は古く久しきものをいひならへる例にて本集中に、其の例を求

むれば雜の部に『かくしつゝ世をやつくさむ高砂の尾上にたてる松ならなくに』又『たれをかもしる人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに』とあるがごとし。住の江は攝津の國の住吉なり。住の江の松も同じく古く久しきものなり。又『住の江の岸の姫松人ならば幾世か經しと問はましものを』のごとし。

あひおひのやうに覺えは、元來、あひおひには、相逐、相生、相老の三既ありて何も一理なきにあらざれど、予は暫く、相生の既に從ひぬ。即、こは、自分の餘程老いたる心より、高砂、住の江の古き松をもあひおひの昔の友のやうに思ふとわりなき感哀をいへるなり。

男山の昔を思ひいで、女郎花の一時をくねるにも歌をいひてぞなぐさめける

大意、年老いて男ざかりの昔を思ひ、少女すがたのしばらくなるをくよくよと思ふにも、歌をよみて思をやり、更にこれを歌うて慰むとなり。

男山の昔を思ひいでば本集中雜部の『今こそあれ我も昔は男山さかゆく時もありてしものを』とある歌の意にて、男は空しく年老いたるを嘆き、男ざかりの昔を思ひ出つるを云へるなり。

女郎花の一時は『秋の野になまめきたてる女郎花、あなかしがまし花も一時』とある歌の意にて女は少女すがたのしばらくなることを思ひ出で種々に嘆息するを云へるなり。

くねるは、女心に、くよくよ物思ふ體を云ふなり。

歌をいひてぞなぐさめけるは、上、さゝれ石にたとへつくは山にかけてといふより以下のことを、ひろく受けてかく喜怒哀樂さまくなる人生にありて、歌はよく其の鬱を散じ、思ひを、やるものなりとて、其の德を稱へたるものなり。

又春のあしたに、花のちるを見、秋の夕暮に、木の葉の落つるをきゝ。

大意、上の句をうけて、尙ほ其の外にも、春、秋の朝夕、見るもの、聞くものにつけて、各、感するところを表はすとて歌の功德を述べたるなり。

春、花のちる歌を本集中に求むれば、春の部に『うつせみの世にも似たるか花櫻、さくと見し間にかつ散りにけり』又『いざ櫻、われも散りなむ一さかり、ありなば人にうき目見えなむ』などの類てなべし。

秋、木の葉の散る歌は、秋の部の『奥山の岩垣もみぢ散りぬべし、照る日のひかり

見るときなくて』又『秋風にあへず散りぬるもみぢ葉のゆくへ定めぬわれぞかなしき』のたぐひなるべし。

春のあした、秋の夕くれ、花の散るを見、木の葉の落つるを聞きは例の對句にて本文のあやなり。景樹翁の『秋の夕暮』を、『春のあしたに對はば秋のゆふべとぞあるべき、さてそ調も詞もとゝのふべく覺ゆ』といひたるはさる言なり。

あるは、年毎に、鏡の影に見ゆる、雪と波とを歎き、草の露、水の泡を見て、我が身をおどろき、大意、鏡の影にうつる、頭の白髪や面の皺の年毎に多くなるを見て、吾が身の老いたるを歎き、草の露や、水の泡の消えやすきを見て、人生のはかなきことに驚くをいへるなり、

頭の白髪を雪にたとへたる例を求むれば、本集春の部に、『春の日のひかりにあたる我なれど頭の雪となるぞわびしき』又物名に『ぬば玉の我黒髪やかはるらむ鏡のかげにふれ白雪』とあり。

面の皺を波にたとへたるは、忠峯の長歌に、『ながらへて難波の浦にたつ波のなみの皺にやおぼゝれむ』云々とあり。

人生のはかなきを草の露にたとへたる例は、哀傷歌に『露をなどあだなるものに思ひけむ、我が身も草におかぬばかりを』とあり。

水の泡にたとへたる例は戀の歌に、『うきながら消えぬる泡ともなりぬらむ、流れてとだにたのまれぬ身は』とあり。

あるは、昨日までは榮えおごりて、時を失ひ、世にわび、親しかりしも疎くなり。

大意、昨日までは、榮華極めたりし身も、今日は緣欠けて貧賤のものとなり、又親密の間柄も、疎遠になることあり、といへるなり。

昨日は榮えおごりてとは昨日までは世に用ひられ人に尊ばれて、さも時めきたるをいふ。

時を失ひ、此の上に、『今日は』の三字なくては文をなさず、景樹翁も、『きのふは榮えおごりての下に、けふはの一句脫けたり難波本に今日は時を失ひとあるぞ正しき、必ず、なくては文をなさず』と云へり。即、昨日までは時めきたる人も、今日は世に捨てられて不仕合になりたるをいふ。

世にわび親しかりしも、とは、この社會にわび住居するに就て親密なる朋友親

族の中も緑欠けて疎くなりゆくといふこゝろなり。

これらの例は、本集雜の部に『世の中は、何か常なるあすか川、きのふの淵ぞけふは瀬になる』又、『光りなき谷には春もよそなれば、咲きてとく散る物おもひもなし』とある類なるべし。

あるは、松山の波をかけ、野中の水を汲み、秋萩の下葉をながめ、曉の鳴のはねがきをかぞへ、

大意　松山の波や野中の清水を喩へとなし、又萩の下葉をながめ、鳴の羽根がきを數ふとなり。是亦前後につゞきて、歌の功德を稱ふるなり。

松山の波は其の例、本集中に『君をおきてあだし心をわがもたば、末の松山波もこえなむ』とあり。

野中の水の例は、同雜の部に『古の野中の清水ぬるけど、もとの心をしる人ぞ汲む』とあり。

秋萩の下葉の例は、同秋の部に『秋萩の下葉色づく今よりや、獨ある人のいねがてにする』とあり。

曉の鳴のはねがきの例は、同戀の部に、あかつきの鳴のはねがきもゝかがき、君が來ぬ夜はわれぞかずかく』とある類なるべし。

波にはかけといひ、水には汲みといひ、萩にはながめといひ、鳴にはかぞへといふは、皆物によせて意を述ぶるより、わざと緑詞を用ひていへるなり。文章の法かくのごとくこそめでたけれ。

あるは、呉竹のふしを人にいひ、吉野川をひきて世の中を恨みきつるに、

大意　身の憂き事を世に語り、吉野川を比喩にとりて世の中を恨みたるにといふこゝろなり。

呉竹はふしの枕詞なり。呉竹のふしの例は、本集中、雜の部に『世にふれば言の葉しげき呉竹のうきふしごとに鶯ぞなく』とあり。

吉野川の例は、同戀の部に『流れては妹背の山の中におつる吉野の川のよしや世の中』とあり。

人にいひ、ひきては、歌をよみて人に語り、喩をひきて世を恨むといふまでの意にて別に意味あることにあらず。

きつるには、『來りたるに』同意にて、上の文を抑へて、下の文を起こす語勢なり。されば是より下の文意の反對なるべきはいふまでもなし。さるに、下の文意も尙ほ同じければ、先哲此の句を疑ひたるに、景樹翁は此の次の文は今はうきふしなき世に遇ひてとやうの意にて、上を受け下を起すなれば、かくありて、さはりなし。强て理を以ていふべからずやとうにいへり。或はしからん。

さて、以上、古人が歌をよむは種々の事情ありての事なる理由を、古雅なる詞どもをひき來りて、紀氏のおもしろくいひ續けて、春のあしたより以下にあらゆる歌のさまをいひつゝしたるなり。

今はふじの山も、煙たゝずなり、長柄の橋も造るなりと聞く人は、歌にのみぞ心をなぐさめける。

大意　後世、富士山も煙立たずなり、長柄の橋も造られたりと聞く人は、其の世の歌をよみて樂むの外なしとの意なり。

今はふじの山も煙たゝずなり、とは、其の以前富士山に煙たつ時は、皆人々、それによそへて、人を戀ひたりしが、今は其の煙も立たずなりたりとなり。富士の山

は此の延喜の比は暫く、止みたりと見ゆれど　桓武天皇延曆十九年に大に燃え、清和天皇貞觀年中にも燒けたることあり。此の句の例は、本集中俳諧歌に、『富じのねのならぬ思ひにもえばえも神だにけさぬむなし煙を』又戀歌に、『君といへば見まれ見ずまれふじのねの、めづらしげなくもゆる我戀』となり。

長柄の橋も造るなりとは其の以前長柄の橋のなき時は、それにたとへて我が身を歎きたりしが、今は其の橋も造られたりとなり。長柄の橋は摂津國にあり、久しく破損のまゝにて修繕もなかりしが、宇多天皇の御代に更に新造されたり。本句の例は、本集中、雜の部に『世の中にふりぬるものは津の國の長柄の橋と我れとなりけり』又、俳諧歌に『難波なる長柄の橋も造るなり、今は我身を何にたとへむ。』とあり。

歌にのみぞ心はなぐさめけるとある歌は、當時、人のよむ歌のやうに聞ゆれど、これは、古くより世にある歌をさしたるなり。即、景樹翁の『さて、今はよそへて人をこひし富士の煙も立たずなり、たとへて、身をなげきし長柄の橋も造られたりと聞くらん後は、只ありし其の世の歌にのみ心をなぐさむるの外なしと也』と

いへるがごとし。

古より、かくつたはる中にも、ならの御時よりそびろきりにける、か御世や歌のこゝろを、しろしめしたりけん。

大意、古來、此の如く歌の傳はり來し中にも、ならの御時代より盛に弘まり、彼の御代には、天皇陛下にも、よく歌の本意に通じさせ給ひたらんといへるなり。

ならの御時とは、舊説單に、平城天皇の御時代をさして、申すといふものあれど、然らず。ならの御時とは、大和國なる奈良の都に、天下知ろしめしゝ天皇の御時代の意ならむ。さて、奈良の都に座しつるは、元明帝、元正帝、聖武帝、孝謙帝、廢帝、稱德帝、光仁帝の御七代にて、奈良の御時いづれと定めさゝず、ひろく申したることなるべし。

かの御世は、即上句に云へる、奈良の後世なり、此の御世には、天皇陛下にも、よく歌の本意を心得させ給へるものありきと聞え侍り。

かの御時に、おほきみつのくらゐ、柿本の人麻呂なん、歌のひじりなりける。

大意、其の御時代に大參位柿本人麻呂は、歌道の聖人なりしといへるなり。

かの御時とは、上文にいへるかの御世と同じく奈良の御時代をさせるなり。

おほきみつのくらゐは、天武天皇の位階制なる大參（おほきみつ）の位にて、後世の正三位にあたれば、こゝに舊慣のまゝに正三位といはずしておほきみつくらゐといはひたるなり、されば柿本人麻呂は奈良の朝にありて、正三位なりしが如くなれど、いかゝあらむ姑く疑を闕く。

これは、君も身を合せたりといふなるべし。

大意、君と臣との合体といふものなるべしとなり。

こは、上に天皇の歌に通じたまひたると人麿の歌に巧みなりしとをかくはいひたるなり。

秋の夕、龍田川に流るゝ紅葉をば、みかどの御目に錦と見給ひ、春の朝、吉野山の櫻は、人麿が心には、雲かとのみなん覺えける。

大意、自ら明かなるべし。上を受けて、天皇の御歌と、人麿の歌とを、春秋の對句して文を飾れるなり。龍田川の御歌は、本集中秋の部に、「龍田川紅葉みだれて流

るめり、わたらば錦中や絶なん」とあり。これを御製なりと傳ふる說あり。人麿の吉野山の歌とては、別に見えもせざれど、そは句を設けて我には文をなせるまでなり。

又、山部の赤人といふ人ありけり。歌にあやしくたへなりけり。

大意、山部の赤人といふ人ありて、歌道に餘程妙を得たりとなり。

あやしくたへなるは、神妙といはんが如し。上に人麿を歌のひじりといひたる故、少し詞をかへたるまでなり。

人麿は、赤人の上に立たん事かたく、赤人は、人麿が下に立たん事かたくなんありける。

大意、人麿と、赤人とは、何れも歌の名人にて、兄たりがたく弟たりがたしとなり。

こゝに、人麿の歌と、赤人の歌とを列擧すべし、

梅の花それとも見えず久方の、あまぎる雪のなべてふれゝば　人麿

ほの〳〵と明石の浦の朝霧に嶋かくれゆくふねをしぞ思ふ　人麿

春の野にすみれ摘みにと來し我ぞ、野をなつかしみ一夜ねにける　赤人

わかの浦にしほみちくれば かたをなみ　葦邊をさして田鶴鳴渡る　赤人

此の人々をおきて、又すぐれたる人も、呉竹のよゝに聞え、片糸のよりよりに絶えずぞありける。

大意、人麿赤人の二人の外にも、尚代々、時々歌の名人は絶えずありしとなり

呉竹は、よに係る枕詞なり。竹の節を「よ」といへばよゝといはんためなり。

片糸は、よるに係る枕詞なり。糸は二筋を合せて用ふべきものなれば、其の合せざる一篇の糸を片糸とはいへるなり。

より〳〵は、時々といはんがごとし。

これよりさきの歌を集めてなむ、萬葉集となづけられたりける。

大意、是の時より以前の歌を集めて、萬葉集と名けられたりとなり。

これよりさきの歌とは、上に、奈良の御時といひ、又、人麿、赤人のことをいひたれば、其れより以前の歌といふ意なり。

萬葉集は我が國歌集といふものゝ始にて二十卷あり。即、奈良朝以前の歌を集

めたるものなり。古書に、右大臣橘諸兄公の編せるものと見ゆれど、公が薨後の歌をも載せ、且、前後重載せるものもあるより見れば、全部公の編輯なりとはいひ難し。其の始めの部は諸兄公の編輯にして、後の部は大伴家持の增補ならんといふが、後世の說なり。或は然らん。

かの御時よりこのかた、年は百年餘、御代は十代になるとなり。

大意、其の御代よりこのかた、年は百年餘、世は十つぎになむなりにける。

此の數句、普通本には、なけれど、さては、文意續かず。後の文句中に錯亂して入りたるならむとてかく改めたる書あり。今これに從ひつ。

こゝに、いにしへの事をも、歌の心をもしれる人、わづかに、ひとりふたりなりき。

こゝにとは、上にいへる百年餘、十代の間を指して云へる意にて、其の間にといはんがごとし。

歌の心をもしれる人とは、歌道の本意に通ぜる人といへるなり。

しかはあれど、これかれ、得たる所、得ぬ所、たがひになむある。

大意、歌道の本意に通ぜるもの、ひとり、ふたりはありきといふも、それも完全

にはあらずとの意なり。

得たる所、得ぬ所、たがひになむある、とは、互に、得手の所、不得手の所ありといふことにて、十分具備したるものはなかりきとの意なり。

かの御時よりこのかた、年は百年あまり、世は十つぎになむなりける。いにしへのことをも、歌をもしれる人、よむ人多からず。

こは、上文の錯亂して、こゝに入りたるものならむか。別に重ねて講すべき要はなけれど、本文は掲げ置きぬ。

今、此のことを云ふに、つかさ、くらゐ高き人をば、たやすき樣なればいれず。

大意、上文に云ふ、人々の事をいはんに官位高き人のことは憚りあれば云はずとなり。

此のことを云ふにとは、上に云ふ得手、不得手のあることを論評せんにとのところなり、

つかさくらゐたかきとは、官位貴きといふことなり、

たやすき樣なればいれずとは、官位貴き人の得失をいふは、あまり輕々しき樣

なれば論評の内へはいれずとなり。

そのほかちかき世に、その名聞えたる人は、

大意、官位貴き人の外にて歌に評判高き人はとなり。

すなはち、僧正遍昭は、歌のさまは得たれども、まことずくなし。たとへば、畫にかける女を見て、徒に心を動かすがごとし。

大意、僧正遍昭は歌の体裁は、巧なりしも、歌に眞意少く、さながら畫像に向て、心を動かすがごとしとなり。蓋し畫像は美麗なりとも死物にて眞意なきにたとへたるなり。

僧正遍昭は、仁明天皇に仕へ奉り、寵遇を得たる人にて、天皇崩御の後、出家して花山の元慶寺の座主となり。寛平二年に歿せし人なり。此の人の歌の如何は、下の例を見て知るべし。本集中、春の部に『あさみどり糸よりかけて白露を、玉にもぬける春の柳か』又『そこに見て歸らん人に藤の花、はひまつはれよ枝はおるとも』又夏の部に『はちす葉のにごりにしまぬ心もて、何かは露を玉とあざむく』又秋の部に、名にめでゝおれるばかりぞ女郎花、われおちにきと人にかたるな』

とはさが野にて馬よりおちてよめる歌なり。

在原業平は、その心あまりありて、言葉足らず。しぼめる花の色なくて匂ひのこれるが如し。

大意、業平の歌は、限りなく餘情あれど、言葉足らざる所ありとて、しぼめる花の色なくて、匂のこれるにたとへたるなり。

在原業平は、平城天皇の皇孫にて阿保親王の五男なり。官位は、從四位上左近衛中將までに至る。元慶四年五十六歳を以て卒す。和歌に最も巧なる人なりき。その心あまりありて、言葉足らずとは、深く歌を楽ずる故、其の情三十一字の外に餘りて言葉足のらざるところありとなり。その心あまりありと、褒め言葉足らず、と貶したる評論の体、實にめでたし。

しぼめる花の色なくて、匂ひのこれるがごとしとは、盛り過ぎたる花の色つやなくて、香の猶殘れるがごとしとて、匂ひのこれるは、その心の餘れるにたとへ色なくは、言葉の足らざるにたとへたるなり。さて業平の歌は、本集中、春の部に、『世の中に絶えて櫻のなかりせば、春のこゝろはのどけからまし』又戀の部に、

『月やあらぬ春や昔の春ならぬ、我が身一つは本の身にして』又、雜の部に『大かた
は月をもめでじこれぞこの、積れば人の老となるもの』等あり。
文屋の康秀は、詞たくみにてそのさま身におはず。いはゞあき人のよききぬ着たら
んがごとし。

大意　文屋康秀の歌は、詞巧妙なれども、躰、鄙野にして相應せず、恰も商人の身
に不相應なる絹布を纏ひたるがごとしと也。蓋、在原業平のに反對の評定なり。
詞たくみにてとは、歌のいひ回はしに、妙を得たりとて、上はべのよく聞ゆる
をいへるなり。
そのさま身におはずとは、歌の躰、鄙しくして詞に適はずといへるなり。
文屋の康秀は、履歴詳ならざれども　清和　陽成の兩朝に仕へし人なり。古今
集目錄に、『貞觀二年三月廿日任刑部中判事年月任三河掾元慶元年正月十五
日任山城大掾三年五月廿八日任縫殿助』とあり。
康秀の歌は、本集中、秋の部に、『ふくからに野べの草木もしほるれば、うべ山風
をあらしといふらむ』又、哀傷歌に、『草深き霞の谷にかげかくし照る日のく

れしけふにやはあらぬ』となり。
宇治山の僧喜撰は、詞かすかにして、はじめをはりたしかならず。いはゞ秋の月を見
るに、曉の雲にあへるがごとし。

大意　喜撰の歌は、詞は微妙なれども、少し漠然として聞えかたき所あり、譬へ
ば秋の名月が曉方に至りて雲に覆はれたるが如しとて首尾澄快ならざるを
いへるなり。
喜撰は、系傳詳ならず。種々說はあれど何れも悉しく且確かならず。只其の世を
宇治山に遁れたる一僧なることは疑を入れざるがごとし。
秋の月を見るに、曉の雲にあへるがごとしは、眞名の序に、『如望秋月遇曉雲』
とありて、秋の月は殊にすみてめでたければ詞のかすかなるにたとへ、曉の雲
にあへるは、首尾通ぜざるを、はじめをはりたしかならぬにたとへたり。喜撰の
歌は、本集中、雜の部に、『我庵は都のたつみしかぞすむ、世をうぢ山と人はいふ
なり』とあり。百人一首にあるのと同じ歌なり。
よめる歌、おほく聞えねば、かれこれをかよはしてよくきらず。

喜撰の歌は、多く世に傳はらざれば、彼れ此れ引き合はせ通考する事叶はねはよくは知らずとなり。然り、喜撰の歌は、右の外に樹下集と云ふ書に、『けがれたるたぶさはふれじ極樂の、西の風ふく秋の初花』とあり、又玉葉集といふ書に『木の間より見ゆるは谷の螢かも、いざりの海士の沖にゆくかも』との二首もあれど、此等は果して喜撰の作なりや否やも定かならず。

小野小町は、いにしへのそとほり姫の流なり。おはれなるやうにて、つよからず、いはゝよき女の、なやめるところあるに似たり。

大意　小町の歌は衣通姫の流にて艶なれども氣力なく、恰も美人の病苦あるがごとしとなり。

小野小町は、その履歴詳ならず。或は、仁明承和の頃の人なりきといふ。歌の、世に名あることは人みなの知るところなり。

そとほりひめは、允恭天皇の皇妃にて一名を弟姫と申せり。その容姿絶美にして皮膚の艶色、衣を徹して光れば時人かくは號けたりといふ。衣通姫の歌は、ある夕、天皇戀ひ忍びてよめるに、『我がせこが來べき宵なりさゝがにの、蜘

のふるまひこよひしるしも』の歌あり。こゝに、そとほりひめの流といへるは、衣通姫の歌の風なりとのこゝろなり。されど、衣通姫は歌の上手といふにもあらず、又小町のに似たるにもあらざれはその流などゝはいひがたく、こは、よしなき詞なることと先哲も既に論じたり。

あはれなるやうにてつよからずは、現名の序に、『艶而無氣力』とあり。あはれなるは例の褒詞にて、つよからずは貶語なり。

つよからぬは、女の歌なればなるべし。

是は上の句に、「つよからず」といひたりしを更に説明して、そは女の歌なるが故ならんと云ひ反へしたるまでなり。女の性はつよからぬこそ却て眞面目なればなり。さて小町の歌は、本集中、戀の部に、『思ひつゝぬればや人の見えつらむ、夢としりせばさめざらましを』又、『色見えでうつろふ物は世の中の、人の心の花にぞありける』又、『うたゝねに戀しき人を見てしより、夢てふ物はたのみそめてき』又、雜の部に、『わびぬれば身をうき草の根を絶えて、さそふ水あらばいなむとぞ思ふ』等あれどいづれもこの評のごとし。

大友の黒主は……そのさまいやし。いはゞ薪負へる山人の、花の蔭にやすめるがごとし。

此文大友の黒主の下に脱文あること先輩も既に論ぜり。眞名の序は、『大友黒主之歌古猿丸大夫之姿也。頗有逸興而體甚鄙如田夫之息花前也』とあり。參考すべし。『古猿丸大夫之姿也頗有逸興』と同じき詞なくては上の文と體を同じうせざるのみならず。又評論の體をなさず。幾多の脱文字あること疑ふべくもあらず。

大友黒主は、都堵牟麻呂の子にて、大友天皇の曾孫に當る。近江國滋賀郡大領從八位上たりしなり。

薪を負へる山人花の蔭にやすめるがごとしとは、田夫野人も、麗はしき花の蔭にいこへるは心あるに似たりとの意にて、薪を負へる山人は、躰の野鄙なるにたとへ花の蔭にやすめるは、風雅にたとへたるなり。黒主の歌は、本集中、春の部に、『春雨のふるは涙か櫻花ちるを惜まぬ人しなければ』又、戀の部に、『思ひ出て戀しき時は初雁のなきてわたると人はしらずや』又、雜の部に、『かゝみ山いざ立ちよりて見てゆかむ、年へぬる身は老やしぬると』等皆おなじ體の歌と覺ゆ。

此の外の人々、其の名聞ゆる、野邊におふるかづらの、はひ廣ごり林に繁き木の葉の如くに多かれど、歌とのみ思ひて、其の樣しらぬなるべし。

大意、上來述べ來たれる六人の歌人より外に歌人として聞こえたる人は野草の如く林葉の如く多かれど、そは、大抵、自ら歌と思ふばかりにて、其の實、歌の躰を心得ぬとなり。

さて、上の章に、『古の事をも、歌の心をもまれる人、わづかにひとりふたりなりき。』といへるは、上に述べたる僧正遍昭、在原業平、文屋康秀、喜撰、小野小町、大友黒主の六人をさしていへるなり。其の批評の當否に至りては、紀氏が一己の好惡に出でゝ天下の公論には、あらず、と先哲の論もあり。されど紀氏が當時漢學の盛にして國學の衰へたるを慨したるのあまり、眞歌の價値を尊大に期したれば、痛論こゝに至れるも、さることなり。

かゝるに、今すべらぎの、天の下をろしめす事、四の時、九かへりになむ成りぬる。

大意、然るに、今上天皇陛下御即位以來、九年になるとなり。

かゝるには、上の句をうけて下の文を起す接續の詞なり。さて、是より、古今集勅撰のことにうつりていへるなり。

今すべらぎは、今上天皇といはんがごとし。即、醍醐天皇をさし奉れるなり。

すべらぎとは統君（スベルキミ）の約言にて天皇の御事を申す稱なり。

天の下ところしめすは、天皇の位に座しまして天下を治め給ふをいふ。

四の時とは、春夏秋冬の四時にて、即、一年のことをいへるなり。醍醐天皇御即位以來九年になれるをいひたるなり。

あまねき御うつくしみの波、八島の外まで流れ廣き御めぐみの蔭、筑波山麓よりもまさげくおはしまして、

大意、天皇の德澤は四海の外にまで及び、山の麓よりもまさげしとて聖德を稱し奉りたる詞なり。

あまねき御うつくしみの波とは、行わたりたる御惠といふ意なり。八島の外まで流れとは、恩澤四海の外までも及べるを云ふ。

廣き御めぐみの蔭、筑波山の麓よりもまさげくは、上の句を詞を換へていへるまでにて、同じく御德を稱したる詞なり。

萬のまつりごとをきこしめす暇、もろ〳〵の事をすて給はぬあまりに、古の事をも忘れじ。ふりにし事をも、おこし給ふとて、今も見そなはし、後の世にも傳はれとて、

大意、萬機の御政治を行はさる餘暇、文學技藝のことも打捨て給はぬまゝに、古の物をも保存し、すたれたる事をも興こさんとの御思召にて、今も御覽遊ばされ、後世へも傳へんと御思召してとなり。

延喜五年四月十八日に、大內記紀友則、御書所預紀貫之、前甲斐目凡河內躬恒、右衞門府壬生忠岑等に仰せられて、萬葉集に入らぬ歌、みづからのをも奉らしめ給ひてなん。

大意、此の日吾等四人に勅命ありて、萬葉集に漏れたる古歌及び自分等の歌をも奉らしめさせ給ひていへるなり。

紀友則は、紀有友の子にして、寛平九年土佐掾となり、同十年少內記となり、延喜四年大內記に任じ、延喜五年二月、六十一歳を以て卒したる人なり、大內記は、中

務省中の官にて、詔勅の類を掌る官なり。

紀貫之は、中納言紀長谷雄の孫にて、望行の子なり。越前權少掾より進みて土佐守に任じ玄蕃頭となり、木工權頭となり位、從五位上に上りて、天慶九年に卒す。御書所預は、宮中の秘書類を藏むるところの官にて御歌所の類なり。凡河内躬恒は、天津彦根命の後裔にて甲斐少目より御書所御厨子所等に至り、遂に和泉大掾となりて延喜七年四十九歳にて卒せり。前甲斐目は、寛平年中甲斐少目たりしも今は非職なりし故かく云ふ。

壬生忠岑は、壬生安綱の子にて右衛門府生より、御厨子預となり、後摂津大目となり九十八歳を以て康保二年に卒せり。

それが中にも、梅をかざすよりはじめて、郭公を聞き、紅葉を折り、雪を見るに至るまで、

大意、春の梅より始めて、夏の郭公、秋の紅葉、冬の雪に至るまでといへるにて、こは、四季の歌をとりいでゝいへるなり。

又、鶴亀につけて、君を思ひ、人をもいはひ、秋萩、夏草を見て妻をこひ、逢坂山に到りてたむけを祈り、あるは、春夏秋冬にもいちぬくさ〳〵の歌をなん撰はせ給ひける。

大意、上の四季に續きて此の賀の部、戀の部、離別の部、旅路の部或は四季の部にもいらぬ雜の歌をも撰集仰せ付けられたりしなり。

すべて千歌二十卷、名づけて古今和歌集といふ。

この意自ら明らかなり。本集の歌はすべて千百十二首ばかりあるを、單に千歌といへるは、その大數をいへるものなり。

かく、このたび集め撰ばれて、山下水のたえず、濱のまさごの數多くつもりぬれば、今日あすか川の瀬になるうらみも聞えず。さゝれ石の巖となるよろこびのみぞあるべき。

大意、此の如く此の集成て撰集の跡も絶えず、且多くの歌もあつまりたれば後世歌風の變遷する憂もなく、漸くに榮ゆること多からんとなり。

山下水は、山より流れ下る水にて絶えざるものとして用ふることなり。ここには、たえずの枕詞の如くして用ひられたり。

濱のまさごは、海邊の眞砂にて數多きものに用ふることなり。こゝには、數多く

の枕詞の如くして用ひられたり。

あすか川の瀬になるは、本集中、雜の部に、『世の中は何か常あるあすか川きのふの淵ぞけふは瀬になる』といふ類の意に世の變遷無常なるをいへるなり。

さゝれ石の、巖となるは、本集中、賀の歌に、『わが君は千世に八千世にさゝれ石の、巖となりて苔のむすまで』とある意にて末長く榮ゆるをいへるなり。

それ、まくら言葉は、春の花にほひすくなくして、むなしき名のみ、秋の夜の、長きをかこてれば、かつは、人の耳におそり、かつは歌の心にもはぢ思へど、

大意、自分等は、みだりに歌人の虛名を傳へられ、且、世人の聞くところもいかが、且、歌の心も慚しく思ふとなり。

それまくら言葉といふ事は、こゝに解し難く、古來の說も多かり。眞名の序には『臣等』とあり、紀氏が自筆の古今集には、『貫之ら』とありといへり。いづれにしても此の意味ならざれば解せず。遽ぎに、まくらは『われら』の寫し誤りか、又はそれまくらは『それがしら』の寫し誤りか、此のふたつの中なるべしとやちにいへるは、げにさることなるべし。

春の花は、にほひの枕詞として用ひ、秋の夜は、長きの枕詞として用ひたるなり。

たなびく雲のたちゐ、啼く鹿の起きふしは、貫之等が此の世に同じく生れて、この事の時にあへるをなむよろこびぬる。

大意、起居動靜に付けても、此の聖代に生れ、此の集を撰ぶ仰を蒙りたるを悅べるとなり。

たなびく雲は、たちゐの枕詞として、啼く鹿は、起きふしの枕詞として用ひられたるなり。

この事の時にあへるは、この撰集ある時期に遭遇せるをいふ。

人麿なくなりにたれど、歌のことゝはまれるかな。たとひ時うつり、ことさり、樂しび悲しびゆきかふとも、此の歌、もし青柳の糸絕えず、松の葉の散り失せずして、まさきのかつら、長く傳はり、鳥の跡、久しくとゞまらば、歌のさまをもしり、ことの心を得たらん人は、大空の月を見るが如くに、古を仰ぎて、今をこひざらめかも。

大意、歌仙人麿は死せるも歌道は殘れり。以後假令如何なる變遷あるも、此の集の世にあらむ限りは、後世に至り、歌道も心得、事物の理をも知れる人は此集

を仰ぎ尊びて、御代を敬慕せぬものはなかるまじとなり。

青柳の糸は、絶えすの序、松の葉は散り失せずの序、まさきのかづらは、長くの序、鳥の跡は、久しくといまるの序なり。その他の字句は、自ら明らかなり。

土佐日記

土佐日記も、紀貫之朝臣の物したるものなり。即、さきの古今集序を物したる時より、やゝ、三十年の後、朝臣が、醍醐天皇の延長八年に土佐の國守となり、朱雀天皇の承平四年に、任、滿ちて歸京せし時、船路、四十日間の紀行なり。文脉は、古今集序の如く正格謹嚴ならざるも、輕快洒落にして、天真爛熳なるところ、なかなかにめでたく、且、面妙なれば、後の國文學者にして、紀行文を書くあれば、多くは範を之にとれり。實に以ある事ぞかし。さきに、古今集序を講ずる時述べたるが如く、當時は、序跋も、日記も、皆漢文もて記しゝ例にて、我が國、固有の國文は、徒に、女流の專有の如くなりしを、朝臣は、ひとり、國語を盛にし、國文を興さんの心をもて、序文も、日記も、かく國文に物して、時流の漢詩、漢文の外に、固有の國歌、

國文のあることを知らしめたり。後世、漸、此の種の國文の盛なりしは、全く朝臣の啓導によらずんばあらず。其の功いかで雲煙に附すべけんや。

本日記は、承平四年十二月二十一日舟出して、翌年正月三十日和泉の灘に入り家に歸るまでの紀行なれど、こゝに講ずるところは、例の歷代文學によりて、首途の條、船中に若菜を得たる條、舟子の唱歌を聞く條、住吉の濱にて風波にあふ條だけを講すべし。諸子豫、其の心してよ。

首途の條

二十七日、大津より浦戸をさして漕ぎ出づ。かくあるうちに、京にて生れたりし女子、こゝにして、俄に失せにしかば、此の比の出で立いそぎを見れど何事もえいはず。京へかへるに、女子のなきのみぞ、悲しみこふる。ある人々もえたへず、

大意、此の日、大津より浦戸をさして漕ぎ出でんとするに、昔、京にて生れたりし女子の、出立前、此の國に於て、俄に死に失せしかば、旅立は何くれと忙はしけれども取る物も手につかず、言ふことも得言はず、たゞ伴ひかへる愛女のなきことばかり悲しく、且、戀しく、傍にある人々も亦同感に堪へずとなり。

大津浦戸は、何れも土佐の國の地名にて、浦戸は大津より西の方二里ばかりにあり。此の間の舟路は當日航海の豫定なりしと思はる。

京にて生れたりし女子の年齢は、いくつなりしか確かに知らんよしなけれど、彼此考へ合はするに、七つ八つばかりにやあらん。紀氏、そか幼き時携へ來りて、今、伴ひかへることなきより、無限の哀情を起しゝなり。蓋し、此の哀情こそ此の日記の骨子とはなりたれ。見ん人、その心すべし。

此の間に、ある人のかきていたせる歌。

みやこへと、思ふも物の、かなしきは、

か、らぬ人、のあればなりけり。

大意、久しぶりに故郷なる都へ歸らんと思ふは、此の上なき嬉しき事なるに、かくばかり悲しきは、初つれて來し女子の、今、伴ひかへることの出來ぬ故なりとなり。

またある時には

あるものと、忘れつゝなほ、なき人を、

いづらとぞふぞ、かなしかりける。

大意、愛子のあまり戀しきまゝに、ともすれば、其の死に失せしことをすら忘れて、なほ世にあるものゝやうに覺えて、どれ何處にをるかと現に問ふことさへあり。實に悲しきことなりとなり。其の情の切なること察すべし。

いづらは、どこ、いづことといふがごとし、

といひける間に、鹿兒の崎といふ所に、守のはらから、またこと人、これかれ酒などもておひ來て、磯におりゐて別れがたきことをいふ。守のたちの人々の中に、このくる人々ぞ、心あるやうには、いはれほのめく。

大意、上にいへる如く、悲歎しける間に大津の續きなる鹿兒の崎といふ所にいたるに、新任土佐守の弟、又其の他の人々酒肴を携へて追ひ來り磯に下りて名殘の詞を述ぶ。實に國司の多き屬官の中にも、今、追ひ來りたる人々は殊に厚情の人のやうに、同船の人々へ小聲にいはれ得るとなり。

守のたちの人々は、國の守に附屬する掾目等の官員のことなり。

いはれほのめくは、ほのかにいはるゝことなり。若し、ほのめかすといふ時は、ほ

のめくの他動詞にて、多く、それとなくして知らせることに用ふるなり。

かく別れがたくいひて、かの人々の、くちあみも、もろもちにて、このうみべにて荷なひいだせるうた、

大意、かく別れがたくいひて彼の人々、口重もげに此の海邊にて心を盡して讃み出だせる歌との意なり。

くちあみは、口網にて、此の海邊に用ひる網なり。そを沖遠く敷きて、漁人の引き上ぐる時は、諸人持にていと重げなれば、今、歌、讃まんとする人々の、彼の大勢が口網引き上ぐる時の如く、苦しみ苦しみて、やう〳〵に一首の歌を作り出だせるを時にとりて、滑稽的に形容せるなり。

荷なひ出だせるは、網を引き上ぐる時荷ひ出せる故それに縁をとりてかくはいひたり。

をしと思ふ人やとまると、わしがものの

うちむれてこそ、われは來にけれ。

歌意、名殘惜しと思ふ人々が若しや留るかと、思ひて、葦鴨の如く、吾々は、打群

れて來れりとなり。

といひにありければ、といたくめでゝ、ゆく人のよめりける。

棹させど、そこひしられぬわだつみの、

深きこゝろを君に見るかな。

歌意、棹させども、底の知られぬ、此の海の如く、深き義心を、君等に見るかなといひて、その厚意を謝せるなり。

いといたくめでゝは、甚た愛らしてとの心。併し、其の實かの歌は、さほどよき歌にはあらねど、辛苦して讃みたるなれば、わざと斯くいへるなり。ゆく人は、貫之、自身をさしたるもの。そこひは底、わだつみは、海のことなり。

といふあひだに、かちとり、ものゝあはれも、しらで、おのれし酒をくらひつれば、はやくいなんとしほみちぬ、風もふきぬべしとさわげば、舟にのりなんとす、

大意、かく、別情濃かなる間に、梶取らは人情をも知らず、自分が酒を飲みたれば、疾く行かんとてはや、潮もみちたりいま、風も吹くべし、などいひて急げども、殘念ながら愛を割きて、今は、船に乘らんとするなり。

ものれしのしは、強めの助辭、いなんは、ゆかんことなり。

此の折に、ある人々、折節につけて、から歌ども、時に似つかはしきをいふ、又、ある人、西の國なれど、甲斐歌なれどうたふ。かくうたふに、ふなやかたのちりもちり、そらゆく雲も、たゆよひぬ。とそいふなる。こよひ浦戸にとゝまる。

大意、此の折の人々、時に似つかはしき、即別れに相應する時など歌ひ、又或る人は、此處は西國なるに東國節の甲斐歌など歌ふ。されば、其の聲の響によりて船やかたの座も漂ひそらゆく雲も漂よふばかりなりしとなり。

甲斐歌は、古今集にのせたる『甲斐が嶺をさやにもみしがけ〳〵れなく、はこほりふせるさやの中山』などいへるものにて數多ありしなるべし。

船やかたの座もちりとは、支那の故事に、漢の虞公、善く歌ひ、梁上の塵をして起たしむ、とあるを思ひよせてそ書ける。

そらくゆ雲もたゆよひぬとは、同じく支那の故事に、秦青が聲、林木を振はし、響き、行雲を遏むといふを轉じていふなり。

船中に若菜を得たる條

七日になりぬ。同じ湊にあり。けふは、青馬を思へどかひなし。たゝ波の上の白きそ見ゆる。

大意、正月七日には、朝廷にて青馬の節會とて　天皇、馬を見給ふ例なれば七日に遇ひて、そを思ひ出でたれど旅路なればその甲斐なく、たゝ海上の波の白きをのみ見るといひて思ひやりとはなせり。

かしるわひだに、人の家の、池と名ある所より、鯉はなくて、ふなよりはじめて、川のも海のも、こともものをも、長櫃に荷ひつゝけておこせたり。若菜、こにいれて、雉子など花につけたり。若菜そけふをきらせたる歌あり。そのうた、

あさぢふの野べにしあれば、水もなき、
いけにつみつる、若菜なりけり。

いとをかしかし。

大意、池といふ所のある家より、川の魚も海の魚も、其の外の物をも澤山に贈り、且、若菜も籠に入れて贈りたれば、それによりて、けふの七日なることを知りたりとなり。

歌意、所にもあらぬ池に生じたる若菜なれば、よくはあられど、今日のしるしに進らするとなり。

鯉はなくては、池といへば鯉のあるべきに、そはなくてとのことなり。

ことものをもとは、川魚海魚より異なる物をもといふなり

若菜とけふをしらせたるとは、持ち來りし若菜こそ今日を知らせたれとなり。

七日には、七草とて、若菜摘むべき、ならひなればかくはいひたるなり。

雉子など花につけたりは、風流なる贈り物のならひにかくすることあり。

あさぢふは淺茅生にて、茅の淺く生へる意、即つばな抔の生ずるところなり。

いとをかしかしは、よほどをもしろき事なりといふに同じ。

この池といふは、處の名なり。よき人の、男につきて下りて、住みけるなりけり。この長柢の物は皆人わらはまでにくれたれば、あきみちて、舟子どもはげちつゝみをうちて、海をさへおどろかして波もたてつべし。

大意、都にて身柄よき女人の、さるべき故ありて、夫に從ひ、此の池といふ所に住みげれば、此の澤山の贈り物も、流石に、都風なり。さて此の贈り物は皆にくれ

たるなれば、皆滿腹してはては舟子ども腹鼓を打ち、爲めに海までも鳴りとどろかし却て波をも立てん程なりと。此のあたり例の滑稽的筆法なり。讀者其の面白みを味ふべし。

舟子の唱歌を聞く條

宇多の松原をゆきすぐ。其の松のかず、幾そばく、幾千年へたりとしらず。もとごとに、浪うちよせ、枝ごとに、鶴とびかふ。おもしろしと見るに堪へずして舟人のよめるうた。

見わたせば、松のうれごとにすむ鶴は、千とせぞちとぞ思ふべらなる。

とや、此の歌は所を見るにえまさらす。

大意、其の松原の松は、幾十許あり、又、幾千年を經たる老松なるかを知らず。枝毎に浪打寄せ、枝毎鶴飛ひ遊ふ。その面白さ見きられずとなり。

歌意其の松の末毎にとまれる鶴は、己が千とせの友遊の如く思へる有樣なりと、老松に鶴のとまれる風雅を形容したるなり。

うれとはうらとも云ひて末のことゝ、どちとは友達のことなり。

所を見るにえまさらずは、此の歌、實地の形容を得爲さずとの評語なり。

かくあるを見つゝときゆくまに〳〵、山も海もみなくれ、夜ふけて、西東も見えずして天けのこと、かちとりの心にまかせつ。をのこもならはぬは、いとも心ぼそしまして女はふなぞこにかしらをつきあてゝ、音をのみぞなく。かく思へど、舟子かちとりは、船歌うたひて、何ともおもへらず。

大意、かく松原の景色など眺めつゝ行くまゝに、山も海もかくれ夜ふけて東西も見えず、いと淋びしくなりぬ。天氣のことは、たゞ梶取の心に任せたり。かゝれば男子さへ船路なれぬは、いと心細きに、況して女子は、船の底に打臥して泣きてのみ居り。されど梶取はなれたる事とて、何とも思はず、平氣に歌など歌へりとなり。

音をのみぞなくとは、泣きにのみ泣くといふことにて、泣くより外他のことなきの意なり。

そのうたふ歌、

春の野にてぞ、ねをばなく。我がすゝきにて、手をきる〳〵、つんだつ菜を、親やまほるらん、しうとめや食ふらん。かへらや。

まんべのうなゐもがな。錢とはん。夜々の菜を、そちどとをして、おきのりわざをして、錢も持て來ず、已れたにとず。

大意、一巻の野にて、自分が海にて手を切りながら、泣く〳〵摘み採りたる若葉を、思ふ人は食はず、親や姑が食ふらん。甲斐なき事よ。

昨夜の童子が來ればよい、さすれば錢を乞ひとらんものを、彼は、虚言して賒りながらもてこず、又、自らも來らずとなり。

思ふに此の歌は、當時舟子どもの間に行はれし俗歌ならん。

まほるらんは、もさぼるらんの約語なり。かへらやは、拍子の調なれば意味なし。

よんべは、ゆふべ、即、昨夜のことなり。

うなゐは、漢字にて髫髮とかき、垂髮を分けたるをいふ。即、童子のことなり。がなは、願ひの詞なり。うなゐもがなとは、童子來よかしの意。

おきのりは、賒にて、價の錢を借りて買ふことなり。

これならず多かれど、かゝず。これらを人の笑ふを聞きて、海はあるれど、心はすこしなきぬ。

これのみならず、彼等の歌へるものは數多あれど、此の日記にはかゝずとなり。此れ等の歌をきゝて人の笑へるを聞けば、それにまぎれて海はなほあるれど、さわぎし心も少しなきぬとなり。此の筆例の滑稽譜誠にぞある、讀者、そのこゝろして見よ。

住吉の濱にて風波にあふ條

五日、けふからくして、和泉の灘より、小津の泊をおふ。松原めもはる〳〵なり。かれこれ苦しければ、よめる歌、

ゆけどなほ、ゆきやられは、妹がうむ
小津の浦なる、きしの松ばら

大意、和泉の灘より、小津の泊に至る、其の間の松原、見わたす限り長ければ、ゆけども〳〵小津の松原は遠しとなり。

妹がうむは、緒の枕詞にて、緒は小津の小を緒にかけたるなり。

かくいつゝ來るほどに、船とくこげ、日のよきにと、催せば、梶取、ふなこどもに云はく、みふねより、仰せたぶなり、朝ぎたの、出で來ぬさきに、つなではやひけといふ。此の詞の、歌の樣なるは、梶取の自つからの詞なり。梶取は、うつたへに、我れ歌の樣なる事、いふとにもあらず、聞く人の、あやしく歌めきてもいへる哉とて、かき出せば、げに三十文字あまりなり。

大意、天氣もよければ、船疾く漕けと促せば、梶取、船子どもに命じて、みふねより、仰せたぶなり、朝北の、出で來ぬさきに、つなではやひけといふ。此の詞は梶取の、おのづからの詞なれども、聞きつけたる人、怪しく歌のやうなりとて書き出すを見れば、いかにも三十一文字なりきとなり。

朝ぎたは、朝の北風なり。

うつたへにとは、ひとへにといふに同じ、おのづからの詞なりとは、搏へて歌やうにいひたるにあらず、普通の詞なり、といふ意なり。

今日混な立ちそと、人々ひねもすに所るしるしありて、風浪たゝず、いましかもめむれあて、遊ぶ所あり。京の近づくよろこびのあまりに、あるわらはのよめる。

祈りくるかざまと思ふをあやなくに、

今日はかもめさへだに、涙とみゆらむ。

大意、今日は涙たゝぬやうにと、いのりたる甲斐ありて、風涙たゝず。かもめ群集して遊ぶところありしとなり。歌の意は、祈り來る甲斐ありて風吹かずと思ふに徒らに鷗の白きまで波のやうに見ゆる事かなと、涙を嫌ふ心を鷗にうつしていへるなり。

いましは、今なりしは、強めの助辭、あやなくは、無益徒事等をいふ。

といひて、ゆく間に、石津といふ所の、松原おもしろくて、濱邊遊し。又住吉のわたりをこぎゆく。あるひとのよめる、

今見てぞ、身をはしりぬる、住の江の、

松よりさきに、我はへにけり。

歌意、住吉の松は、古來、久しきためしにいへど、今現に見て、初めて、我が身のそれよりもさきに年老いたるを知りけりとなり。紀氏さまで老年にはあらざれど船中、風波なかれと心配したるに年も老ゆるはかりなりしを歎きたるなり。

こゝにむかしつ人の母、ひと日かた時も忘れねはよめる、

住の江に、舟さしよせてわすれ草、

忘るしわりやと、つみゆくべく。

となん。うつたへに、わすれなんとにはあらで、戀しきこゝち、忘はしやすめて又もこふる力にせんとなるべし。

大意、昔、死に失せし女子の母、そを戀ひ慕ひて一日片時も忘れねは、暫く忘れん爲めに、住の江に舟さしよせて、そこにありといふ忘れ草を摘みて行かん、しかし、そを以て一向に忘却し去らんとにはあらず。しばらく心やすめて、後、更に思ひ出つる時の力にせんの心なるべしとなり。其の情の切なること察すべし。

むかしつのつは、強めの助辭、むかしつ人は、昔の人といふにおなじ。

かくいひてながめつゝ來るあひだに、ゆくりなく風ふきて、たゞけども〳〵、しりへしぞきにしぞきて、ほと〳〵しく、うちはめつべし。楫取のいはく、此の住吉の明神は、れいの神ぞかし。ほしき物ぞおはすらん。そは今めぐるものか。さてぬさたてまつりたまへといふ。いふにしたがひて、ぬさたてまつる。かくたてまつれども、もはら風やまで、

いや吹きにいや立ちに、風浪の危ふければ、楫取又いはく、ぬさには御心のゆかねば、御舟もゆかぬなり。猶うれしと思ひ、給ふべきもの、たてまつりたまへ、といふ。又いふにしたがひて、いかがはせんとて、まなこもとこそ二つあれ。只一つある鏡をたてまつるとて、海にうちはめつれば、口惜し。されば、うちつけに、海は鏡のごとなりぬれば、ある人のよめる歌、

大意、不意に風吹きて漕けども〳〵船は後へ退きて、殆んと覆沒せんやうなれば、楫取は此の住吉の明神は、例の荒神にて、しかも今の人情によく似て物欲しがる神なれば、幣奉り給へといふ。その言に從ひて幣奉れども風靜まらで、益吹きたて〻危し。故に楫取又いふ、幣にては猶、神の心の滿足せぬ樣なれば、猶外に神の嬉しく思はるゝものを奉り給へと、又それに從ひて、このたびは鏡を奉るとて海に投げ入れたれは口惜し。されば直に海は鏡のごとく靜まりたりとなり。

ゆくりは不意、たけどもは漕げともといふが如く、しぞきは退きにてうちつけは、直にといふがごとし。

ちはやふる神の心を、あるゝ海に、かゝみを入れて、かつ見つるかな。

いたく住の江のわすれ草、きしの姫松などいふ神にはあらずかし。めもうつらく、かゝみに、神の心をこそは見つれ、楫取のこゝろは、神の御心なりけり。

大意、あるゝ海に鏡を入れたるに、波靜かになりければ、既に神の心を見たり。かくまでも、物貪る神ならば、世にやかましくもてはやす住吉の神にはあらず。岸の姫松などいふやさしき神にもあらず。げに龍口神の卑劣なる心は見たるとなり。

うつらくはつらくといふに同じ。楫取の心とは、其の伺に從ひて神の心を見たる故、この楫取の心こそ神の心なれ、とはいひたるなり。

枕草子

枕草子は今を距ること殆ど九百年前の作なり。作者は誰も知る清少納言といへる女子にて、當代の歌人清原深養父の曾孫なり。父は肥後守清原元輔といひ

て村上天皇の天曆五年勅を奉じて後撰和歌集を撰びたる一人なり。少納言は一條院天皇の皇后宮定子に宮仕へせしが才學ありて紫式部と名を齊くせり。皇后宮いたく其の才學を愛でさせ給ひ帝に奏して內侍といふ高官にまで昇さんの御心なりしかども、障るとありて果さゞりき、皇后宮にも落飾ありて後、やがてかくれ給ひしかば、少納言も世をあぢきなく思ひて諸國に流浪し、さも落ぶれて終りたる由なれど詳じき事は傳はらず。

さて、此の草子は少納言がいまだ宮仕して徒然なる里居のほどに書きし隨筆なれど、その皇后宮の御威勢ありし事、又我が身の世にほめはやされし事などを羅へるも詞あれば晩年に近づきて書き加へたるところも多きを知るべし。

本書の性質は、おもに作者の經歷及び見聞せし事實をありのまゝに記したるものなれば、讀者おのづから、當時の政治風俗のやう〳〵移りて、王朝の次第に衰へんとする有樣さへ見られなむかし。その文脈は謂はゆる一氣呵成の筆づかひにて、巧に簡驗なる上に又妙に優美なり。これ我が文學の花とも稱せられる名高き源氏物語とも並べ稱せらるゝ所以なり。少納言はたゞ其の才學だてのすきて紫式部の德行に及ばざりしこと、間々文中にあらはれて見ゆるは口をしきことにこそ。本書を枕草子と名づけたるは、初よりしか名付けて書きしにはあらで、たゞ何となく書き記したる隨筆なるを後人のかくは名づけしものなり。そも古きことにて其の由は、舊說に卷末なる作者の詞に、枕にこそは、し侍ちめとわりしによりてかくは名づけしものとぞ。草子は草稿草案の義なり。此の書註釋の書は清少納言枕草紙といふ十五卷、枕草子春曙抄といふ十二卷、清少納言傍註といふ五清とあり。今はそれらを參考して例の歷代文學なる大進生昌に門の狹きをせむる條、木の花は草の庵を離れが尋ねんと答へし條、このきみと秀句せし條、むづかしげなる物の五節だけを講ずべし。

大進生昌に門の狹きをせむる條

大進生昌が家に、宮の出でさせ給ふに、東のかどはよつあじになして、それより御輿は入らせ給ふ。

大意、大進の役なる生昌の家に宮の行啓し給ふに東門四足になして其の門より宮の御輿は入らせ給ふとなり。

生昌は文章生より中宮職の大進といふ官にまで昇りし人なり。中宮に近く仕へたりし故、ときに行啓もありしものならむ。[illegible]宮は一條天皇の皇后定子の御事にして、即清少納言が仕へ奉りし君なり。

北の門より女房の車ども、陣屋のみねばいりなんやとおもひて、かしらつきわろき人も、いたくもつくろはず、よせてゐるべきものと思ひあなづりたるに、びらうげの車などは、門ちひさければ、さはりてえいらねば、例の筵道をきて、おるゝに、いとにくゝはちだゝしけれどいかゞはせん。殿上人地下なるも陣に立ちそひ見るもねたし。

大意、北の門口より供奉の女房の車どもは番人の居らざれば、車ながら入らんと思ひて頭髪の亂れたるも繕はず、大進の家なれば家の中まで車をよせて下るべく思ひ侮りたるに、びらうげの車は門狹くして其のまゝには入り得ざれば、止むことを得ず例の筵をしきたるに下りたるが餘程口をして殘念なれどいかにもせん方なし。殿上人、地下等の人々も陣所に立ちそひてその筵道を歩行するを見るも殘念なりとなり。[illegible]

びらうげの車は、檳榔樹の葉を以て飾りたる車のことにて、太上天皇若くは四

[illegible]位以上のものならでは乘ることならぬ制なれど、後はに姫君などの召し給ひ[illegible]たるに清少納言も添乘したるものなるべし。[illegible]

殿上人は四位五位の人にて昇殿をゆるさるゝ身分のもの、地下は、其の以下のものにて昇殿をゆるされぬ人なり。

御前に參りてありつるやう啓すれば、どゝにも人は見るまじくやはなどかはさじもうちとけつゝ笑はせ給ふ。[illegible]

大意、清少納言、中宮の御前に出でゝ女房等車ながら門内に入りて、人にも見られまじと思ひしに、却て人々に見られて殘念なることを申しあげゝれば、中宮は此の家にも他人の見るべきに、などてそのやうに慌みなく身の飾りをもゝ忽かにしたるぞと笑ひ給ふとなり。[illegible]

されどそれは皆目なれて侍れば、能くしたてゝ人侍らんにしてこそ、おどろく人も侍らめ。[illegible]

大意、[illegible]殿上人等は、皆、日ごろ見馴れて、さまで女房などには目もつけず、ことさらに髪など能く繕ひてこそ却て彼の人々は驚きもせめ

となり。これは中宮の御歌に對して少納言のいへる詞なり。[illegible]

さてもかばかりなる家に車入らぬ門やはあらん。見えば笑はんなどいふほどにしも、これ參らせんとて御硯などさしいる。

大意　さても〳〵かく大進をも務むる人の家に僅か車の入るべき門なきは不都合なり。大進を見ば笑ひくれんなどいふ折しも、大進出で來て宮の御硯などもちてこれ參らせんとてさし入るゝなり。[illegible]

いでいとわろくこそおはしけれ。などてか其の門せばく作りて、住み給ひけるぞといへば、笑ひて、家のほど身のほどにあはせて侍るなりといらふ。[illegible]

大意　大進來るを待ち搆へて折わしく來給ひしものかな。いかで門をあのやうに狹く作りて住み給ふぞと少納言のいへば、大進打笑ひて、それは己が身分に應じて作りたればなりと答ふ。

いでは、發語、即俗に云ふさあとも見るべし。いらふは、應答のことなり。[illegible]

されど門のかぎりを高くつくりける人もきこゆるはといへば、あなおそろしとおどろきて、それは于定國がことにこそ侍るなれ。ふるき進士などに侍らずばうけ給

ばりしるべくも侍らざりけり。たま〳〵　此の道にまかりいりにければ、かうだに辨へられ侍りといふ。[illegible]

大意　上をうけて清少納言が君は左樣にいはるれどされど家不相應に門はかりを高く作りたる人も聞こゆるにといへば、大進あゝおそろしきことよとおどろきて、それは支那の于定國がことなり。かゝる故事は年來修業を重ねたる進士ならでは承知すべくもあらず。おのれたま〳〵　此の道に入りければかうも辨へられきといへるなり。

于定國がことは前漢書に見えて蒙求にも出でたるが、于定國の父于公といふ人其のすむ里の門破れたれば、里人集りて之れを作る時に、于公のいはく、門を高く大にたてよ、我れ民ををさむるに陰德あれば、我が子孫に必諸侯あらんと。四馬高蓋の車をいれんと。果して、其の子于定國以下世に榮えたりと、清少納言己が知れるまゝに此の故事をひきて博學のさまを顯したるなり。[illegible]

進士は我が國にも行はれたりしが、支那がもとにて、國々の學問よき人々を京師にめして試驗の上及第したるものをいふ。こゝにふるき進士といへるは多

年研究を重ねて漢書などにも通じたる進士のことなり。さて、大進生昌は大學に入りて文章生を經たるものなればみづからたま〳〵此の道にまかりいりにければがうたに辨ぜられ侍りといへるなり。此の道とは文章道をさす。

その御道もかしこからざめり。越道敷きたれば、曾おちいりてさわぎつるはどいへば、雨のふり侍ればげにさも侍らん。よし〳〵、又仰せかくべき事もぞ侍るまかりたち侍りなんとていぬ。

大意、少納言戯れて越道しきたる道を大學の文章道にかけて越道の道もよからざれは其の學びの道もかしこくあらじ。越道しきたれば曾おちいりてといへば、大進生昌此の頃雨降り頻りたれば、道もあしかりし事なちん。又、此の上いかなる難義を仰せかけられんもはかりかたしとてこゝを出でゝ行きしありさまなり。

いぬとは往ぬにて退出したることなり。

何事ぞ生昌がいみじうおちつるはと問はせ給ふ。あらず。車のいらざりつること、ひ侍ると申しておりぬ。

大意、中宮何事ぞ生昌が甚恐れたるはと問はせ給へば少納言いや別の事にも侍らず、車の門に入らざりしことをいひ侍りし也と申して宮御前を下り退きしなり。

あらずは否なり。おりは、下りにて宮の前を退出することなり。

同じつぼねにすむ若き人々などして、よろづの事も知らず、ねぶたければ曾ねぬ。

大意、少納言と同じ局に住む若き人々などゝともにやどりて萬事打忘れて眠ければ、曾寢ねぬとなり。

東の對の西のひさしかけてある北のさうじには、かけがねもなかりけるを、それもたづねず、家ぬしなればあないをよく知りてあけてけり。

大意、東の對といふ御殿にて西の方の廂をかけて立て廻はしたる北面の障子鉤匙もなかりけるをねぶたければそれも尋ねず寢たるに家主なれば座席の案内をもよく知りて忍ひ來しとなり。

さうじは障子にて、今いふからかみのことにて、今いふ障子は其ところにはあかり障子といへり。

家ぬしは、清少納言等の宿れる家の主人にて、即、大進生昌のことなり。

あやしう、かれはみたるものゝ聲にて、さぶらはんにはいかゞとあまたゝび云ふ聲に、おどろきて見れば、几帳のうしろにたてたる燈臺の光りもあらはなり。障子を五寸ばかりあけていふなりけり。いみじうをかし。更にかやうのすき〳〵しきわざ夢にせぬものゝ、家におはしましたりとて、むげに心にまかするなめり。とおもふもいとをかし。

大意、變な枯れ聲にて、それへ參らんにはいかゞとたび〳〵いふ聲に、少納言目がさめて見れば、几帳のうしろにたてたる燈臺の光りも顯らかなり。障子を五寸ばかりあけて、それよりいへるなり。甚をかし。どんと斯樣な好色めきたる所爲はゆめ〳〵せぬものゝ、我が家に宮の行啓まし〳〵たりとて遠慮もなく何事も心任かせにするかと思ふもいとをかしきことなりとなり。

几帳は當時專ら用ひたるものにて、帳を垂れたる今の衝立の如きものなり。

すき〳〵しきわざは好き〳〵にて好色の事なり。大進生昌は、直なる人にてかく好色がましきことは日ごろにもせざりしなり。

むげは、俗に謂はゆる一向に遠慮なしにといはむほどの義なり。

我がかたはらなる人をおとして、かれ見給へ。かゝる見えぬものあめるをといへば、かしらをもたげて見やりて、いみじう笑ふ。あれはたぞ。げせうにといへば、わらず。家あるじ、局あるじと、定め申すべきことの侍るなりといへば、門の事をこそ申しつれ。障子あけ給へとやはいふ。猶其の事申し侍らむ。そこにさぶらはんはいかに〳〵といへば、いと見苦しき事、更にえおはせじとて笑ふめれば、若き人々おはしけりとて、引きたていぬる後に笑ふこといみじ。

大意、清少納言が自身の傍に相宿りせる若き女房等を起してあれ見給へゝ、のやうに見知りもせぬものゝ來れるよといへば一同頭をあげ見て大に笑ひ、あれは誰ぞ、婦人の寐たる所をも憚からずわらはなりといへば、生昌否とよ、わらはに寐所を見んとにあらず、家の主人が此の部屋の主人と論ずべきことありて來れるなりといへば、少納言、門を廣くし給へとこそいひつれ、障子明け給へとはいはざりしものをといへば、生昌猶其の門のことを申さん、そこに參らんはいかにといへば、此の女中のみの家に入り給ふは甚見苦しき事なり。何と

て來給ふべきとて笑ひ、成る程持き人々も居らるゝわいとて障子引たてゝ出で行きし後にて、一同笑ふこと甚しかりしとなり。[illegible]もたげてはもちあげての約言。あれはたゞはあれは離れゝなり。[illegible]けせうは字音にて、即、顯昭なり。此の頃の熟字にて物の暴露なるをいふ詞なり。家あるじは、大進生昌のこと、局あるじは、清小納言のことなり。さだめは論定なり。[illegible]

あけぬとならばたゞまつ入りねかし。消息をするに、よかなりとは、離れかはいはんと、げにをかしきに、つとめて御前に參りて啓すれば、さる事もきこえざりつるをよべのことにめでゝ入りにたりけるなめり。われ、われをはしたなくいひけんこそ、いとはしけれと笑はせたまふ。[illegible]

大意、障子あくる程ならば直に入り來れかし。忍び入らんはいかにと案内し問ふに、よろしと離かいふものあらん、さもをかしきことよ。さて翌朝宮の御前に出でゝ、前夜のこと申せば、日ごろは生昌が少納言に心ありとも聞かざるに、昨夜の門のことにつき其才學を愛でゝ入りしならん。わゝ生昌を情なくいひ

たるは氣の毒なりと笑はせ給ふとなり。

消息は案内の意、つとめては早朝のこと、こゝにては其の翌朝をいふなり。[illegible]よべは、昨夜にて今いふゆふべのことゝはしたなくは、無情の意、今俗に不都合といふ語なり。[illegible]

いとほしは不憫のこと、俗に謂ふ氣の毒の義なり。[illegible]

木の花は[illegible]

梅の濃くも薄くも、紅梅、[illegible]

大意、およそ此の一章には木の花の面白き限りをあげていへるにて、此の一節には梅のことをいへり。梅の花は、其の色、濃くもあれ、薄くもあれ、紅梅こそ最もよけれとのこゝろなり。[illegible]

櫻の花びら多きに、葉色ときが、枝細くて咲きたる、

大意、この一節には櫻の花のめでたきをかけり。櫻の中にては、花びら大きくて、葉の色つき、枝細きに咲きみちたるがよきとなり。

藤の花はなほ長く、色よく咲きたるいとめでたし。[illegible]

大意、此の一節には藤の花のめでたきことをいへり。藤の花は、たけ長くして色よく咲きたるが最もよろしとなり。[illegible]

さなひはさなやかになびきたるものゝ、こゝにては藤の花のたけのことをいへ[illegible]るなり。[illegible]

卯の花は、品劣りて何となけれど、咲く比のをかしう、ほとゝぎすの、陰に隠るらんとをかし。祭の歸さに、紫野のたり近きあやしの家ども、おどろなる垣根などに、いと白う咲きたるこそをかしけれ。青色の上に白きひとへがさねかづきたる、青くち葉などにかよひていとをかし。

大意、こゝには卯の花のことをいへり。卯の花は、上の梅、櫻、藤などに比べては品位劣りて別段見るところもなけれど、その咲く時節よく、郭公のその花陰に隠れやせんと思へは殊にをもしろく、又、賀茂の祭りの歸途、紫野の邊に、賤が家ども荆棘もていへる垣根などに、卯の花白く咲きみちたるをもしろし。其さま、垣は青く卯の花は白くして、さながら青色の上に白き單、重ね着たる青朽葉といふ衣服に似て、最もをもしろしとなり。

祭は、賀茂の祭。紫野は地名、あやしき家はいやしき家、即賤が家なり。[illegible]おどろなる垣根は荆棘をもて結ひたる賤が家の垣根のさまなり。[illegible]青くち葉はあをばみたる朽葉、こゝにては、かさねのいろめの名、即衣服の名稱なり。[illegible]

四月のつごもり、五月のついたちなどの頃ほひ、橘の葉のいと濃く青きに、花のいと白く咲きたるに、雨のふりたるつゞめてなどは、よになく心あるさまにをかし。花の中より、みのこがねの玉かと見えて、いみじくきはやかに見えたるなど、朝露にぬれたる櫻にも劣らず、郭公のよすがとさへ思へばにや、猶更にいふべきにもあらず。

大意、この一節には橘のめでたきことをいへり。橘の葉の最も濃く青きに、花の最も白く咲きたるに雨の降りたる早朝などは、世に此の上なく心ありげにをもしろし。又花の中より實の黄金の玉の如く明らかに見えたる狀などは、なほ[illegible]かゝに朝露にぬれたる櫻の見事さにも劣らず、まして郭公のたよるところと思ふからにや、猶更ことあたらしくほむべきにもあらずとなり。

こがねの玉は黄金の玉にて、橘の實の黄色なるをたゝふとくいひたるものなり。

梨の花よにすさまじくあやしきものにして、目に近くはかなき文つけだにせず、あいきやうおくれたる人の顔など見ては、たとへに云ふもげに其色よりして、あいなく見ゆるを、もろこしに、限りなき物にして、文にも作るなるを、さりともあるやうあらんとて、せめて見れは、花びらのはしに、をかしき匂ひこそ心もとなくつきためれ。楊貴妃みかどの御使に逢ひて、泣きける顔に似せて梨花一枝春の雨をおびたり。などいひたるは、おぼろげならじと思ふに、猶いみしうめでたき事は、類ひあらじとぞおぼえたり。

[illegible]大意[illegible]この一節には梨の花のことをいへり。梨の花は、世に捨てられて離れもせはやすものもなく、從て梅櫻の如く詩文をつくることもせず、却て、愛敬なき殺風景の人を見て、梨の花のやうなりとたとふるほどなるを、唐にありてはこを限りなく愛でゝ詩文につくることも多けれは、仔細のあることならむと心をとめて見れは、さて乙そ、花びらのはしに、美事なる少し赤き色のあるかなきかの如くつきたるあり。されは唐の楊貴妃、死して玄宗皇帝、歎き堪へられず、使を遣はして其の靈魂を求められしに、果して貴妃に逢ひて帝のことを傳へたるに、妃、涙を流して歎きたるさまを、梨花によせて作りたる詩などあるは大かたの事にはあらじと思ふに、猶甚めでたき事は、他に比類もなきやうに思はるるなるなり。[illegible]

[illegible]すさまじくは、冷じくにて不用らしく殺風景の意、あやしくはよからぬものといふが如し。[illegible]

目に近くは目近く玩ぶ意、あいきやうおくれたる人は、愛敬の顔付人に劣りたるものをいへるなり。あいなくは愛なくのことゝなり。[illegible]

楊貴妃は唐玄宗皇帝の寵妃、みかどは玄宗皇帝のことなり。

梨花一枝春の雨をおびたりは、詩の句、即、玉容寂寞淚闌干、梨花一枝帶春雨の下の方の句なり。[illegible]

おぼろげならじとは、大かたのことにはあらじといはんがごとし。[illegible]

桐の花、紫に咲きたるは、猶をかしきを、葉のひろごりさまうたてあれども、又ことゝ木どもと、ひとしういふべきにあらず。もろこしにことゝ〳〵しき名つきたる鳥の、これにじも住むらん、心ことなりまして琴につくりて、さま〳〵なるねの出でくるな

どをかしとは、世の常にいふべくやはある。いみじうこそはめでたけれ。[illegible]

大意　こゝには桐の花をいへるなり。桐の花の紫に咲きたるは猶よけれど、葉のあまり廣がりたるは、何となくよからぬやうなれど、さりとて、外々の木とはまだ同じうは言ふべからず。支那に仰山に言ひはやす鳳凰のこの木に住むといへるを思ふにも、特別の思ひあり、それのみならず、率に作りて種々の音出づるなど思へば、世の常の如くにいふべくもあらず、いとめでたきものなりとなり。[illegible]

こと木は、異なる木といふこと、こと〳〵しきは仰山といはむがごとし、ことごとしき鳥とは鳳凰のことなり。支那にては鳳凰は太平の世に出づる瑞鳥、梧桐に栖むものなりとせり。

木のさまもにくげなれど、あふちの花いとをかし。かれ花にさまことにさきて、かならず、五月五日にあふもをかし。

大意　こゝはあふちのことをいへり。木の形狀は見苦しけれど、その花はいとをもしろし。離れ〳〵に細かに他の花と異樣に咲きて、必五月五日即端午の節

句にあふものをもしろしとなり。[illegible]

あふちは楝にて栴檀といふ木なり。かれはなは離れ〳〵に細かなる花。さまことは樣異、他のものと趣きを異にせるをいふ。[illegible]

かならず五月五日にあふとは、此の楝の木は五月五日の端午の節句に菖蒲をふくが如く、軒に楝をふくならひありし故かくはいひつるなり。

[illegible]草の花を離れが尋ねんと答へし條[illegible]頭中將の、そゝろなるそらごとを聞きて、いみじういひおとし、なにしに人と思ひけんなど、殿上にてもいとくなんの給ふときくに耻かしけれど、まことならばこそわらめ。おのづから聞きなほし給ひてんなど笑ひてあるに、黑戸のかたへなどわたるにも、聲などする折は袖をふたぎて歸見あることせず。いみじうにくみ給ふを、とかくもいはず、見もいれで過ぐす。[illegible]

大意　頭中將が清少納言の事に關する漫然たる虛說を聞きて、甚、言ひ下げ、人間とだに思はずなど殿上にてもいはるゝといふを聞くに耻けれど、必貴賤人の區別にて、眞說ならば、おのづから聞き正し給ふべしと、取りも構はざるに、

くろどのかたへなど行く時にも、清少納言の顔色などする時は、頭中將はやがて顔に袖をおひひて少納言をつゆ見給はず、頗る惡み給ふを、清少納言は、みづからは其の言ひわけもせず、見いれもせず打ち過すとなり。

頭中將は、恒德公の三男正暦五年八月廿八日藏人頭たりといふ。

黑戸のかたは清涼殿の北の瀧口の戸の西なる由。

そいろなるは漫りに、又は心得なく、何となくいふべき意なり。

二月のつごもりがた、雨いみじうふりて、つれ〳〵なるに、御物忌にこもりて、さすがにさう〳〵しくこもれ、物やいひにやらまし、となんの給ふと、人々聞れど、よにあらじなどいらへてあるに、一日しもに暮らして參りたれば、夜のおとゝに入らせ給ひにけり。

大意　三月晦日雨甚じく降りて徒然なれば頭中將禁中の御物忌に籠りて、清少納言を惡みは惡みたるものゝ、隨分物淋ければ、物いひやらんとの給ふと、或る人々より清少納言に告げたれど、清少納言は頭中將のあれほどにまで我を疎んじ給へば、よも物いひおこせ給ふ等の事はあるまじと返辭してあるに、其

の日一日清少納言は、局に居籠し、夜に入て皇后の御坐所に參りたれば、宮は御寢ありきとなり。

つごもりは、月籠りの略言、つれ〳〵は徒然、若くは無聊といはんが如し。

さう〳〵しは漢字の寂寥にあたり、物さびしきことをいふ。

夜のおとゝは御寢所のことなり。

なげしの下に火近くとりよせて、さし集ひて、へんをそつく。

大意　次の間の長押の下に、燈火近くとり寄せて、女房等集合して、へんつきの遊びをなせり。

へんをそつくは、文字の旁と篇とを分け、其の旁を隱くし、篇ばかりを見せて、おの〳〵其の恰好なる旁をいひあつる遊びとなり。

あな嬉しや、とくおはせなど見つけていへど、すさまじき心地して、何しにのぼりつらんとおぼえて、すびつのもとに居たれば、又そこにあつまりゐて、物などいふに、

大意　女房等の篇突の遊びをなせるところへ、清少納言出でたれば、皆喜びて早くこれへ來給へなどいへど、清少納言は、宮の居給はぬより、きようのさめた

る心地して、如何にしてそれに上らんと思ひ、炭櫃のあるあたりに居たれば、女房等又そこに集まりて種々物などいふとなり。

すさまじきは荒涼の意、即きようのさめたること、又はおもしろくなきをいふ。

何がしさぶらふと、いとはなやかに云ふ。わやしくいつの間に、何事のあるぞと問はすれば殿守づかさなり。たゞこゝに人づてならで申すべきことなんといへば、さし出でゝとふに、これ頭中將殿のたてまつらせ給ふ御かへりとくと云ふにいみじくにくみ給ふを、いかなる御文ならんと思へど、たゞ今いそぎ見るべきにあらねば、いね、いま聞こえんとて、ふところにひき入れていりぬ。

大意　折しも外より何某にて侍り御使に參りぬときはやかに問ひ來るものあれば、少納言は、只今こそ參りたるに、其の間に何事のあるぞとわやしく思うて問はすれば、其の使は殿守司にて人傳ならず滑少納言に直接に申すべきことありといふ。即ち立ち出でゝ問へば、使、文を取り出でゝ、これは頭中將の參らせ給ふものなり。御返事早速にといふ。少納言、日ごろわれほどにまで憎み給ふに、如何なる御手紙ならんと思へど、直に披見すべきにもあらねば、使は先づ歸

れ、返事はやがて此方よりすべしといひ、其の文は懷中して、もとの座に入るとなり。

何某さぶらふとは何の誰と申者にて候ふと名のりて使者に來りし由を云ひ入れしなり。

殿守づかさは殿上人等の使なる故に此の用にあたりしものなり。

人づてならで申す、間に人を經ずに申す、即ち間接ならで直接に申すといはむがごとし。

いねは往ねにて、歸れといふことなり。

猶人の物いふを聞きなどするに、すなはち立ちかへりて、さらば其のわりつる文を給はりて、となんおほせられつる。とく〳〵といふに、わやしく伊勢物語なるやと見れば。

大意　清少納言はもとの座に入りて引續き女房等の話しを聞けるに、さきの使、又たち歸り來て、只今の御文、直に見給はぬならば賞ひ來れと中將殿仰せられ、疾く返し給へといふ故、少納言はわやしく何事なるやと披見すればの意な

り。

伊勢物語なるやとは、舊說伊勢物語に至急の手紙のことをいへり、即長岡の母より業平へとみの事とて御文ありしといへり、とみは頭にて急におなじ。清少納言の伊勢物語なるやといへるは至急の事なるやといふ意なり。

書き海やうにいときよげに書き給へるを、心ときめきしつるさまにもあらざりけり。蘭省花時錦帳の下と書きて、末はいかに〳〵とあるを、いかゝはすべからん。御前のおはしまさば、御覽ぜさすべきを、これが末知りがほにたど〳〵しき、まんなに書きたらんも見ぐるし。など思ひ廻はすほどもなく、せめまどはせば、唯其おくに、すびつの消えたる炭のあるして、草のいほりを離れかたづけんとかきつけてとらせつれど、返事もいはで、皆ぬて、

大意　書き海様に端正に書き認めたれど、最初何事なるやと心ときめきしたる程の事にもあらず、只白氏文集なる蘭省花時錦帳下廬山雨夜草菴中といふ句の上の句だけを書きて、其の末はいかに〳〵とあるを、清少納言はいかにすべき、皇后宮のおはしまさば、此れを御覽に入るべきを、又、これが末知覽に平生女子の書きなれもせぬおぼつかなき楷書に書きたらむも見苦しなど思ひ廻はすに、返事を疾く〳〵と催せば、中將の文の奥に、炭櫃の消えたるすみのあるして、廬山雨夜草菴中を書き用して、草の菴を離かれんと書きて與へたるに、中將の返事もなく、清少納言等もみなねたりとなり。

心ときめきしつるさまにもあらずは頭中將最初物淋びしければ物いひにやらましといひ、又、至急の手紙などを送らるゝは日ごろにくみ給へるに引かへて、何事のやさしき心もやと、心ときめきしほどにもあらず、思ひの外の事なりとなり。

蘭省花時錦帳下は白氏文集中に詠みし句にて、頭中將がこを認めし意は、自ら此の雨夜御物忌に籠て徒然なるに、清少納言は夜の御殿の錦帳の下に在るを思ひてかくは認めたるなり。

草の菴を離れかれんとは、右下の句の廬山雨夜草菴中のことにて清少納言是れば、かりの事を離れかれんの心にて、自ら頭の中將に惡くまれければなどて問ひ給はんとの意を含ませるなり。

たど〳〵しきはしかとせぬおぼつかなきことをいふ。

つとめていとときくつぼねにおりたれば、源ノ中將のこゑして、草の庵やある〳〵と、おどろ〳〵しう問へば、なとてかさ人げなきものはあらん。玉の臺もとめたまはましかは、出できこえてましといふ。

大意　清少納言、翌朝いと早く局に下りたれば源ノ中將○○の聲にて草庵ありや〳〵と驚けるさまにて問へば、清少納言、爭で左樣の下品なるものあらん。玉の臺とて尋ね給はんにこそ出でゝも逢はめといふとなり。

おどろ〳〵は驚ろかしにおなじ。

あなうれし。しもにありけるよ。上まで尋ねんとしつる物をとて、よべありしやう、頭ノ中將のとのゐ所にて、すこし人々しきかぎり、六位までゐつまりて、酒の人のうへ、今昔と語りていひしついでに、猶此の者むげに絶えはてゝ後こそ、さすがにえあらねもしいひ出づることもやと待てど、いさゝか何とも思ひたらず。つれなきがいとねたきを、こよひあしともよしとも、定めきりてやみなんかしとて、曾云ひ合はせたりし事を、

大意　源中將清少納言の御前へ出でずありしを喜びて、前夜の事を委はしく物語りせらる。即ち、中將がとのゐの所にて、やゝ物心をも知れる人々打集ひて、世の人評、又は、今昔の物語りなどせる折しも、猶清少納言と一向に中絶えて後悪みながらも、さすがに堪へ兼ね、若し彼の隱人のいひわけを清少納言の云ひ出す事もあらんと待てど少しも其のいひわけせず、つれなくねたく思ひしを、今宵こそ清少納言の善悪をも論定して止まばやと云ひ合せて、試に、彼の文を遣はしゝ事をとなり。

とのゐの所とは殿上の番所のこと。むげは無下にて一向といはむがごとし。

もしいひ出づる事もやとは、隱人のいひわけをなすこともがなとなり。即さきに、いみじうにくみ給ふをとかくもいはず見もいれで過ぐすとありし結びなり。

只今は見るまじきとて、入り給ひぬとて、殿守づかさ來りしを、又おひかへして、唯、袖をとらへて、どうざいをさせず、こひとりもて來ずは、文をかへしとれといましめて、さばかりふる雨のさかりにやりたるに、いとへく歸り來り、これとてさし出たるが、

ありつる文なれば、返してけるかとうち見るに、あはせて、ゐめけば、あやしいかなる事ぞとて、皆よりて見るに、いみじきぬすみかな。猶えこそ捨つまじけれと見さわぎて、これがもとつけてやらん源中將つけよなど云ふ。夜ふくるまで、つけわづらひてなんやみにし。此の事、必語り傳ふべき事なりとなん、定めしと、いみじくかたはらいたきまで、いひきかせて、御名は今は草の庵となんつけたるとていそぎたち給ひぬれば、

大意　折角云ひ合はせて遣はしたる文を、今は見ずとて入り給ひぬとて殿守司、歸り來りし故、滑少納言をして東西に身ゆるぎもさせず、直に返事取りて來るべし。さなくはもとの文取り返へして來れと命じて、雨のふるさかりに遣はしたるが、やがて歸り來りてさし出すを見れば、青き紙やうに認めたるもとの文なれば、されはそのまゝ返したるかと打見ると同時に皆感じてゐめけば、何事ぞと打寄りて見るに『草の庵を誰か尋ぬん』の返事なれば、滑少納言こそ只ならぬ人なれと打さわぎて、其の上の句つけてやらん源中將つけよなどいひて人々夜更るまで考へて止みし此の事、世に傳へてほめ草にすべしなどいひき。

とにくきまで云ひきかせて、少納言の名は此の後草の庵と名づけたりとて急き立ち出で給ひしとなり。

いみじきぬすみかなとは普通の人にすぐれたりとほめんとて洒落ていへる詞なり。憎むべき盜賊のことにはあらず。

いとわろき名の末まであらんこそ口をしかるべけれといふほどに、修理亮則光、いみじきよろこび申しに上にやとて參りたりつるといへば、なぞ。つかさめしありともきこえぬに何になり給へるぞと云へば、いで、まことに嬉しき事の、よべ侍りしを、心もとなく思ひわかしてなん。

大意　滑少納言、源中將より前夜の事を聞きていとわろき名の傳へらるゝは口をしなど、ひとりごつ折しも、修理亮則光賀詞申さんとて是まで來りしといへば、司召のありとも聞かぬに、何になり給へるぞと滑少納言のいふに、則光、實に喜ばしき事の昨夜ありつるを、早く云ひ聞かせたく思うて夜の明くるを待ちかねたりとなり。

つかさめしは秋季の京官の除目をいふ。除目に官を得し人はよろこびとて方

々へ押賀することあり。こゝにては、則光よろこびに參りたりといふについて、

清少納言、わざとかくいへるなり。

かばかりめんぼくあることなかりきとて、はじめ、ありけることゝも、中將のかたりつるおなじことゝもを云ひて、此の返りごとにまたがひて、さるものありとだにおもはじと、頭、中將の給ひしに、たゞにきたりしは、中々よかりき。

大意　則光、斯程面目ある事はなかりきとて、さきに源中將のかたりたることゝ同じことゝもをいひて、此の返事のごときことあらんとも思はじと中將のいひたりしに、最初返事もなしに歸りしは、却てよかりきとなり。

もて來たりしたびは、いかならんとむねつぶれて、誠にわるからんは、せうとの爲もわるかるべしと思ひしに、なのめにだにあらず、そこらの人譽め感じてせうとこそきけとの給ひしかば、また心には、いとうれしけれど、さやうのかたには、更にえさぶらふまじき身になん侍ると申しゝかば、ことくはへ聞き知れとにはあらず、たゞ人にかたれとてきかするぞとの給ひしなん、すこし口をしきせうとのおぼえに侍りしかど、これがもとつけ試みるに、いふべきやうなし。ことに又これがかへしをやすべきなどいひわはせ、わろきことといひては中々ねたかるべしとて夜中までなんおはせし。

大意　殿守司が返事もて來りし時は、實に心配して惡しき時は則光の爲にも惡しからむと思ひしに、豈圖らんや、草の花の返事の目出たかりしは、皆打感じて則光聞かれよと頭中將の戯れて云はれし、實に心には嬉しけれど則光は歌道の心なしと申せば、又人々別に詞を加はへよとにはあらず、只人に傳へ聞れといふぞと云はれしは、少し我が身の待遇殘念なりしが、其の上の句を試みるに、いふべきやうなく、又殊に之れが返歌すべきなど云ひわはせ、其の返歌わろき時は却てせぬこそよけれとて、夜中までおはしたりとなり。

せうとは兄のこと即則光をいふ、則光は清少納言と交際親密なりし故人稱して兄妹のやうなりといへり。實の兄妹にはあらず。

なのめは、おほよそに、又はおほかたに、など解すれど、爰になのめにだにあらずといへるは、草の花の返事のすぐれたるを、世の常ならずと賞めたるなり。

これは身の爲にも、人の爲にもさていみじきよろこびには侍らずや。司召にせうせ

うのつかさ得て侍らんは何とも思ふまじくなんといへばげにあまたして、さる事わらんとさらでぬたくもありけるかな。これになんむねつぶれてあぼゆる。

大意　則光が前夜の話をなし上の問に應じて是れこそ我が身の爲にも其許の爲にも喜ぶべき事なれ、司召に少々の司得たりとて、さまでには思ふまじといへば、清少納言げに左樣に人々集ひていひ合はせし事ともさらで返事せし事のぬたさよ、之れを聞けば胸もつぶれて覺ゆとなり。

あまたしては多人數集まりてといふに同じ。

このきみと秀句せし條

五月ばかりに、月もなくいとくらき夜、女房やさぶらひ給ふ。とこそ〳〵さて云へば、「出でゝ見よ。例ならずいふは誰そ」と仰せらるれば、

大意　五月のころ或る暗夜のことなりき。女房はゐ給ふかとてくち〳〵に呼べる故、皇后宮何事ぞと思して常ならずこそ〳〵にていふは誰れぞ、出でゝ見よ、と清少納言に仰せらるればとなり。

出でゝ、「こは誰そ。おどろ〳〵さう、きはやかなるは」といふに、物もいはで、みすをもたげて、そよろとさし入るゝは呉竹の枝なりけり。

大意　清少納言、皇后宮の仰に從ひ、出でゝ、人の驚かるゝばかりきはたてゝ人を呼ぶは誰れぞと咎むるに、その人々何の答へもせず簾を掲げ、そよ〳〵と物音させて指し入れたるを見れば、竹の枝なりしとなり。

おどろ〳〵さうとは、おどろかるゝばかりといふをなだらかにいひなしたる音便なり。

きはやかにとは、きはたてゝといふを、副詞に云ひなしたる詞なり。

そよろとは、そよ〳〵とといふに同じく、もの音のするに用ふる詞なり。多くすゝきなどのうごく音に用ひたる例あり。

「おい、此の君にこそ」といひたるを聞きて、「いざや。これ殿上にゆきて語らん」とて、中將、新中將、六位どもなどありけるは往ぬ。

大意　清少納言そのさし入れたる竹を見て、おゝ此の君こそはといひつるを聞きて、其の竹を入れたる人、即、最初にこそ〳〵して呼びし人々いざ殿上に行きて、此の由語らんとて、中將、新中將、六位どもなど、ゐたる人々は皆歸り去りぬ

となり。蓋し、この殿上人達は、もと此の呉竹の歌よまんとて來たりしものを、先づ清少納言に、この君といふ秀句云はれたればそのこと人に語らんとて歸り去りたるなり。

この君とは竹のことをいひしものなり。竹を此君といひし古きためし和漢に多し。今にも風流の人々は竹を、君子などいひて松梅蘭などゝならべ稱ふるなり。

頭辨はときより給ひて「わやしく往ぬる者どもかな。おまへの竹を折りて歌よまんとおつるを、職にまゐりて同じくは女房などいひ出でゝをといひて來つるを、呉竹の名をいと疾くいはれて、いぬこそをかしけれ。誰がをしへを知りて人のなべてゐるべくもあらぬ事をばいふぞ」などのたまへば。

大意　頭辨ひとり殘りて、御殿の前の竹を折りて、その歌よまむとして來たるものは、皇后宮の御側に參りて、同じことならむには、女房ども呼び出でゝともに歌よまむといひて來つる甲斐もなく、清少納言に竹の別稱を先づいはれたりとて、歸るぞおかしき。又清少納言は、誰れが之れを教へて、普通の人の知るべしとも思はれぬことをいふぞとなどいふとなり。

おまへは仁壽殿の前のことなりといふ。呉竹の名とは、さきに清少納言のこのきみといひしことといはずもしらむ。

「竹の名とも知らぬものを、なまねたしとやおぼしつらん」といへば「まことぞ。えしらじ」などの給ふ。まめごとなどいひわはせてゐる給へるに。

大意　清少納言はこの君とは、しか、竹の名とも知らず。只そこの人の殿上人等なればこの君といひしものを。殿上人等はみやびごとのやう思ひつらんといへば、行成、さも清少納言は此等の故事は知らざるべしといひ、なほまめなることゝもいひわはせる給へるにとなり。知らざるべしとは行成の誠に清女が知らじと思へるに非ず、常より博識の清女は此事を知るまいぞよとわざと裏うへに云ひたるなり。

此の君と稱すといふ詩を誦して、又集り來たれば「殿上にて言ひ期しつるほいもなくては、などかへり給ひぬるぞ。いとあやしくこそありつれ」との給へば「さる事には何のいらへをかせん。いとなか〳〵ならん。殿上にてもいひのゝしりつれば、上もき

こしめして興ぜさせ給ひつゝと語る。

大意　折しも曹に歸り去りたる中將、新中將、六位など殿上人が竹の詩など吟じて又來りければ、行成それらに向ひ、最初殿上にて皇后宮の女房などと歌よまむとて約束してきたる本意もとげずして、何とて歸り給ひしぞ。その意、得難しと云へば殿上人は、此の君などいふみやびごとには、なまじひにめでたからぬ返事はせぬこそよからめ、とてなり。殿上にても此のことをいひはやせば一條院もきこしめして興ぜさせ給ひつゝとかたる。

この君と稱すとは、春曙抄に「朗詠、藤篤茂、晉嘶兵三軍王子猷種而稱此君。これ本朝文粹十一に篠竹冬青といふ事を賦したる詩序の詞也」とあり。

辨もろともにかへす〳〵同じことをずんじて、いとをかしがれば、人々いでゝ見る。とり〳〵に物どもいひかはしてかへるとて、猶同じことを、もろごゑにずんじて、左衛門の陣に入るまで聞こゆ。

大意　行成もともにくりかへしこの君と稱する句を誦していとをかしがる故人々いでゝ見る。おの〳〵物どもいひかはして歸るとて猶同じことをもろともに稱して左衛門の陣屋へ入るまで聞こえたりと。

とり〳〵は、おの〳〵さま〳〵にといはむがごとし。

もろごゑは、もろ〳〵聲の略音にて、もろともによぶこゑなり。

つとめていとゝく、少納言の命婦といふが、御文參らせたるに、此のことを啓したれば、しもなるめして「さる事やありし」と問はせ給へば「知らず。何とも思はでいひ出でゐませ給へり。離れがことをも殿上人ほめけりと聞かせ給ふをば、さいはるゝ人をよろこばせ給ふもをかし。

大意　翌朝最疾く、禁中の女房少納言の命婦といふもの、帝の御文を皇后宮へ屆け參らするに、前夜のことを皇后宮に申し侍りぬれば、皇后宮其の職にもあらぬ清少納言を召して、昨夜さることのありしかと問はせ給ふ。其の時清少納言は答へて、存じ侍らず。何心なく云ひ出でたるを、行成朝臣のとりなしたることならむと申せば、皇后宮は、たとひ取り成すとひふとも跡方もなきことならむには、かばかりいひはやす事もあるまじとて、打ゑみ給へり。離れがことをも

殿上人はめたりときかせ給ふをば、しかいはるゝ女房をよろこばせ給ふ皇后宮の御心ことわりがたけれとなり。

名おそろしきもの

あをぶち、谷のほら、はたいたくろがね、つちくれ、いかづちは名のみならず、いみじうおそろし、はやち、ふさうぐも、ひこぼし、おほかみ、うしはさめ、ちう、ろうのをさ、いにすし、それも名のみならず、見るもおそろし。なはむしろ、強盗、又よろづに恐ろし、ひぢかさ雨、くちなはいちご、いきす魂、おにどころ、おにわらび、うばら、からたち、いりずみ、ぼうたんうしおに、

大意　此の一項は清少納言がみづから其の名を耳に聞きて恐ろしく感じたるものを列擧したるものなり。他人より之れを見れば或は恐ろしく感ぜざるのみならず、却てをかしく感ずるものもあるべし。中にも清少納言はいかづちは名のみならず、いみじう恐ろしといひ、強盗また、よろづにつけて恐ろしといふ。

あをぶちは青淵にて、水層深く碧色なる水溜りをいふ。谷のほらは山谷なる洞

穴なり。往々猛獸毒蛇怪鳥などの棲息所となることあり。

はたいたは春曙抄に鰭板、家の具とあり。門の左右の板塀やうのもの也。くろがねは鐵なり。

つちくれは、土塊にて、これらは、人によりては恐ろしからぬのみか却て壁塊泰平の民も連想すべし。いかづちは雷、これは名はともかく其の原因の激烈なるものなれば、その鳴響するや實に凄まじく、今の世にも恐るゝもの多し。たゝし古は多く鬼神として恐れたるなり。

はやちは暴風はやてといひて、暴風のことなり。ふさうぐも詳ならず、一説によれは不祥雲にて、瑞雲、景雲と相反むけるもの。理學、未だ昔ねからざる時は此の水氣の凝結したるものを以て、吉凶の兆、世のさとしなどとしたり。其の種々なる色あるは、距離の遠近、層積の厚薄、日光の影響等に關することも知らざりき。

ひこぼしは牽牛なり。おほかみは狼にて人を噛むことあり。うしはさめは、牛の類にては、さめ牛の名恐はしとの意なるべし。

ちうは蟲かゝろうのをさは、牢長か。牢は今の監獄の類にて、牢長といへは今の監

視又は獄長ともいふべきものか。いにすしは土佐日記なる蝙蝠鮨にやと春曙抄に見ゆ蝙蝠は貝の類にて、鋭蛸に似て大なるものなりといふ。されはにや清少納言は、名のみならず、見るもおそろしといへり。

なはむしろは細莚にて、今の人は別に恐ろしき名とも覺えまじ。強盜は今の世にもあり、よろずに恐ろしといへるも宜ならむ。ひぢかさ雨は、にはか雨くちなはいちごは、地楊梅、いきす魂は、生魂、おにどころは、鬼藤にて、おにわらびは、鬼蕨うばらは、茨からたちは、枳殼、いりずみは、熬炭にて、濕氣を取りし炭なりといふ。ぼうたんは、牡丹、うしおには、牛頭の鬼といふ類か。以上名おそろしきものどもを列舉解したるものなり。

竹取物語

竹取物語は、我が邦小說のうちにて最も古きものとは知れど、其の何人の作なるかは知るによしなし。蓋く源順朝臣の作なりといふ說はあれども、定かならず。その出來し時についても種々說ありて一定せず。されど仁明天皇の大同より

は後醍醐天皇の延喜よりは四五十年も前のものならんといふ說漠然たりと雖も、やゝ確かなるものなるべし。其の年頃の習慣として、假字文は女流社會のものにして、男子の文は、必ず漢文に物すること既にもいへる通りなれば、また假名文書ける男子あるも、あるは其の名を隱くし、あるはことさらに女子の物したるやうつくろへるおれど、とは全く男子の手に成りしものなることは讀者おのづから知り得べし。

さて此の書の性質は、既に先聖もいへりし如く、寶樓閣經漢書西南夷傳其の外何くれの漢籍佛典の說により、邦人の口碑に傳はる昔語りなどをとりあはして作れる搆想的小說なり。現今我が邦に盛に行はるゝ小說と其の趣の同じなちぬは、昔と今と社會の事情異り、從て人の思想の同じからざればなり。さはいへ小說といふ上に於ては、此の小說の其の祖たることを忘るべからず、祖たることを忘れずは、從ひて通讀するは厭はざるべし。讀みて味はゝおのづから我が古文學の價値を知るべし。

ことに竹取物語は文法極めて正しく、つゆ批難すべき所なく、且文章簡潔にし

て雄力遒强なれば、文章を成す參考にも亦文法を習ふたすけにもなるべし。

此の書竹取物語と名づけしは、本書の成り立ち、もと竹取の翁といふものゝ家にありし事柄を書きたるが故なり。物語は談話と同じく、他に深き意味をもたず。

こゝには歴代文學に載せたる發端の文と、石上中納言子安貝を索むる條との二章を講述することゝすべし。

發端の文

今は昔、竹取の翁といふものありけり。野山にまじりて、たけをとりつゝ、萬のことにつかひけり。名をば、さぬきのみやつこまろとなんいひける。

大意　昔、竹取の翁、本名讃岐造麿といふものあり、彼の野、此の山に入りて竹をとり、種々の竹細工などしてけりとなり。

竹取の翁とは、其の平常の職柄よりわだなしていひたるなり。

まじりてとは、分け入りてといふがごとし。萬のことゝは、種々の細工物のこと、抄には『篋寶(カゼミノタカラ)などに作るなるべし』とあり。

其の竹の中に、もとひかる竹、一すぢありけり。あやしがりて寄りて見るに、筒の中ひかりたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。

大意　野山なる竹の中に其の根の光るもの一本ありし故怪みて立ち寄り見れば、其の中に、身の丈け三寸ばかりなる愛らしき人居たりとなり。

うつくしうは、今の語にありては美麗の意なること、いふも更なるが、古語にありては多く愛らしき意に用ひたり。蓋し慈しきのこゝろなるか。

翁云ふやう、われ朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにてしりぬ。子になり給ふべき人なめりとて、手にうち入れて、家に持て來ぬ。妻の嫗(オウナ)にあづけて養はす。美しき事限りなし。いとをさなければ、こにいれて養ふ。

大意　竹取の翁、我れ毎朝夕取る竹の中におはするを見れば、深く因緣ありてなるべしとて、掌に入れて持ち歸り、妻の嫗に托して之を養育せしむ。幼稚なれば籠に入れて育てしとなり。

なめりはなるめりの略音、めりは現在の推量をあらはす詞にて、かく見ゆるといふ俗言のごとし。

ごとにいれてのごとなり。昔はたゝごとのみいへり。手に入れて持ち歸り、籠に入れて養ふちいさきことと思ふべし。さて籠に入るゝは此翁か細工の籠なるべし。

竹取の翁、この子を見つけて後に、竹を取るに、節をへだてゝよごとにとがねある竹を見つくることかさなりぬ。かくて、翁やうやうゆたかになりゆく。

大意　翁はその後竹を取るに節と節との間毎に金の入りたるを見つくることと度々にて、漸く豐富になれりとなり。

よごととは兩節毎といはむがごとし。よは節と同じ。

此のちご、養ふ程に、すぐ〳〵とおほきに成りまさる。三月ばかりになるほどによき程なる人になりぬれば、髪あげなどさだして髪わげさせ、もきす。

大意　此の乳兒、頗る發達よく三ヶ月がほどに、常並の人となりし故、是れまでの子供ぶりを廢し、髪あげもさせ、袴も着せて、成人のならひに從ひたりとなり。

すぐ〳〵は健全に發達すると、髪わげとは、昔女子は幼き程はふりわけ髪として肩の邊まで垂れたるを、成人すれば髪をわげ根を結びて、更に背後へ下ぐる例

なればかく髪あげはじたるなり。

さだすは定すにて、その掟てしたるなり。

もきすは裝着すにて、又成人の例なり。裝とは女子のはく袴なり。

帳の中よりも出さず、いつきかしづき養ふ程に、此のちごのかたち、けうらなること、よにすくれ、やのうちはくらき處なく、光滿ちたり。翁こゝちわしく苦しき時も、此の子を見れば、苦しき事も止みぬ。はらたゝしき事もなぐさみけり。翁、竹を取ること久しくなりぬ。いきほひまうのものになりにけり。

大意　此の子美麗に成人しければ、屋外にも出さず、荒き風にもあてず、いと大切に養育すれば、此の子容貌美に、皮膚清らなること非常にて、それが爲め家内暗きところもなきまでに光り遍ねし。翁の喜び愛づること此の上なし。故に翁は心地あしき時又腹立たしき事ある時も、此の子をだに見れば、あしき心地も癒え、又腹立つことも慰むばかりなり。翁はその後、竹を取ることいと久しくなり、勢もまた強く健かに成りしとなり。

帳の中とは几帳の中のことにて、絹を垂れて坐の仕切となすものなり。

いつきかしづきのいつきは齋の義かしづくは畏付の義にてともに尊敬することなり。こゝにては、大切に養育すといはゝ事足るべし。

けうらはきよらの音便きよらは清の字なれど、こゝには唯キレイのことなり。

やのうちは屋の内。まうのものゝまうは字音にて猛なり。強く健かなることをいふ。

此の子、いとをさなきに成りぬれば、名をば、御室戸齋部の秋田をよびてつけさす。秋田、なよ竹のかぐや姫、とつけつ。此の程三日うちあげあそぶ。萬の遊びをぞしける。男女きらはず呼びつどへて。いとかしこくあそぶ。

大意　此の子、かく成人したれば御室戸といふ所なる齋部秋田といふものを召して命名せしめたれば、此の者なよ竹のかぐや姫と名付けたり。されば、此の二三日間は、男女隔てなく呼び集へ、酒宴をし、又種々の遊戯をなして祝へりとなり。

三室戸なる齋部秋田は、當時の陰陽師などなるべし。なよ竹は素〻したるやさしき竹にて、女竹のことなり。かぐや姫は光り輝く姫のこゝろにて、必竟、此の

女の優にやさしく、清らに艶ある姿を賞めて、かくは名づけたるなり。

うちあげは酒宴のことなり。もと醉うて手を打ちあぐる形容より遂に酒宴の代名詞とはなりたるものなり。あそぶは狭き意味にて、多く管絃を鳴らす音樂の事をいへり。そはこの頃音樂を以て遊戯の上乘としたる故なり。かしこくあそぶとは、甚しく遊ぶことなり。

さて此の一文中これまでは、此の女子の發見せられてより、よきに成長せしまでの有様をくはしく叙したる一段落なり。

世界のをのこ、あてなるも、賤しきも、いかで此のかぐや姫を得てしがな。見てしがな。と音に聞き、めでまどふ。其のあたりの垣にも、家のとにも、をる人だに、たはやすく見るまじきものを、よるは、やすきいもねず、やみの夜に出でゝも、穴をくじり、こゝかしこよりのぞき、かいまみまどひあへり。さる時よりなむよばひとは云ひける。

大意　世間の男子ども、貴きも賤しきも皆かぐや姫の事を聞きて、恍惚とし、何とぞ妻に得たしとねがひ、一目見たしと願ふもありて、さわぎなり。姫と同居する人だに奥深く住めば、容易く見も得ざるに、皆、焦らだちて安眠もしやらず、喧

の夜にいでゝも垣押分け、穴を抉じりあけなどして、我も人も覗き合へりかゝるところより、今いふよばひといふ事は、いひはじめたりとなり。

めてなるものは、うはて(上人)なるもの約束にて、貴人のことなり。いかでは何卒といふに同じ。其のあたりの垣にも家のほとりにも句を隔てゝ下のぢゝかしこより覗き云々にかゝる文理なり。注意せざれば少し解し難し。いもねずは寝にも就かずとの意なり。

かいまみは、垣間見の音便にて、垣の間より覗き見ることなり。

まどひあへりとは惑ふものゝ大勢なる故にかくいへり。よばひとは昔は婚姻のことを云ひて、「呼ビ」の義なるをこゝには滑稽にわざと、夜遣の意にいひしなり。

人のものともせぬ處にまどひありけども、何のしるしあるべくも見えず。家の人どもに物をだにいはむとて、云ひけれども、ものともせず。あたりを離れぬ公達よ、をかし日をくらす人おほかり。おろかなる人は、やうなきわりきはよしなかりけりとて、こずなりにけり。

大意　人のとりかまひもせぬところにいかほど惑ひありきたりとて何の詮かあらん。心を盡くして家の人に物だにといひ掛くれど何の功もなし。其のあたりに惑ひある貴人等、覺えず長き夜を明かし、あたら日を暮すもの多し。中に、姫を戀ふことのあまり切ならざる人は、無益のことをなすも功なき事なりとて、遂には思ひ切りて來らぬやうなりきとなり。

ものともせずは、下なることゝもせずと同じく、物の數とも思はぬといふがごとし。おろかなるは愚なるにあらず。おろそかなる意にて、姫を戀ふことのさまで切ならざるものをいふなり。

やうなきは益なきの音便にて無益のことなり。よしなきは功なしといはむがごとし。

其の中に猶いひけるは、色好みといはるゝかぎり五人、おもひやむ時なく、よるひる來けり。其の名ひとりは石作の皇子、一人は車持の親王、一人は右大臣阿倍のみうし、一人は大納言大伴のみゆき、一人は中納言石上の麿、只此人々なりけり。(中略)

大意　其の中、世に好色家といはるゝだけ五人殘りて、猶いろ〳〵に云ひ、想ひ

戀ふることやむ時なくて、晝夜そのあたりに詣かけたりとなり。

その中とは、上の慕ふ心の切ならざるは、大かた來ずなりたるその中といふこゝろなり。石作、車持も姓なり。此れら五人の姓名も、皆こゝろのまゝに作りたる名なり。

日も暮るゝほどに例のあつまりぬ。人々或は笛を吹き、或は歌をうたひ、或はしやうかをし、或はうそをふき、扇をならしなどするに、翁出でゝ云はく、かたじけなくも、きたなげなるところに年月をへて、物し給ふこと、極りたるかしこまりをまうす。翁のいのち、けふあすともしらぬを、かくの給ふ君達にも、よく思ひ定めてつかうまつれと申せば、ことわりなり。いづれも、劣りまさりおはしまさねば、ゆかしき物見せ給へらむに御心ざしの程は見ゆべし。つかうまつらむことは、それになむ定むべきといふ。これよき事なり。人の恨もあるまじといへば、五人の人々もよき事なりといへば、翁入りて云ふ。

大意　日暮頃、例の五人集り來て笛を吹き、歌をうたひ、琴笛の調を調ひ、口笛を吹き、扇をならしなどして、おの〳〵思ひ〳〵の藏をなしてあるところへ、翁出でゝ

勿体なくも、此のきたなげなるところへ、年月をかさねて來通ひ給ふこと、至極有りがたく御禮を申すなり。此の翁の命數も最早さし迫りて、今明と知れぬに、かく親切にの給ふ君達にも、よく心を定めて仕ふべしと姫に申せば、姫も尤のことなり。五人何れも優劣なくて撰びがたければ、此の上はゆかしきもの見せ給はんには、其の御志のほどは見らるべし。事ふまつらむことは、其の結果によりて定むべしといふ。是れ實にさる事にて、これには何づれの御恨もあるまじといへば、五人の人々も、それよきことなりといへば、翁は入りてその承諾の由を姫にいふとなり。

しやうかをうたふは、たゞ歌を唱ふにあらず、琴笛の調を調ふことなり。

うそをふくは、嘯のことにて、口をつぼめて笛を吹く、謂はゆる口笛のことなり。

扇をならすは笏拍子などうつをいふ。かたじけなきは、今いふ恭にはあらで恐れ多き事といはむがごとし。物すとは、凡て爲す業に就いていふ辭なれば、こゝにては來給ふといふに同じ。さらぬは知られぬの意。かくの給ふは、かく親切にの給ふの意なり。ことわりより定むべきまでは姫の詞を翁のいへるなり、

かぐや姫、石作のみこには、天竺に佛の御石の鉢といふものあり。それを取りてたまへと云ふ。車持の皇子には、東の海に蓬萊と云ふ山あなり。それに白銀を根とし、黄金を莖とし、白玉を實として、たてる木あり。それ一枝をりてたまはらむといふ。今一人には唐土にある火鼠の裘をたまへ。大伴の大納言には、龍の首に五色にひかる玉あり。それをとりて給へ。石上の中納言には、燕のもたる子安貝ひとつとりて給へと云ふ。

大意　かぐや姫は、前に、ゆかしき物見せ給へらんに、御心ざしのほどは見ゆべし。つかうまつらんことはそれになむさだむべき。といふに、五人の承諾したるまゝ、其の何れも得難きことゝもをおの〳〵へあつらへたるなり。

天竺なる佛の御石の鉢、蓬萊にある眞木の枝、唐土なるひねずみの裘、龍の首の五色の玉、燕の子安貝の事などは、本書なる其の條々のもとに委しければ、こゝに細かに解說せず。

天竺は今の前印度、古は天外の國の如く思ひしもの多かりき。唐土は今の支那國全躰をいひき。蓬萊は東海のはてなる仙境なりといひ傳へき。あなりはあるなりを略したる音なり。今一人とは前に云ふ右大臣阿部のみうしの事なり。もたるは持ちてあるの約言なり。子安貝は、子を產むときに出だす貝なりといふ。翁、かたき事どもにこそあなれ。此の國にあるものにもあらず。かくかたき事をば、いかに申さんと云ふ。かぐや姫、何かゝたからむといへば、翁とまれ、かくまれ、まうさむとて、出でゝかくなむ聞ゆるやうに、見せ給へといへば、皇子たち、かむたちべきゝて、おいらかに、あたりよりだになありきそ。どやはのたまはぬ。といひて、うんじて皆かへりぬ。

大意　かぐや姫の難きあつらへに、翁は驚きて、其の物を取るは實に難きことなり。此の國にあるものにもあらざるを、如何にして、此の難きことを申すべきぞといへば、かぐや姫は何程の事かあらむと、いと心安くいふゆゑ、止むを得ず、翁は左も右も申さむとて出で、斯樣に申しあぐるやうに、おの〳〵此の品物どもを持ち來て見せ給へといへば、さしもの五人も、之れを聞きて大に驚き、かばかり難題を申しかくる程ならんには、などて尋常に此の邊りをも通行するなかれとはいはぬぞといひて、怏鬱として歸りぬとなり。

とまれかくまれは左もあれ右もあれの約にて、俗にどうあらう、といふ程の語なり。かくなん聞ゆるやうにとは、かやうに申しあぐるやうにといふに同じ。かんたちべは上達部と書きて、公卿の事三位以上の人をいふ稱なり、おいらかは老いらかにて「大人しやか」と譯するもよし、又「尋常に」といふもよくあたれり。あたりよりだには。かぐや姫の近邊をもといふに同じ。なありきそのなとそとは禁止的てにはにて、あるくなといふことなり。上のおいらかに、あたりよりだに、なありきそとやはのたまはぬ、といふこゝろは、かやうの難題をいひかけんより、いつその事に、此の近寄をも通行するなと、云ひ切りてもくるゝべきに、さはいはずして、なぜかやうの事をいふぞと、實にあきれはてたる詞なり。重複するゞとくなれど老婆心もてかく更に解說す。うんじては倦みすの音便にて、困却して歸りし由なり。みなかへりぬの詞には、斷念して歸りぬる意味ありと知るべし。

さて、本文は、またこゝにて一段落をなせり。即ち是れまでに五人のまどひ來へるまゝ、姫より難題をいひかけられしことを敘したるなり。是より五人のいかに其の心を遂げんとして、身心をつくせるかは、次の段落においておのづから見るべし。

石上中納言子安貝を索むる條

中納言石上の麻呂は家につかはるゝをのこどもの許に、つばくらめ巢くひたらば、告げよとのたまふを、うけ給はりて、何のれうにかあらむと申す。答へての給ふやう、燕のもたる子安貝とらむれうなりとの給ふ。

大意　中納言石上の麻呂召し仕ひの男どもに命じて、燕の巢くひたることを告げしむるに、男どもうけたまはりて、何のためになし給ふぞと問へば、燕のもちたる子安貝てふものを取らんためなりとなり。

是れ難題中の燕の段なり。燕といふ鳥のさる貝生むやうあらむや。但しその以前、世に云ひならはしゝ例は、西京雜記といふものに、元后在家嘗有白燕食白石大如指、墜后繡筐中、后取之、自剖爲二、其中有文云々とありと。

をのこども答へ申す。燕を數多殺して見るだにも腹になきものなり。但し子生むときなむ、いかでか出すらむ。はら〳〵と人だに見ればうせぬと申す。又人の申すやう、

おほひつかさの、いひかしぐ屋のむねの、つくのあなごとに、燕はすくひ侍り。それにまめならむをのこどもを、ゐてまかりて、あぐらをゆひて、あげてうかゝはせんに、そこらの燕子をうまざらむやは。さてこそとらしめ給はめと申す。

大意　男ども答へて子安貝などいふものは、燕を殺して見ても腹にもなきものなるが、但し子を生む時にでも腹より出すことあるか、さるにてもいかにして出すならん、人をさへ見れば直に飛び去るものをと申す。又、人の申すには、大炊寮なる屋の棟の穴に、燕の巣あり。それに、正直に丁寧なる男どもを率ゐ、高くあぐらを結はせ、其の巣を覗かせ見れば、子を生まぬこともあるまじ、かくして其の物を取らしめ給へとまうすとなり。

おほひは禁中なり。大炊寮にて、即ち主上、及び臣下にたまはる饗膳等を司るところなり。

つくの穴はいろ〳〵説あれど、思ふに、棟の突出したるところなどに穴などあるをいふならむか。

まめならむは忠實、又は丁寧のことといふこゝろは、高き危きところにて難きことを行ふなれば、心落ちつきたる人ならでは能はぬ故、かくはいふなり。ゐてまかりては率ゐて行きてといふことなり。あぐらは揚坐にて足代の事なり。子うまざらんやはとは、多くの燕の中には、必ず子をうまぬといふことはあらじといふに同じ。

中納言喜び給ひて、をかしき事にもあるかな。もとも知らざりけり。きようあることまうしたりとて、の給ひて、まめなるをのこども、二十人ばかりつかはして、あなゝひに、あげすゑられたり。

大意　中納言喜びて、如何にも興ある事なり、我は其の樣な事も一向に心附かざりしとて、男ども二十人ばかりつかはして、あぐらにあげて坐はらせたりとなり。

もともは、もつともの略言なり。きようは興、あなゝひは足荷ひにて、今の足場といふもの、あぐらの事。あげすゑはあげてすわらしむるなり。

殿よりつかひ、ひまなくたまはせて、子安貝とりたるかと問はせ給ふ。つばくらめも、人のあきたのぼり居たるにおぢて、巣にのぼりこず。かゝるよしの御返事を申しけ

れば、聞き給ひて、いかゞすべきとおぼしめしわづらふに、かのつかさの官人、くらつまろと申す翁、まうすやう、子安貝をとらむとおぼしめさば、たばかり申さむとて、御前にまゐりたれば、中納言、顔をあはせてむかひ給へり。

大意　中納言より、直に子安貝取り得たるかと問はしめ給ひしに男ども、あまり多人數の參りのぼりたる故、却りて燕は恐れて巢に入らず、從ひて取らむやうもなかりし返事、申しあげゝれば、中納言は、さらば如何にして得べしと思案にくれて居給ひしに、彼の大炊寮の官人くらつまろと申す翁いでゝ、子安貝とらむと思し召さば、私によき工夫あれば、直接に御相談申さんとて殿の御前に參りたれば、中納言、其の下賤も厭はず、近く呼びよせて、相談せられたりとなり。

かのつかさとは大炊寮の司をいへるなり。たばかり申さんは、思慮を廻らさむといふに、同じ。顔をあはすは近寄りて相談するありさまをいひたるなり、

くらつまろが申すやう、此の燕の子安貝は、あしくたばかりて、とらせ給ふなり。さては、えとらせ給はじ。あなゝひに、おどろ〳〵しく廿人のひとの、昇りて侍れば、あれてよりまうでこずなむ。せさせ給ふべきやうは、此のあなゝひをこぼちて、人皆しりそ

きて、まめならむ人ひとりを、あらこにのせすゑて、つなをかまへて、鳥の子うむ間に、綱をつりあげさせて、ふと子安貝をとらせ給はむなむよかるべきと申す。中納言の給ふやう、いとよき事なりとて、あなゝひをこぼちて人皆歸りまうできぬ。

大意　くらつまろ申すやう、子安貝は、はじめよりの御はからひが惡しきゆゑ、其のやうな事にては、とてもとり給ふことはならじ。仰山にも二十人といふ人の上ぼりたる事なれば燕は遠ざかりて來らず。眞に取り給ふはからひには、此の足揚を取り除け、多くの人を去り、只靜かなる人一人を籠に坐わらせて、籠に綱をつけ燕の子を產む時に引きあげて、急に子安貝を取らせ給ふこそよけれといへば、中納言いとよき事なりと申せば、男ども其の足揚を毀ちて皆歸り來ぬとなり。

たばかりは、はからひといふに同じ。おどろ〳〵は騷々にて仰山らしきこと、あれては荒れてにあらず、散り遠ざかるの意なり。あらこは目のあらき籠、ふとは急に又は一すといふがごとし。

中納言、くらつまろにのたまはく。燕はいかなる時にか、子をうむとしりて、人をばあ

ぐべきとの給ふ。くらつまろ申すやう、つばくらめは、子をうむとする時は、尾をさゝげて、七たびめぐりてなむうみおとすめる。さて、七たびめぐらむ折、引きあげて、其のをり子安貝はとらせ給へと申す。

大意　中納言、燕はいかなる時子を生むことを知りて人をめぐべきやと問へば、くらつまろ燕は子を生まむ前は尾をさしあげて、七回回りて生むといふことなれば、其の時館の綱を引きあげて子安貝をとらせ給へとなり。

中納言よろこび給ひて、萬の人にもしらせ給はで、ひそかに、つかさにいまして、をのこどものうちにまじりて、よるをひるになして、とらしめ給ふ。くらつ麻呂がかく申すをいといたくよろこび給ひての給ふ。こゝにつかはるゝ人にもなきに、ねがひをかなふることのうれしさ。といひて、御衣ぬぎてかづけ給ひつ。さらに、よさり此のつかさに、まうでこ。との給ひてつかはしつ。

大意　中納言喜び、密に男どもの中に交り、晝夜の差別なく、其事に從ふ。而して、くらつ麻は、當家に奉公する人にもあらぬに、かく我がねがひをかなへ果れることのうれしさとて、衣を脱きて與へ、又更に夜に入つて、此のつかさに參り來

れ、とて家に歸し遣はしたりとなり。

みそかはひそかの古言、つかさは大炊寮なり。よるをひるになしては夜をも晝と同樣にといふに同じ。かく申すは、はからひをまうすといふ、御衣ぬぎてかづけ給ひつは、賞として著たるところの著物をきて與へしとなり。かづけは、肩に被くるにて、古は人に賞を與ふるに、衣を肩にかつがせやる例なりき。まうでこは詣で來のこと。

日くれぬれば、かのつかさにおはして、見給ふに、まことにつばくらの巢つくれり。くらつまろが申すやうに、尾をさゝげてめぐるに、あらこに人をのせてつりあげさせて、つばくらめの巢に手さしいれさせてさぐるに、物もなしと申すに、中納言、あしくさぐればなきなりと、はらたちて、離ればかりおぼえむにとて、われのぼりて、さぐらむとのたまひて、こにのりて、つられのぼりて、うかゞひ給へるに、燕、尾をさゝげて、いたくめぐるにあはせて、手をさゝげてさぐり給ふに、手にひらめなるものさはる。時に、われ物にぎりたり。今はおろしてよ、翁しえたりとの給ひて、あつまりてとくおろさんとて、綱をひきすぐして、綱絶ゆるすなはち、八島のかなへの上に、のけざまに落

ち給へり。

大意　日暮れて後、例の大炊寮に行きて見給ふに果して燕、巣を作り、しかも翁がいひたる如く尾をさしあげて回れる故、かねて用意しおける荒籠に男をのせて釣りあげ巣の中を探ぐらせつるに、何ものもなしといへば、中納言氣を焦ち、そは探りやうのあしければなり。さてこれは誰れに命じて取らせばよからんと思案すれど、格別適當のものも思ひ當らねば、我れみづからのぼりてさぐらむとて籠に入り、釣られ上ぼりて、燕の巣を窺ふに、燕、尾をさしあげていたく回りあるより、手を入れ、其の回るまに〳〵探りみるに、何物か扁たきもの手にさはりぬれば、我れ物を握りたり、直に下ろしてよ翁よ、事、しとげたりとよろこび呼びてければ、皆々あつまりて疾く下ろさんと狼狽して綾ぶべき綱を却りて強く引き過ぐしたれば、綱切れて中納言は同時に、下にありし釜の上に仰向に墜落したりとなり。

離ればかりおぼえむにとては、誰れぐらゐに命じてとらすることよからんと考ふれど、格別離れがよからむとも思ひ當らねばといふがごとし。

めぐるにあはせては、燕のめぐるにしたがひて手を入れさぐるをいふ。

しえたりは爲得たりにて喜び叫びたる形容なり。

八島のかなへは、大炊寮に上古より、忌火庖火の、釜とて古き釜あり、それを八島のかなへといふ。八島とは竈所（カマヤ）の異名なり。其の故は下野の國に室の八島といふところあり、煙の地中より出づるより名づくといふ。かまどは烟の出づるより又八島とは名づけたるなりと、のけざまは仰向（ノケザマ）のことなり。

人々あさましがりて、よりかゝ、來れり。御目はしらめにてふし給へり。人々御口に水をすくひ入れ來る。からうしていき出で給へるに、またかなへの上より、手とり足とりして、さげおろし來る。

大意　人々驚きあきれて、介抱するに、白眼（シラメ）になり、氣絶して打臥し給へれば、人々口に水を入れなどすれば、漸く辛うじて、息を吹きかへし正氣になり給ふ。由りて又、其の高き釜の上より、或は手をとり、或は足を持ちなどして漸く地上に下ろしたりとなり。

あさましがるは驚きあきれることなり。

からうじて、御心ちいかがおぼさるゝと問へば、息のしたにて物は少し覺ゆれど、腰なむ動かれぬ。されど、子安貝をふとにぎりもたれば、うれしく覺ゆるなり。まづしそくさしてこ。此の貝かほ見むと、御ぐしもたげて、御手をひろげ給へるに、燕のまりおける、古くそを握りたまへるなりけり。

大意　漸くにして御心地は、いかゞと問へば、微かなる息の中に、少し物心はつきたれど、腰の部を打ちて少しも動かれず。然れども目的の子安貝を一寸握り持ちたれば、何より嬉し、早く手とるしを持ち來れ。此の子安貝を見んと、頭もちあげて其の握りたる手をひろげて見るに、こはいかに子安貝にはあらで、燕の古くしおける糞を握り給ひけりとなり。

ゑそくは紙燭にて手燈のことなり、即ち紙をよりて油にゑめし火を燈し、蠟燭にも代用することあるものなり。

御ぐしは御頭のことをいふ。そは、もと、頭は櫛をさすところなるより出でたる詞なり。

まりおけるは出しおけるといふに同じ。神代紀、古事記などには、送糞の字をくそまると訓めり。

それを見給ひて、あなかひなのわざや、との給ひけるよりぞ、思ふにたがふことをば、かひなしとはいひける。かひにもあらずと見給ひけるに、御心もたがひて、から櫃のふたに入れられ給ふべくもあらず。御腰はをれにけり。

大意　其の握りたる燕の糞を見給ひて、あゝかひなきわざやと、甚く歎き給へるより、後世、案に相違せる事をかひなしとはいふとて、貝無をかねて歎かれたる文なり。さて握りたるは糞にて目的の子安貝にもあらずとて、又俄に御心地もたがひ、人に見られ給ふべくもあらず、腰は其のまゝ折れたりとなり。

から櫃のふたに入れられ云々は、見らるべくもあらずの意なり。古は物を見るに、總て物のふたの上に据ゑ置きて見たり。故にかくはいへるなり。

中納言は、いはけたるわざしてやむことを、人にきかせじとし給ひけれど、それを病にて、いとよわくなり給ひにけり。

大意　中納言は心をさなきしわざして、かく病につきしことを人に聞かせまじとすれど、それを病としていとます〳〵衰弱したまひしとなり。

いはけたるわざとは見苦などの物のきゝわけもなきわざすることをいふ。

貝をえとらずなりにけるよりも、人の聞きわらはん事を、日に添へて思ひ給ひければ、たゞに病み死ぬるよりも、人聞き恥しくおぼえ給ふなりけり。

大意　おのづから明らかなり。たゞに病み死ぬる云々は尋常の病死はせんがたもなけれど、この事にて死なむはいと外聞恥しとのゝひなり。

これをかぐや姫聞きて、とぶらひにやる歌、

どしを經て、涙立ちよらぬ住の江の

まつかひなしと、聞くはまことか。

とあるをよみてきかす。

大意　かぐや姫、中納言が、かく子安貝は得で、却りて大病に罹りたる由を聞きて、久しく中納言のやみて姫が家に立ちより來らぬを待てど其のかひなしといふがそはまことにや、さてはいとほしきことなりとて、病を吊ひ、且跳へたる子安貝の待遠きをいひて遣はしたるなり。

歌の上の句は、住の江に涙の立ちよらぬとて、中納言の久しく來らざるにあて

ゝいひたるなり。其の下の句は、松を待つにかけて跳へたる貝を待てど、そのかひなしとて、うらには待つ子安貝のなきをかけていひたるなり。

とあるをよみてきかすとは上にいふ歌の云々と書きてあるを傍なる人が中納言によみてきかするなり。

いとよわき心地に、頭もたげて、人に紙をもたせて、くるしき心地にからうして書き給ふ。

かひはかく、有りけるものを、わびはてゝ、

死ぬるいのちをすくひやはせぬ。

と書きはてゝたえいり給ひぬ。

大意　中納言頭をもちあげ苦痛を堪へ、人に紙を持たせて漸くに返歌を認めて、直に絶命したりとなり。

歌の意は、姫はかひなしとの給へど、かひはかくあるものを、斯くの如く難義して死ぬる我が命をなぜ助けては下されぬぞとなり。さて、其のかひといふは、物をすくひわぐる匙のことにて、今吊ひ來る姫が戀なる詞の中納言の爲めにか

ひゐるにかけ、すくひやはせぬは題の縁語にて姫はなぜに此の命をすくひくれぬぞといふにかけたるなり。

是れを聞きて、かぐや姫、すこしわはれとおぼしけり。それよりなむすこしうれしきことをば、かひありとはいひける。

大意　かぐや姫これを聞きて少し不悶に思ひ給ふ。さきにすこしわはれをかけたるを中納言のうれしと思ひて死にけるよりうれしきことをばかひありといふ詞は出來たりとなり。

さて、此の中納言のことは難題かけられし五人の最後なれば、こゝにて文意大段落をなせり。以下は更に其の趣向を異にせるものと知るべし。

伊勢物語

伊勢物語は、竹取物語につぎて古きものなり。其の組織よりいへば彼れは、既にも云へりし如く、漢籍佛典中にありし說話どもを翻案し、且は我が邦人の口碑に傳はる昔語りをも取り合はして、組織したる擬想的小說にして、此れは、基を外國に取らず、只和歌より趣向を案出して、人の一代記やうに綴り成したる一

種の物語なり。其の体裁より見れば、記事的又は記錄的のものといはゝいふべし。而して其の記する事は、概むね男女間の情交を旨としたれば、動もすれば、社會の風儀に影響せんずるもの多し。一家團欒の間にありては讀むだに憚るべきこと少からず。嚴肅なる家庭には禁じて此の書を入れざるも宜なり。されど、其の文辭に至りては、極めて艶麗にして、而かも簡潔遒勁なり。其の詞少うして、意餘れるところなど、中々にめでたく、恐らくは古文中稀に見るところならむ。されば此の書を綴かむものは、其の詞章の雅致なるを愛し、美文學上の標本として之を見め、必ずしも、性質上の淫猥痴情的なるを見習ふべきにあらず。

さて、此の物語の題號、及び、作者に就きて古來諸說紛々として、たしかにそれと定かならず。古來多くの說は伊勢の御の作なるゆゑ「伊勢物語」といふといふにあり。然れども、その非は既に加茂眞淵翁も「伊勢物語古意」に辨へり。即ち『此の物語は女の書けるさまならず、男の而も文に巧なる人のかけるにて、文の體いと老いたり。且、伊勢の御の若き程ならば宇多天皇の御代にてあるべきを延喜、承平、天曆の比の人の歌さへ載せたり云々』又『伊勢が書かずば、伊勢物語とはい

はじてふもいかにぞやおほはそ物語に竹取より初めて、落窪の君、うつぼ、光源氏の君、其外にも、皆、中に專とする人の上をとて書の名とはしたれ。記者の名を題とせし物は見ず。其上、かゝる文は、記者の名をわらはすまじきをや』と、此說は、近世學者の多く從ふところとなりぬ。在原業平朝臣の作なりと傳ふるも、先輩既に說破して其非なるを云へり。要するに伊勢は僻事多く云ふと傳ふるより、此の文、男女の痴情的僻事のみ擧げたればやがて移して此の書の題號とはしたるならんか。又其の作者は、平田篤胤翁も云へりし如く、前に業平朝臣の歌集やうの書ありけむを基として、後人の他事をも取りまじへ、歌のはしがきをも敷衍潤飾し、且つ種々附會をもして一冊子となしたるものならむ。總て竹取物語の如く始終連續したるものならず、唯はゝ歌の序文のやゝ長きを、あまた集めて順序よく排列したる如きもまあり。其の後人は誰なるか知るべからず。此の書の記事に於ける是非はともかく、詞章の優に美なるより、さすがに世のもてはやすところとなり。正文も、註釋文もいと多く世に出で來ぬ。其の中、正文には、六條宮御撰といふ、眞字伊勢物語、後小松天皇の御宸翰なる「伊勢物語朱書

院の逸能本」、屋代弘賢の「參考伊勢物語」其他二三のものあり。註釋文に至りては、殆んど數十の多きありて、枚擧に遑あらず。就中、圓珠庵契冲の「勢語臆斷」五冊なると、加茂眞淵の「伊勢物語古意」六冊なると、櫻井高尙の「伊勢物語新釋」六冊なるとを合せて、伊勢物語註釋中のよろしきものと稱す。なほ新釋は最も後に出でたれば、よく諸註の粹華を拔萃し、且新說をも加へたれば、最も後學參考には便ならんか。

本書は全篇百二十五段より成れゝど、こゝには第八段なる東下りの條と六十六段なる生駒山を見たる條、第七十七段なる右大將の奉られる石に歌そへたる條と、第八十二段なる惟喬親王を訪ひ奉る條との四段を拔きて講すべし。

東下りの條

昔、男ありけり。その男、身をやうなきものに思ひなして、京には居らじ、東の方に住むべき所、求めにとて往きけり。

大意　ある時一人の男ありしが、其の人、自身を世に益なきものゝ如く思ひて、京の都には居住まず、東の方へ住居を求めんとて出で行きしとなり。

昔男ありけりは本書冒頭の段の冒頭に掲ぐる主語なり。此の東下りの條は本書の八段目なるが、又例によりて、かくいへり、さて、昔とは、嗣奴抄に『太古をもいひ、又近古をもいひ、遠近によらず、過ぎぬるを昔といふなり。今日は明日の昔、昨日は今日の昔になる。今日のことをもいふべし。云々』とあるが如く必ずしも古きことのみ思ふべからず。後世今は昔などいふも此の文勢なることを知るべし。こゝに、昔男とのみいひて、其の時代其人名を明示せざるは、實をも虛の如くひなせる古き物語の體なり。

信濃國淺間の嶽に、烟の立つを見て

信濃なる、あさまのたけに、たつけふり

大意　東の方に往きける男、道すがら信濃の國にある淺間がたけに烟の立つを見て歌を讀みたりとなり。歌の意は、信濃にある淺間嶽の烟をば遠方の人はたしかに見咎むるとの心なり。をちかたは遠方なり。

をちかたびとの見やはとがめぬ。

もとより友とする人、一人二人して、諸共に往きけり。道知れる人もなくて、惑ひ行きけり。

大意　おのづから明らかなり。もとよりは上の段に於て友とする人一人ふたりといへるによりてかけり。それら、皆道を知らざりし故惑ひ往きけりとなり。

三河の國、八橋といふ所に至りぬ。そこを八橋といふことは、水の蛛手に流れ別れて、木、八つ渡せるによりなん、八橋とはいへる。

大意　おのづから明らかなり。八橋の說明もまた不足なきがごとし。

その澤の邊の木蔭におり居て、かれいひくひけり。その澤にかきつばたいとおもしろく咲きたり。それを見てある人のいはく、かきつばたといふ五文字を句の上に据ゑて旅の心をよめと、いひければよめる。

大意　其の八橋を架せる澤の邊の木蔭に、馬より下りて餉（かれい）即ち今の辨當を食ひたり。其の澤に多くのかきつばた、美事に咲きたれば其の五文字入れて歌よめと伴人のすゝむとなり。その歌は次のごとし。

からころも、きつゝなれにしつましあれば、

はるゝ〳〵きぬるたびをしぞおもふ。

歌意　普通の旅行なりとも悲しきに、況して思ふ我が妻を殘し置きて、都を出でたれば、一しほかなしく思ふとなり。きつゝなれつゝましの等は皆ころもの縁語より、おもしろし。かきつばたの五文字は黒印の字なること知るべし。

とよめりければ、皆人、かれいひの上に、なみだ落してほとびにけり。

大意　此のかなしき歌聞きて、皆人悲哀を催ほし、かれいひの上に涙落したれば、餉爲めにほとびたりとなり。

ほとぶとは堅きものゝやわらかになる事にて、今俗にいふフヤケルことなり。

ゆきゝて、駿河の國に至りぬ。宇津の山に至りて、我がいらんとする道は、いと暗う細きに、蔦葛はしげりて、物心細く、すゞろなるめを見ることゝ思ふに、修行者逢ひたり。

大意　それより進みて、駿河の國に到着し、宇都の山に入らんとして見れば其いと暗くじてきた狹隘なるに、蔦かつらの茂りたるさへわれば、物凄く、思ひもかけぬからき目見る事よと思ふ折しも、はからず一人の修行者に出あひたりとなり。

かゝる道には、いかでかおはするといふに、見れば見し人なりけり。京にその人の許にとて、ふみかきてつく。

大意　其の修行者は斯かる所には如何にしてか居給ふといふを見れば、とは如何に、汝て京にて見知りし人なり。よりて京にある思ふ人の許へとて文書きて托すとなり。つくはことつくなり。其の文は次の歌なり。

駿河なる、うつの山邊のうつゝにも、
夢にも人に逢はぬなりけり。

歌意　旅行する身には、京なる思ふ人の、夢にも見えぬによりて其のつれなきを恨みいひたることばなり。蓋し昔は人の思ふ心の通ひ來りて夢に見るものとしたりしなり。

富士の山を見れば、五月のつごもりに、雪いと白う降れり。

時しらぬ、山は富士の嶺いつとてか、
かのこまだらに雪のふるらん、

大意　五月のつごもりに富士の山を見れば雪いと白う降りたるゆゑ、時も知

ちぬ富士の嶺なるかな、此の五月の末といふ時になるを、いつと思うて、かく雪の白う降ることとならんとなり。

かのこまだらは此處彼處に、鹿の毛色の如く、白く斑なるをいふ。此の歌の題には雪いと白うとありて、こゝにかのこまだらといふはいかゝしけれど、こは題よりも細かに觀みたる歌なりと思ひ知るべし。古例も少からざることなり。

その山は、こゝに譬へば、比叡の山を、二十ばかり重ぬあげたらんほどして、なりは、鹽尻の樣になんありける。

大意　其の富士の山は、京近邊に譬へていはゞ、比叡山を二十ばかり重ねあげたる高さにて、丁度潮汲む器等が潮水をかけたる砂を日に曝さん爲に積みあげたる山の樣なりとなり。

なほ、ゆき〳〵て、武藏の國と下總の國との中にいと大なる河あり。隅田川といふ。その河の邊に群れ居て思ひやれば、限りなく、遠くも來にけるかなとわびあへるに渡守はや船に乘れ日暮れなむといふに。

大意　次第に進みて、武藏下總の間なる隅田川の邊りに來て群りて乘り合を待ち合しつゝ故郷なる京を思ひやれば、存外にも遠く來れるものかなとて、いろ〳〵と悲しきことなど、いひあへるに、やがて乘り合も滿ちたれば、舟子はいざ乘り給へ。日も將に暮れんとするといふゆゑとなり。

乘りて渡らんとするに、皆人、物わびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さる折しも、白き鳥の嘴と足と、赤きしぎの大きさなる、水の上に遊びつゝ、魚(イヲ)を食ふ。京には見えぬ鳥なれば、皆人見しらず、渡守に問ひければこれなん都鳥といふを聞きて。

名にし負はゞいざこと問はんみやこどり、
わが思ふ人はありやなしやと

と詠めりければ、船こぞりて泣きにけり。

大意　一同舟子に促がされて船に乘らんとするにつれの人々皆物わびしく心細うなりて京に戀しき人なきにもあらず。折しも京にて日比見覺えぬ鳥の水上にありて、魚をあさり食ふを見て、これは何といふ鳥ぞと問へば、舟子答へてこれは都鳥なりといふを聞きて、都といふがなつかしくて一首の歌を詠みたりとなり。歌の意は鳥に向ひて其の方都鳥といふ名の如くに、定めて都の事

を知りつらんには、いざことを尋ねん。即ち我が思ひこがるゝ京の人は悲なくてありや否やとてとなり。此の歌よみければ、船中のもの大に同情を催はして皆泣きたりとなり。

名にし負はゞとは、名に負かず内包の意あれば、即ち其の名の如く實あらばといはんがごとし。いふ心は、都鳥といふと同時に都の事を知らばといふに同じ。都鳥は一説に鷗なりともいひ、又一種の鳥なりともいふ。確なること知りがたし。

生駒山を見たる條

昔、をとこ、逍遙しに、思ふどちかいつらねて、和泉の國へきさらぎばかりにいきけり。

大意　おのづから明かなり。思ふどちは親しき友だちなり。かいつらねては、かきつらねての音便。かいは只添辭。きさらぎは二月のことなり。

今もなほ陰暦にてはいふことなり。

河内の國生駒山を見れば、曇りみ晴れみ、立ちゐる雲やまず。あしたより曇りて、登晴れたり。雪いと白う、こずゑにふりたり。

大意　和泉の國へ行く途中にて河内の國なる生駒山を見れは晴曇定めなく朝より曇りて、登晴れ、いつの間にか、雪白くふりて水末にかゝりたりとなり。

曇りみ晴れみは、俗にいふ曇りてみたり晴れてみたりなり。

それを見て、彼のゆく人の中に、唯ひとりよみける。

きのふけふ、雲のたちまひかくさふは、

花のはやしを、うしとなりけり。

大意　生駒山の赤色、雲の有様等を見て、多き連れ合中の一人此の歌をよみたりとなり。

歌の意は昨今黒雲の立ちまひて、頻りに生駒山を蔽ひ隠くさんとせしは、彼の花の林の美事なるを嫉みてなりけるよとなり。

かくさふは隠くすの延音なれば只隠くすといふと異ることなし。

花の林とは、雪白くふりて、木末にかゝりたるを花にとりなしてかくはいひたるなり。

うしは憂しなり、嫉ましう思ひてのことゝろなり。雪のいと面白きは千万株の開

きて花の林の如きを、昨今の雲はこの美景を吾人に見せじと思ひたる嫉妬の心ありけるなり。只雲の晴れて一しほをもしろきところ、只これをこそ、をしみつらめとよみたるなり。

惟喬親王を訪ひ奉る條

むかし水無瀬にかよい給ひし惟喬の親王、例のかりしにおはします。ともに、右馬のかみなるおきな、つかうまつれり。

大意　水無瀬といふところに通ひ給ひし惟喬親王、例の如く獵りしにおはしますその御供に右馬の頭なる翁、即ち業平朝臣從ひ仕へ奉れりとなり。

日ごろへて宮に歸り給ひけり。御おくりして、とくいなんと思ふに、おほみきたまひ、祿たまはんとて、つかはさゝりけり。この右馬の頭、心もとながりて、

枕とて、くさひきむすぶこともせじ。

秋の夜とだにたのまれなくに、

とよみけり。

大意　やゝ日數たちて、親王、京の都に歸り給ひける時、此の翁、御供して、都まで

送りまゐらせ、とく歸り來んと思ひしに、親王は御供してまゐりたるを喜びたまひ、かつは、御別申うして歸り來るを本意なく思し召して、頻りに引きとゞめ御酒や引出物など、下し賜はんとて、暇をつかはさず、その時此の馬の頭、心おぼつかなく思ふほどに、此の歌、よみたりとなり。

歌の意は、その詞足らずして意餘れる故にか、古來いろ〳〵に解釋せられたれど、要するに秋の夜の如く長き夜ならで、短かきこのごろの夜なれば、枕もとらずして仕へ明かし申さんとの意をよめるなり。蓋し親王に出家遁世の御心ありもやせんと疑へる跡あるゆゑ、長くは仕へられまじと思ひて、かくはよみたるものならむ。されば加茂眞淵の「伊勢物語古意」中にも云へり、即ち『此の大兄の皇子（惟喬親王）を措きて、四の皇子（惟仁親王）を太子に立てられしかば、さる事、さして恨み給はぬ御心とはいへど、などか、世の中物うくおぼさゞらん。されば、さる御けしきありて、斯く殊更に名殘りをしげにしたまふを、馬の頭の疑ひて、出家し給はんにや、と思ふ心もとなさに、今夜はとけて、寢ぬべからず。末ながく、斯くて見奉らん事とも願まれねばてふ意を含みて、爰は、春のみじか夜なれば枕

もとらで仕うまつり明してんとよめるなり。短き事の裏にて秋の夜とだにとはいへり』

草ひきむすぶ事もせじとは、枕をとることもせじといふことを、旅のことなれば、草枕に思ひ寄せて、いひたる詞なり。即ち枕を取ることもせずして明かさんとの心なり。

秋の夜とだに頼まれなくにとは、秋の長夜ならむには悠々と枕につくべき時間もありなんに、春の短夜はしか頼まれもせぬにとの詞、即ち長く仕へまつらるべしと頼まれもせぬ此の夜を枕になどつく暇あるべきかはの意をいひたるなりけり。

心もとながるはいそがはしきところにも用ふれど、こゝにては、重に、おぼつなく思ふ意に用ひたるなり。

時は、やよひのつごもりなりけり。親王おほとのごもりで、わかし給ひてけり。かくしつゝ、まうでつかうまつりけるを、思ひの外に、みぐしおろさせ給ひて小野といふところに、住み給ひけり。

大意　時恰も彌生の晦日なりき、親王も寢給はで明し給ひけり。右馬の頭は其の後もかくの如くに時々伺候して仕へ申しけるを、意外にも御髮下ろさせ出家して小野といふところに住み給ひきとなり。

彌生は三月のこと、大とのごもらでは大殿に籠るの意にてこゝは寢ぬ給はでといはむがごとし。盞し酒など飲み明かしてなり、世を忘れんとし給ふ跡見るべし。まうでは詣にて伺候することなり。

思ひの外には、闕疑抄に下の如く云へり。即ち『惟喬は文德第一の御子なれば儲君になり給ふべしと、世とぞりて思ひしに、清和にひきたがへられ給へることを、思ひの外とはいふなり。』と或はしからん。

惟喬親王の出家し給ひしは貞觀十四年七月にて御年二十九の時とぞ聞えし。

小野といふところは、山城の國愛宕郡中なる一地名なりといふ。

むつきに、をがみたてまつらんとて、小野にまうでたるに、ひえ山のふもとなれば雪いとたかし。強ひて、御室にまうでて、をがみまつるに、つれ〴〵といと物かなしくて、おはしましければ、やゝ久しく、さぶらひて、古の事など思ひ出でゝ聞こえけり。

大意　明くる年の正月右馬の頭例のごとく親王にまゐ見え奉らんとて、小野に參りたるに、其の邊りは名高き比叡山の麓なれば、折ふし雪高く積りたるを、推して親王の御所なる御室に到りまゐ見え奉るに、いつもながら親王は、淋しく何となく悲しげにおはしますゆゑ、やゝ久しく御側に侍り奉りて、過去のことゝも思ひ出づるまゝに御話し申し奉りきとなり。

むつきは正月の異名なり、御室とは貴族の出家して修行し給ふ御所をいひ來れり。

つれ〳〵と、いと物がなしくの詞、最もかなしく、今より追想するもあはれいはんかたなし。當時此の親王の御境界、業平朝臣の感情、いかゝありしか、思ひやるに餘りあり。

古への事など、とは彼の水無瀬に居給ひて右馬の頭も度々伺候したることより、今は引かへて山居して雪中にひきこもりおはします等の事など、數々思ひつゞけたるなるべし。

實に此の一節の如きは暗句節にして悲哀いと深し。右馬の頭が忠實の胸の、懷

書の涙に濕ひしことさも見るがごとし。

さても、さぶらひてしがなとおもへど、おほやけごともありければ、えさぶらはで、夕暮にかへるとて、

忘れては夢かとぞおもふ思ひきや。雪ふみ分けて君を見んとは。

とてなむなく〳〵來にける

大意　此のまゝにして幾久しく仕へ侍りたくは思へど、右馬の頭も公事を荷ひて身も心に任かせねば、殘念ながらも長く侍らひがたく日暮れに歸るとて此の歌よみてなく〳〵歸り來りたりとなり。

おほやけごととは業平朝臣の清和天皇へ仕へ奉れるをいひたるなり。

歌の意は現世にあることを忘れては實に夢かと思ふ。決して雪ふみわけてかゝる御室にて見奉らんことなどは思ひもそめざりきとなり。いふ心は、既にもいへりし如く、天皇の御位につき、天下をもしろしめすべき儲君の、此の如く雪中に閑居して、しかも世を日に物うく過ぐし給ふことあらんとは思はざりき

となり、[illegible]

惟喬親王の御返歌(本書にはなけれど)とて、左の歌を申し傳へたり。即ち『夢かとも思はむうつゝにもあらん。雪も跡なきをのゝがよひぢ』『夢かとも何か思はむ。うき世をば。そむかざりけん、ほどぞくやしき。』と。闕疑抄には此の返歌を、此の物語中に入れざりしは、粟平の歌別けてあはれ深き故にてさしおくかとあり。

實に此の一段の悲哀に堪へざることは、古人も既に云へり。『堯孝法印は此の段を讀みては必ず落涙せしとなり。片岡近江の守が堯孝をなかせんとては、わざと此の段をよみたりといひ傳へたりと御物語なり。』と闕疑抄に見ゆ。

右大將の奉れる石に歌そへたる條

昔たかい子と申す女御、おはしましけり。失せ給ひて七七日のみわざ、安祥寺にてしけり。右大將藤原の常行といふ人、いまそかりけり。

大意　たかい子と云ふ女御の逝去し給ひて四十九日の法事を、安祥寺に於て營みし時、右大將藤原の常行といふ人、行きて列席したりとなり。

みわざは法事のことを、ねんごろにいひたる言葉。いまそがりは、居るといふこと

とを、いと敬みていひたる詞なり。

其の御わざにまうで給ひて、かへさに、山科の禪師の親王おはします。其の山科の宮に、淵落し水奔らせなどして、おもしろく作られたるに、留で給ひて、年ごろよそにはつかうまつれど、近くはいまだ仕うまつらず。今宵は、こゝに候はむと申し給ふ。

大意　藤原常行右大將、たかい子女御の法事より歸りの途中、山科法親王の宮に寄りて、法親王にいふやう、年久しく、よそながらには仕へ奉れど、未だ近く御側には仕へ奉ること能はず。殘念に思ひしが、今宵は幸に御側に侍りて仕へまつらんとなり。

かへさには歸るさにといふに異らず。淵落し水奔らせは庭前の仕構へなり。

親王召び給ひて、よるのおましの設けせさせ給ふ。さるに、此の大將出でゝ、人にたはかり給ふやう、宮仕へ、の始めに、唯なほやは有るべき。三條のおほみゆきせし時、紀の國の千里の濱にありけるいと面白き石たてまつれりき。おほみゆきの後、奉れりしかば、ある人の御曹司の前の滝にすえたりしを、島このみ給ふ君なり。此石を奉らむとの給ひて、御隨身舍人して取りにつかはす。

大意　法親王右大將の今宵宿りて、御側に仕へ侍らんといふを喜び給ひて、夜の御坐など設け調へ給ふ。然るに彼の大將は出でゝ人に相談しけるやう、宮仕へ初に只默して止むべきにあらねば、さきに三條の大御幸せし時、紀州千里の濱にありきといふ見事なる石奉りしを、其の中髮なくて空しく或る曹司の前の澤に居えたりしに、此の親王は庭好み給へば此の石を奉らんとて、自身の隨身どもを石取りに遣はしたりとなり。

よるのおましは、夜の御坐のことなり。なほやはやむべきは、俗にいふ唯では居られぬの意なり。

三條は西三條良相公、即ち父君の邸、島このみは、泉水築山等を好み給ふといふに同じ。即ち庭好みのことなりと知るべし。

幾ばくもなくて持て來ぬ。此の石、聞きしより、見るはまされり。これをたゝに奉らば、すゝろなるべしとて、人々にうたよませ給ふ。

大意　やがて其の石を持參しぬ。此の石はもと話よりは見榮えあり。右大將はこれを此のまゝ奉るも興なきわざなるべしとて、人々に歌をよませ、さて、其の

歌をつけて奉らんとすとなり。

すゝろは、漫にて不興のといろなり。

右の馬の頭なりける人なん、青き苔をきざみて、時給のかたに、この歌をつけて奉りける。

あかねども、岩にぞかふる色見えぬ
といろを見せんよしのなければ。

とよめりけり。

大意　右の馬の頭、青き苔を刻みて其の石に、時給の如くに饋みし歌をつけて奉りきとなり。

歌の意は、不足にはあれど、岩に代へ表はして色をば見せ奉るよ、これまでは親王を思ふことの切なる心も見せ奉るべきよすがもなかりきとなり。なほ此の歌は、下の如く上下の句を轉倒して解すれば、容易に會得するを得べし。即ち、予が平素親王を思ひ奉る心は、よほど切なれども、其の心は色も香もなきものなれば、見せ奉らんよすがもなかりければ、不足ながら、今、この岩に代へ心を表は

して見せ來るとなり、

右の馬の頭は、業平朝臣のことなり、

あかねどもは、飽かぬどもにて、不足ながらといはんがごとし。岩にぞ代ふるは、岩に我が心を代へ表はせるの意なり。

源氏物語

源氏物語は、古は更なり、今も我が邦文壇の第一位に置かれ、國文學の華として愛賞せらる。今如何に其の文辭のめでたきかといふ一端を紹介せむに、紫家七論中に批評せる詞あり。即ち『此の物語のうち、和歌幷びに、詞ともに、萬葉、古今、伊勢物語、宇津保、竹取などの古躰を離れて、しかもおほどかに、易らかに、優しく、凡そ、我が國の風流を盡したれば、見る人をして、倦むことを知らざらしむ。誠に日本文の上なきものなり。全篇は、富貴温潤の氣象にして、宮樣の文章なれども、中には、山林、出世あり、市井、田家あり、貧困、哀傷あり、閨情、風懷は、卷毎に見えて、情を寫し、景を語ること、まのあたり其の人にむかひ、其の所に遊ぶがごとし。全體は傳にして、又、おのづから序の躰あり、跋あり、記あり、書ありて、諸躰備はり、……

論破あり、論承あり、論腹あり、論尾あり、風より細に入り、俗より雅に趨き、緊より閑に歸し、波瀾頓挫、照應、伏案などいふ、もろもろの文法、おのづから具はれり、其の氣脉は、悠暢として、寛裕に、其の文勢は、圓活にして、婉曲なり。之れを漢文にて見れば、史記、莊子、韓、柳、歐、蘇にひとしかるべしと。』最も肯綮を得たる評論のごとし。既に之れを以て公平の批評なりとせば、本書の外延、即ち躰裁の如何に關ひ、如何にめでたきかは知るに足らむ。さらば其内包、即ち本書の性質、趣向はいかんといふに、光源氏の君を主人と仮きて、これに四圍より種々の原象を綴綿して、人情風俗上の事を論敘したる一大小説なることは、世既に熟知するところなり。今こゝに委しくいふを須たず。然るに本書の成れる由來に就きては、案外に異説あり、或は著者が世の風俗に慨する所ありて、勸善の爲め、懲惡の爲めに物したりといひ、或は諷刺的事實小説なりといひ、其外何にかと牽強附會して、其の由來を説明すれども、いづれもひがごとなり。本居翁の『大かた物語は、世の中にありとある善き事、惡しき事、珍らしき事、をかしき事、而白き事、哀れなる事のさま〳〵を、かきあらはして、其の樣を繪にも書き交へなどして、徒然なる程の

玩びにし又は心の結ぼれて物思はしき折などの、慰めにもし、世の中のある樣を心得て物の哀れをも知るものなり。』といはれしこそ、貴き既明なれ、實にも小說は其の目的專ら人の感情に訴ふること、古今も勝かず、東西も異ならず、讀者が感情の上にしかも判斷悟了するところあらば、そは勸善懲惡ともなり、亦諷刺の効力をもあらはすべし、最初より、しかとばかり、附會するは正しき論にはあらざらむ、されば本書の如きも、物の哀れのいと切なる感情を主として寫し出でたれば、淫猥、讀むに堪へざる記事もなきにあらず、蓋しこは當時上下の風情の此の小說上に寫し出だされたるものなりといふに過ぎずして、故らに風俗紊亂の罪を作りたるものとは見るべからざるなり。

さて、此の源氏物語の紫式部の手に成れることは、離れ知らぬものもなからん。然れども、其の人物を評するに於ては、往々毀譽、偏に過ぐることあり、或は、此の小說の淫猥なる記事をもてるより、著者は淫奔なる女子なりといひ、又は不貞の女性などいふ、そは輕忽の評にして、人を誤るものなり。今一言、その人となり、及び經歷の一斑を紹介せんに、其の傳の委はしき事はわからざれ

と、紫家七論によれば、式部は左衞門權佐、藤原宣孝朝臣に嫁して、大貳二位、狹衣物語の作者なりといふと辨、局とを生みて、後、長保三年四月に、夫宣孝みまかりしかば、四五年ばかり寡居してありしが、寛弘二三年の比より、上東門院へ宮仕へに出でられし樣なりと記し、又此の物語、作られたるは、其寡居の程の事なる由、並びに、万壽二年の比までながらへて、上東門院へ仕へたる由も委しく記せり。元來式部は、夫宣孝に別れてより、其が菩提の爲に尼にならんの本意なりしが、さては二人の女子の生先も覺束なくて、二女の生長を待ちつゝ、心ならずも上東門院に宮仕へしたりしものなり。其の他式部が人となりは、其の歌にも文にもあらはれて、婦德高き貞操のものなりしことは、疑ふべくもあらず、かばかり才學あるも人に誇らず、寧ろ深く其の能を隱して、人に謙りたる等は紫式部日記等に明らかなり。誰れか紫式部を評して淫奔不貞の婦女などいふものぞ、彼の枕草紙を物したる清少納言と比すべからず、同じく超世的文學の才能ある清少納言の紫式部に及ばぬところは、蓋し此の女德の點にあり

源氏物語の註釋にては、萩原廣道の物したる「源氏物語評釋」及、北村季吟の著は

したる「源氏湖月抄」を以て第一とす。讀者此の二書によりて研究せば益し不足
わらざらむ。

こゝにても該二書を參考して、歴代文學に抜戯したる前二條、即ち、桐壺の更衣
のなきあとの條と、何某院の變化の條とを講ずることゝすべし。

桐壺の更衣のなきあとの條

野分たちて俄に肌寒き夕暮のほど、常よりもおぼしいづること多くて、御負の命婦
といふをつかはす。

大意　御門は更衣の失せて後は御悲み遣らん方なく、唯涙にのみ咽び給へば、
此の有樣を見奉る人の袖も、げに露けき秋なり。雨の朝、風の夕には、必ず親しき
女房を故更衣の里へつかはし給ひて、若宮の消息及、北の方の起居を問はせ給
へり。されば、ある日秋風立ちて俄に肌寒く覺ゆる夕、常よりも一しほ戀しく思
し召して、一人の命婦を遣はし給ふとなり。

桐壺　は御殿中なる一局の名、即此の卷にいへる更衣の住みたりし所なれば、
やがて此の卷を桐壺といふ。

更衣　は、もと、天子の御衣をめし更へ給ふ女官の名なり。更衣の資格は女御の
次、女御といふは皇后の次に立つ女官なり。

野分　は秋季に至りて強く吹く風のこと、たちては、野分の風の吹き立つこと。

肌寒き夕暮のほど　は、野分の風吹き立ち、衣を通して、俄に肌に寒冷を覺ゆる
にて、俄に秋風立ちて、肌寒く覺ゆる夕暮なれば、一しほ人戀しく思し召すこと
をいひあらはしたるところなり。

御負　は、ゆげひと讀み、ゆきをおふ人、即ち衛門の官なり。御負の官人の女を、父
の官を呼びてしかいふ也。

命婦　は、位ある女官をいふ。而して五位の女官を内命婦といひ、又五位以上の
人の妻を外命婦といふ。評釋に今の世に内侍の外織物を着せぬ中臈を共に命
婦と號せりとあり。

夕月夜のをかしきほどに、いだしたてさせ給ひて、やがてながめおはします。かうや
うのをりは、御遊びなどせさせ給ひしに、こゝろことなる物のねをかきならしはか
なくきこえ出づる音の葉も、人よりはことなりしけはいかたちの、おもかげにつと

そひてゐぬさるゝもやみのうつゝには、なほ劣りけり。

大意　夕方の月夜のいと面白きに、命婦を故更衣をかたへ出しやりて、其の儀御門は、いとり、欄干に倚り、あちこちの景色を眺め給ふに、昔、かゝる折に、故更衣の管絃など巧にかきならして、和歌さへさも面白く詠みしおもかげのフト見え給ふもげに夢のこゝちせらるゝとなり。

夕月夜　は、ゆぶづくよと讀みて、夕方の月夜、こゝには八月十日ごろのさまをいへるものなり。

やがてながめはします　は、命婦を出し遣り給ひても、なほそのまゝ打ながめはしますとなり。物戀しき心のさま寫し得たる詞なり。

かうやうのをり　は、かくやうの音便にて、かゝる夕月夜のめでたくあはれなる時はの意、昔更衣の居たりし時のことなり、

こゝろことなる物のねは、特別に巧妙なる管絃の音をいへるなり。

はかなく聞え出づる昔の薬　は、ツと何となく詠み出づる和歌といふに同じ。

げはひ　は、物の氣にて、心に其樣子の見え聞こえ、又は感ぜらるゝをいふなり。

おもかげ　は、面影なり、俤ともかく、即、かほのかたち、又は何となく其の物のほのかに、そこに見ゆるやうに覺ゆるをいふ。

やみのうつゝ　は、古歌の「うばたまの、やみのうつゝは、さだかなる、夢にいくらもまさらざりけり」といへるを引用し、こゝには、なほその歌の眞の如く夢にも劣る境遇そとなり。

命婦かしこにはかでつきて、かどひきいるゝより、げはひわはれなり。やもめずみなれど、人ひとりの御かしづきにとかくつくろひたてゝ、めやすきほどにて、すぐし給ひつるを、やみにくれて、ふししづみ給へるほどに、草も高くなり、野分にいとゞ荒れたる心地して、月かげばかりぞ、やへむぐらにも障らずさしいりたる。

大意　御使なる命婦は彼の故更衣の里に到りて、其あたりを見るに物の景色いと凄まし。北の方は後家住みなれど、始めのほどは、故更衣の爲にとて、普通可なりの造作にて、見苦しからぬ躰裁なりしを、更衣世を去りて後は、母は、實に親心のやみぢに暮れまどひて、庭に雜草もおひしげり、ことに、野分に一層荒れまさりたり。たゞ月影のみ八重葎にもさはらずさしいりていとあはれなりとな

り。

かどひきいるゝより　は乘り來たる車を門よりひきいるゝのいひなり。

やもめずみ　は寡居をいふ。此の母君の夫中納言殿といふは、早く世を去りし由なり。

かしづき　は、もと、頭衝にて、頭を地につきて敬ふ意より出でたるなるが、限りては大切に養育することにいへり。こゝにもそのことに用ひたるなり。

とかくつくろひたてゝ　は、何かと修飾を加へてと謂ふに同じ。

めやすきほどにて　は、見ぐるしからぬ位にといふと異ならず。

やみにくれて　は、古歌の「人のおやの、こゝろは、やみにあらねども、子を思ふみちにまどひぬるかな。」といへる詞をほのめかしていひたるものなり。即母の故更衣を悲み戀へる歎きにくれまどひて臥し沈みたるを、一しほふかく形容したるなり。

草も高くなり　は住居をとりつくろはず、且人の出入のまれなるさまをいひたるものなり。

やへむぐらにもさはらず　古歌の「とふ人も、なき宿なれど、くる春は、やへむぐらにも、さはらざりけり」とあるを、春と月とをかへて引用したるものなりと、草高ければ人の入るには障れども、人ならぬ月の入るには障らずとなり。

月ばかりは障らず入るといふさびしさを形容せし詞いとおもしろし。

南おもてにおろして、母君とみに、え物の給はず

大意　命婦車より南面に下りて更衣の母に對面するに、はじめのほどは、互に顔見合はすばかりにて、母君、急には、詞も口に出でざりしとなり、なつかしく、且悲しき情、思ふべし。

南面とは家の正面をいふ。それは普通の家は皆南向に作りたるより、家の正面の事をかくいふ。

今までとまり侍るが、いと憂きを、かゝる御使の、よもぎふの露分け入り給ふにつけても、いと耻しうなん

大意　今日まで生き殘りしさへ憂きことなるに、剩へ貴きあたりよりありがたき御使の此のむさくるしき家に、分け入り給ふにつけても、尙ほ耻しさまさ

るとなりこれ母の詞なり。

よもぎふは、蓬生にて、むさくるしきところと卑下していふ詞なり。

とてげにえ堪ふまじくない給ふ。

大意　おのづから明らかなり。ない給ふはなき給ふの音便なり。

參りては、いとゝ心苦しう、心肝もつくるやうになんと内侍のすけの奏し給ひしと、物思ひたまへ知らぬこゝちにもげにこそいとしのびがたう侍りけれとてやゝためらひておほせごと傳へ聞こゆ。

大意　曩に内侍のすけなる女房を御使に遣はされしとき歸りまゐりて、人傳にきゝしよりは一入こゝろやきもゝつぶるゝばかり悲しうこそ覺ゆれと奏上したりしを、只今我が身參りて見奉れば何も知らぬ心地にもげに堪へがたう覺ゆと命婦のいへる詞なり。

いとゝ心苦しう心肝もつくるやうになん　はさきに御使にたちたる内侍のすけの詞なるを先づ知らざるべからず。

奏しは天皇へ申上るとなり。物思ひ給へ知らぬとは物思ひ知り奉らぬとい

ふに同じ。給へとは今の詞に奉るといふべき所につかふ、當時の敬語なり。やゝためらひて　はしばらく猶豫してといはんがごとし。

おほせごと聞こゆ　は御門の仰を傳へ云ふことなり。その仰言は次にあり。

しばしは夢かとのみたどられしを、やう〳〵思ひしづまるにしも、覺むべきかたなく、堪へがたきは、いかにすべきわざにかとも、問ひ合はすべき人だになきを、しのびては參り給ひなんや。わかみやのいとおぼつかなく、露けき中にすべし給ふも、心苦しうおぼさるゝをとく參り給へなど、はか〳〵しうも、のたまはせやらず。こせかへらせ給ひつゝ、且は人も心よわく見奉るならんとおぼしつゝまぬにしもあらぬ、御げしきの心苦しさにうけたまはりもはてぬやうにてなん、まかり侍りぬる。」とて御文たてまつる。

大意　あまりのことに暫時は、夢かと疑はれしを、やう〳〵思ひ鎮まるにも、尙醒むる方なく、忍びがたきは、如何にすべきと問合すべき人さへなければそを推量して、母人參内あるべし若宮の露けき所に在はするも亦心苦しく覺ゆるほどに、疾く參内あれよ云々との仰言ありけれど、御門は、そも明らかには宣ひ

乘て痛く涙に咽せかへり給ひつゝ且は人の心に如何に見下げられんとの御樣子なりければ、猶ほ、承り殘すやうにて參りたりと口上に述べて御文をたてまつりたりとなり。

露けき中　折から秋なれば露けきといへるが、その意は涙がちなる憂の中といふことなり。

はが〳〵しう　はたしかなることをいへり。こゝにては明かにといひてもきこゆるなり。

月も見え侍らぬに、かくかしこきおほせごとを光にてなんとて見給ふ。

大意　母、御文を拜受して目も見えぬに添き仰言なれば九重の光にて見奉らんとて見給ふとなり。御文の詞は次にあり。

ほどへば、少しうちまぎるゝこともやと、待ち過ぐす月日にそへて、いとしのびがたき、はわりなきわざになん、いはけなき人も、いかにと思ひやりつゝ、もろともにはぐゝまぬおほつかなさを、今は猶昔の形見になづらへて、ものし給へなど細かに書かせ給へり。

宮城野の露ふきむすぶ風の音に、
　ことはぎがもとを、思ひこそすれ。

とあれば、え見給ひはてず。

ほどへばより、なずらへてものし給へまでは御文の詞なり。これを俗譯すれば月日移りゆかば、せめては思ひもうすらぐらんと、過ぎ行くを待てば却ていよ〳〵忍びがたくなるも、かなしきことなり。われも、其許と共に、養育せざるが、覺束なければ、今は若宮を故更衣の形見と思ひて具して參內せよとの心なり。かくと御文認めさせられて、尙ほ文末に宮城野云々の歌あれど母は其處までは悲しさに堪へで得讀み行かずとなり。

わりなく　は、無道理なることなりといはんがことし。

もろともにはぐゝまぬ　は、若宮里におはしまして、祖母一人の手にて養育せられて、帝が若宮の祖母と諸共に得養育し給はぬをいふなり。

はぐゝむ　は養ひ育つること、むかしのかたみになぞらへて　若宮を更衣の形見ぞと思ひて、具し奉りて參

り給へ、われもそこもろともにはぐくまんとの心なり。

歌の意は秋風立ちて、禁中にもそゞろに涙の催ほさるゝに、つけて若宮の上をもいかにと思ふとの意なり。

宮城野　は陸奥の名所なり。一方よりは宮中に縁をとり、一方よりはと露風といはんために縁を求めたるなり。

こはき　は小萩にて兄に縁をとり、又一方より野と露と風とにちなみて用ひたることばなり、

命長さのいとつらう思ひ給へしらるゝに、松の思はんことだに、恥かしう思ひ給へ侍れば、もゝしきにゆきかひ侍らんことは、まして、いと憚り多くなん。かしこき仰せごとをたび〳〵うけ給はりながら、みづからはえなん思ひ給へたつまじき。若宮は、いかにおもほしけるにか、參り給はんことをのみなん、おほし急ぐめれば、ことわりに悲しう見奉り侍りなどうちうち思ひ給ふるさまを、奏し給へ。ゆゝしき身に侍れば、かくておはしますも、いま〳〵しう、かたじけなくなどの給ふ。

大意　命長ければ則辱め多きを人に交はらんは、恥しきことなれば、禁中に參

内せんもわまり憚り多きことなり。これよりさきにも幾度も御使はありけれど、吾心には參内思ひ立たず。若宮には何如に思し召し給ふか、禁中へ參らんことを思召す樣なるも御道理と見奉り思ふさまを御門へ奏上し給へ。若宮は大切なる御身なれば、この遙生のむさきところに、とめおき奉るも恐れ多きことなりとなり。

松の思はんことだに　は、古歌の『いかにして、ありとしられし、高砂の、松の思はんこともはづかし』を引用したるものなり。その意は、つれなくながらへて、高砂の松とひとしく人に知られんも恥かしとのこゝろなり。

もしき　はもと大宮の祝詞なりしが、やがて大宮の事に用ふるに至りたり。

ことわり　は俗に云ふ御尤に同じ。

宮は大との籠りにけり、見たてまつりし、委しく御有樣も奏し侍らまつしきを、待ちおはしますらんを夜更け侍りぬべしとて急ぐ。

大意　宮樣はもはや御寢入り遊ばしたるな、御目ざめならば若宮を見奉りて委細なる御樣子を申上げんと思へど、禁中にては御門御返事待ち給ふなるへ

しはや夜もふけぬとて歸り仕たくを急ぐとなり。宮は大とのごもりにけりより夜更け侍りぬべしまでは、命婦のことばなり。

くれまどふ心のやみも堪へがたき片端をだに、はる〳〵ばかりに聞こえまほしう侍るを、私にも、心のどかにまかで給へ。としごろうれしく、おもたゝしきついでにのみたちより給ひしものを、かゝる御せうそこにて見奉るかへす〳〵つれなき命にも侍るかな。

大意　子を思ふ道に暮れ迷ふ心の闇の、少しにても物語り申して慰のなきを、いそぎの御事なれば、又御用の際に來給へかし。更衣が存生の時は面目なる事時にのみ立寄り給ひしものを、此の度はかなしきことにての御出とは、げにつれなき吾が命なりとて母の詞より。尙ほつゝきて次にあり。

はる〳〵　は晴れかすの約言にて晴らす意なり。

私にも　とは、此度は公のつかひなれど、時々私にも來給へるなり。

まかで給へ　罷り出で給へ、即、宮中を退出してこゝに來たまへの意なり。

おもたゝしき　は面起たしきにて面を起こすの意なり。

生れし時より、思ふこゝろありし人にて、故大納言いまはとなるまで唯この人の宮仕へのほい、必らず遂げさせ奉れ。我れなくなりぬとて、くちをしう思ひくづほるなと、かへす〳〵いさめおかれ侍りしかば、はか〳〵しう後見思ふ人なきまゝにらひは、なか〳〵なるべき事と思ひ給へながらたゞ彼の遺言をたがへじとばかりに、いだしたて侍りしを、

大意　更衣事、生れて幼少の時より、宮仕への心ありしものにて。父大納言今は際まで「吾が子の宮仕へ本意の通り遂げよ、我れ死なばとて中止するなかれ」と度々くりかへして遺言せられしかば、確かなる後見の人なきを知りながらも、遺言に違ふまじとて宮に入れしにとなり。母の詞尙ほ次につゞけり。

思ふこゝろありし　は、更衣の宮仕へして、御寵愛を蒙る事もあらばいみじき家の榮譽と思ひしをいふ。

いまは　は、命旦夕にせまりたる時、即、死にきはのことをいふ。

宮仕へのほい　上に思ふこゝろありしといへるも、即、此の本意なり。ほいは、本意の略音と心得べし。

くづほる　は、頽るゝこと、又は中止の意なるべし。

身にあまるまでの御心ざしの、よろづにかたじけなきに、人げなき恥を隱しつゝ、まじらひ給ふめりつるを、人のそねみ深くつもりやすからぬこと多くなりそひ侍るに、よこさまなるやうにて、遂にかくなり侍りぬれば、かへりては、つらくなんかしこき御志を思ひ給へ侍る。これもわりなき心のやみになんといひもやらず、むせかへり給ふほどに、夜もふけぬ。

大意　更衣、宮に入りてより、過分の御寵愛蒙りて、御心用るの何事にまれ、長れ多く忝じけなきに、人には人とも思はれざる耻を意とせずして過ぐしゝを、遂に人の嫉妬深く積りて、病も重くなりゆき、唯ならぬ樣子にて、此の世を去りぬれば御寵愛の甚しきは、却りて更衣の煩となりたりと、今より思ふも、亦無理なる親心の闇なり云々といひも終らず、疾く涙に咽せ返へるほどに夜はやうやく更け行きたりとなり。

ひとげなき　は人氣なきにて、いと輕蔑せられて、人らしくもてなされぬをいへるなり。

よこさまなるやうにて　は、あまり御寵愛のすぎて人のそねみつもりて、そが爲めに死に失せたれば横死の如く思はるゝとなり。

上もしかなん。わか御心ながら、あながちに人目驚くばかり、おほされしも、ながゝるまじきなりけり。といまはつらかりける人のちぎりになん。世にいさゝかも、人の心を曲げたることあらじと思ふを、たゞこの人故にて、あまたさるまじき人のうらみをおひしはて〳〵は、かうちすてられて、心をさめん方なきにいとゞ人わろく、かたくなになりはつるも、さきの世ゆかしうなん。どうちかへしつゝ、御しほたれがちにのみおはしますとかたりて、つきせずなく〳〵夜いたう更けぬれば、こよひすぐさず御返り奏せんとていそきまるる。

大意　御門の仰言も只今の御物語りと同じことなり、あながちに人の彼れ此れいふほど、わが心に入りしも、契りの短かゝるべき前表なり。世に少しにても、人の心など曲げたることなきを、唯こ故更衣ゆゑ、人よりも怨みを受けてその果は、更衣にはかく打ち捨てられ、今の悲しみ遣らん方なく、人に笑はるゝ頑愚の闇路に陷りたるも、前世の約束は、いかにありけんなど、かへす〳〵御袖う

るほさるゝなりとて泣きつ暇りつする程に、夜もます〳〵更けぬれば、命婦は、かやうに、互に種々語り盡さんとせば、夜も明けぬべし。今宵のうちに、御返事奏上せんとて別れ歸らんとするなり。

世にいさゝかも　とは、他に掟曲げたることは少しもなしとなり。そのうちには更衣故には、みだれたまへるとなり。

しほたれがち　涙がちといふにおなじ。

かたりてつきせず　は、物語して盡きぬことなり。

月は入りかたの空清う澄みわたれるに、風いとすゞしく吹きて、草むらの虫のこゑ〳〵、もよほしがほなるも、立ち離れにくき草のもとなり。

大意　月は入り方の影細く、空いと清らかにさえ渡り、野分の風肌に涼しく覺え叢の虫も聲々になきて、悲しさ催うすれば、其の住居を俄に見捨てゝ去り難しとなり。

月は入りがたの　の云々は、上の「夕月夜のをかしき」「月かげばかりぞ」等に照應して物淋びしき景色を形容したるものなり。

風いとすゞしく　云々は、上の「野風立ちて」「野分にいとゞあれたる」等を受けて、こゝにては荒かりし風のやう〳〵吹きしづまりたるをいへるにて、淋しさを垣さむ下心なり。

草むら　は、叢にて、上の「草もたかくなり」「やへむぐら」「よもぎふ」などに應じて更に虫の聲を添へたるなり。

もよほしがほなる　は、顏に涙を催うすさまをいへるなり。

草のもとなり　は、蓬生のうちといはんが如し、そのあはれなる、風情をいへるなり。

すゞむしの聲のかぎりを、つくしても、

ながき夜、あかずふるなみだかな。

えものりやらず。

大意　命婦去り難く、此の歌を讀み、車に上る力もなき有樣なり、歌の意は叢なるすゞ虫の如く、聲のかぎりを盡くして歎きても、此の比の秋夜の長きにもあきたらで、涙の出でくるとなり。

すゝむし　を特に草むらの虫の中より取り出でたるは、後に「ふる」といひ出でんためなり。

ふるなみだ　とは、涙の出ることを雨のふるにいひたるものなり。

いとゞしく、虫のねしげき、あさぢふに、

（一八八）

つゆおき添ふる、雲のうへ人。

大意　これ母の歌にて、悲しきが上に命婦の哀れを添へしをかこちたるなり。

歌の意は悲歎することしげき宿に涙を流し添ふる人よとの意なり。

雲のうへ人　は、勅使たる命婦をさしていへるものなり。

かごともきこえつべくなん。といはせ給ふ。

大意　かこちごともいふべきとて、既に車に乘りなどする命婦に向ひて、此の返歌を傳へしめしとなり。

をかしき御送り物など、あるべきをりにもあらねば、たゞかの御形見にとて、かゝる用もやと、のこしおき給へりける。御さうぞくひとくだり御ぐしあげのてうどめく物そへ給ふ。

大意　悲歎の折節、風流の贈り物をなすべきにあらねば、更衣の紀念なりとて、かやうの事もやと思ひ、兼ねて用意のありし裝束一領、及髮揚の道具どもを添へて贈りぬるなり。

送り物　は、普通の贈り物と異り、客の歸るを送る時に贈るものをいへるなり。

てうど　は、調度にて、今、俗に云ふ道具なり。御くしあげのてうどゝは即髮揚の道具にて、鋏櫛の類をいへるなるべし。

わかき人々かなしきことは更にもいはず、内わたりを朝夕にならひて、いとさう〳〵しく、うへの御ありさまなど、思ひいできこゆれば、とくまゐり給はんことを、そゝのかし聞こゆれど、かくいま〳〵しき身のそひ奉らんも、いと人ぎゝうかるべし。又見奉らで、しばしもあらんは、いとうしろめたう思ひ聞え給ひて、すがすがともえまゐらせ奉り給はぬなりけり。

大意　若宮につきそふ若き女房たちは更衣のことにつきての悲歎はいふまでもなく、禁中の人、あまたなるおもしろき所に、住みなれし故蓬生の門は、殊に寂しく御門の御有樣など常に思ひがちなれば、母北方にすゝめてとく參らん

（一八九）

と誘ひそゝのかせども、母は、かく老い惚れたる身の、若宮に添はりて、參内するも人の聞えもよろしからざらん。母さればとて又若宮のみ、ひとり參内せられんも、心もとなしと思ひて、速に若宮をば遣はし奉らざりしとなり。

さう〳〵しく　は、寂寞なるをいふ。

うしろめたき　は、心もとなきこと、

すが〳〵　は、俗にサッパリといはん程なり。

命婦は、まだおほとのごもらせ給はざりけるをあはれに見たてまつる。

是より命婦がかへりたることをかたるが、その歸へるところは省きて、命婦が思ふこゝろより書きいでたるなり。

大意　命婦は御門の未だ寢に就き給はざるを見奉りて、その御心のほど察しまゐらせられ、ます〳〵あはれを催しぬとなり。

おほとのこもらす　は寢に就かせ給ふことを云ふ。

おまくのつぼせんざいの、いとおもしろきさかりなるを、御らんずるやうにて、しのびやかに心にくきかぎりの女房四五人、さぶらはせ給ひて、御物がたりせさせ給ふ

なりけり。

大意　御門は前庭のいと面白く、盛りなるを御覽ずるさまにて、忍びやかに四五人の侍女を御相手に種々の御物がたりをなし給ふとなり。

御らんずるやう　とは、心には命婦の歸りを待ち給へども表面には前栽の草花を御らんずるさまなりとのこゝろなり。

心にくきかぎり　とは、數多女房中の奥ゆかしき分どもをの意なり。

このころあけくれ御覽ずる長恨歌の御繪、亭子院のかゝせ給ひて、伊勢貫之によませ給へる、大和言葉をも、もろこしのうたをも、唯そのすぢをぞまくらごとにせさせ給ふ。

大意　御門は此の頃朝夕に御覽ずる、長恨歌の繪に、亭子院や、伊勢貫之等の贊したる歌をも、同じ唐土の詩をも、皆その妻に別れし條を常に暗誦し給ふとなり。

いとこまやかに有樣を問はせ給ふ。あはれなりつることとしのびやかに奏す。

大意　時に待ち詫ひ給ひし命婦歸り來りたれば、母の有樣を細かに尋ね給ふ。

よりて命婦は、物語りの次第などを、又恐びやかに申しあげしとなり。

（一九二）

御返り御覽ずれば、「いともかしこきは、おきどころも侍らず。かゝる仰せ言につけても、かきくらすみだりごゝちになん」

これ母より返事の詞なり。俗譯すれば、「忝き勅書給はりしは、誠に恐れ多きと、なり、かゝるみことのりにつけても、老のこゝろは、いよ〳〵ます〳〵闇路に迷ひぬとなん、

あらき風、ふせぎしかげの、かれしより、

小萩かうへぞ、しつこゝろなき。

これは返事のふみに添へたる、母の歌にて、其の大意は、大切に養育し奉るべき母更衣はうせて、御子のうへ、まこと心もとなしとなり。

小萩　は子をかねたる詞にて源氏の君をいへるなり。

しづこゝろなき　は靜心なきにても心もとなく安心ならぬをいふ。

などやうに、みだりかはしきを、心をさめざりけるほど、御覽しゆるすべし。いとかうしも見えじとおぼししづむれど、更にえしのびあへさせ給はず。御覽じ始めし年月

の事さへかきあつめ、よろづにおぼしつゞけられて、時の間もおぼつかなかりしを、かくても月日はへにけりと。あさましうおぼしめさる。

大意　御門はこの亂れがましき歌をも此の程のことゝて許し給ふなるべし。

さて御門は、かく心弱き御愁歎の容子を、人には覺られまじと思ひとゞめ給へども、なか〳〵に忍びがたき御有樣にて、更衣の參內せし初めより、今までの事ども彼れ此れと思ひつゞけられて、更衣の世にありし時は、暫時分るゝだに尙ほ暮はしかりしに、亡せて後は見もせぬに月日はたつものかなと常に御心細う思し暮らし給ふとなり。

時の間　は暫時のことをいふ。

故大納の遺言あやまたず。宮つかへのほい、ふかく物したりしよろこびは、かひあるさまにとこそ思ひわたりつれ。いふかひなしやと。打の給はせて、いとあはれにをぼしやる。かくてもをのづから若宮などおひいで給はゞ、さるべきついでもありなん。命ながくてこそ思ひぬんぜよなどのたまはす。

大意　なほ命婦より、故更衣の父、故大納言の遺言とて母の物語りしたること

（一九三）

をきゝ給ひては、益々更衣をはやく女御とだに上ほせられざりしを悔み給ひて大納言が遺言の如く入内させたるに就いてその喜び即返禮はかひある樣にと思ひしを今はいかにともせんすべなし。せめては若宮など成人しなば、祖母に對して相應の報いもすべし。命長くて待つこそよからめなどのたまふとなり。

おひいで　は、成長のことをいふ。

かのおくりもの御覽ぜさす。なき人のすみかたづねいでたりけん、しるしのかんざしならましかばとおもほすもいとかひなし。

大意　母より命婦へ贈りたる彼の形見の品を御覽ずるに唐土の故事を想ひ出て給ふも、此の形見は、故更衣手渡しの品にあらざれば又甲斐なしと思し召さるとなり。

なき人のすみか尋ね出てたりけん　とは、朝夕誦んじ給へる長恨歌中の故事、温『臨邛の道士鴻都の客、能く精誠を以て魂魄を致す、君王展轉の思を感ぜしめんが爲に、遂に方士をして慇懃に覓めしむ云々唯舊物を將て深情を表はす、鈿

合金釵寄せ將て去らしむ、釵は一服を留め、合は一扇釵は黄金を擘き合は鈿を分つ、但心をして金鈿の堅に似しむ云々』とあるをいへるなり。

たづねゆく、まぼろしもがな。つてにても、

たまのありかを、そことしるべし。

歌意　幻術を行ふ人もあれかし。そを傳にしても更衣の靈のありところだにしらはやと御門のよみ給へる歌なり。

まぼろし　は、幻にて即方士をいふものなり。

ゑにかける楊貴妃のかたちは、いみじき繪師といへども、筆かぎりありければいとにほひすくなし。太液の芙蓉、未央の柳も、げにかよひたりしかたちを、からめいたるよろひは、うるはしうこそありけめ。なつかしくちうたげなりしを、おぼしいづるに、花鳥の色にも音にもよそふべきかたぞなき。おさゆふのことぐさにも、羽をならべ枝をかはさんと、ちぎらせ給ひしに、かなはぎりけるいのちのほどぞ、つきせずうらめしき。

大意　繪に寫したる楊貴妃の顔は、巧なる畫工の筆に成れると雖、もと筆に限

りあるものなれば、かゝ〳〵實の形容には及ばず、又太液の芙蓉、未央の柳、或は揚貴妃の顏に似たるも、その裝束の唐めきて吾が國風ならねば、さしてなつかしとも見えず。從て御門は唯更衣の實の顏こそ見まほしけれ。麗はしき花の匂ひも珍らしき鳥の音も比ふべきにあらずと悲み給ふ。あはれ昔は朝夕の戯にさへ比翼の鳥とやならん、連理の枝とやならんと契りしものを、まゝならぬ人の命こそとよなくうらめしけれとなり。

太液の芙蓉、未央の柳　とは、長恨歌にいふところ、其の下の句に、芙蓉は面の如く柳は眉の如しとあり。太液は唐の池の名、未央は玄宗皇帝の宮殿の名なり。

けにかよひたりしかたち　は、氣色容躰の似通ひたるをいふ。

花鳥の色にも音にも　とは、彼の美人楊貴妃は猶ほ太液の芙蓉、未央の柳にもたとへられしが、更衣は、左樣にたとふべき物もなくすぐれたりしとのこころなり。

羽をならべ枝をかはさん　は、長恨歌に、謂はゆる「天に在つては願くは比翼の鳥とならん地に在つては願くは連理の枝とならん」なり。

風のおと虫のねにつけても、物のみかなしうおぼさるゝに、弘徽殿には、久しう上の御局にもまうのぼり給はず、月のおもしろきに夜ふくるまで、あそびをぞし給ふなる。いとすさまじう、ものしときこしめす。此の頃の御けしきを見奉る、うへ人女房などは、かたはらいたしときゝけり。いとおしたちかど〳〵しき所、ものし給ふ御かたにて、ことにもあらずおぼしけちてもてなし給ふなるべし。

大意　御門は風の音、虫の聲につけても戀慕の情のみ起し給ふを弘徽殿には久しう知らず顏にて、月の面白きを機會として夜の更くるまで管絃の御遊びあるを御門は如何なる御心にて聞き給ふらん。殿上人の多くは時宜に叶はざるを片腹痛しと思ひたりとなり。

上の御局　とは、御門の所の御座所なる清涼殿中の一室なり。

まうのぼり給はず　は、參上し給はずといはむがごとし。

すさまじう　は、俗にいふ不用らしくのこゝろなり。

ものしときこしめす　は、厭はしく氣障りにし給ふこゝろなり。

かど〳〵しき　は、心にかどありて意地わるきをいへるなり。